日常物語

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日常物語

【Ｎコード】
Ｎ１１２８Ｕ

【作者名】
クロネコ

【あらすじ】
化物語が好きでなんとなく登録して勢いだけで書くので内容・誤字・脱字が酷いかもしれませんが暇つぶし程度に見て頂けると嬉しいです。
最初に言っときますが本当に適当にグダグダした内容が多かったりキャラが崩壊したり設定無視があると思いますがそこはご勘弁を～。

※この物語は、阿良々木暦の平凡な日常を淡々と描くものです。過度な期待はしないでください。

こよみデイリー（前書き）

人はそれぞれ日によって嬉しかったり、怒ったり、悲しかったり、楽しかったりがある。
それは僕も例外ではない。
これは、彼女である戦場ヶ原、後輩である神原、一番の友達である八九時、大事な妹キャラの千石、愛すべき羽川、一生のパートナーである忍、一番のお人好しの忍野、僕のでっかい方の妹である火憐ちゃん、ちっさい方の妹である月火ちゃんとの日々の何でもない話である。
今回はそんな僕の周りで起きる日常の出来事を晒そうと思う。

こよみデイリー

今日はとある夏の平日の最終日である金曜の放課後である。
周りではクラスメイトが土日の予定を話合ってる子達もいる。

そんな僕はというと戦場ヶ原待ちである。
話があるということで僕は今席を外している戦場ヶ原を待っているのである。

「あら、こんなところに大きな犬の死骸が転がってると思ったら阿良々君じゃない。」

「人を待たせておいて戻って来た一言目がそれかよ!!」

「アーワルカッタワネ。サーセン。サーセン。」

「謝る気一切ねぇなぁ!!」

「何よ、うるさいわね。阿良々木君なんて私の中の人がいなかったらリクの少年の時の回想が出来なかったのよ。」

「出てきていきなりメタ発言かよ!!」

「当たり前じゃない。私は戦場ヶ原ひたぎよ。」

「だから何だよ!!何堂々と自分が一番偉いみたいなこと言ってんだよ!!」

「ギャーギャーうるさいわね。そんなことより阿良々木君。」

「自分で振っといてそれかよ。何だ？」

「週末、海に行きます。」

こよみデイリー（後書き）

とりあえず1ページだけ途中まで書いてみました。
どうだったでしょうか？

まぁ思った以上に酷い内容ですが、これから良くなったらいいなと思っています。

こよみデイリー　2（前書き）

早くも挫折しそうななってまいりました。
まぁぼちぼちとがんばっていきます。

「週末、海に行きます。」

この一言を聞いてテンションがＭＡＸになるのはそう時間はかからなかった。

「違うわ。こうじゃないわ。海に……海に行き……海に行き……ませんか？……海に行っ……たらどうな……です。海に行きましょう、阿良々木君。」

「結局そこに落ち着くんだな。」

「何？嫌なの？」

「いえ、行きます！！行きたいです！！行かして下さい、戦場ヶ原ひたぎさん！！」

「そ、ならよかった。」

こうしてガハラさんとの海デートが決まった。

「一応話はこれで終わったのだけれど。ゴミ……阿良々木君はまだ帰らないの？」

「今自分の彼氏をゴミと言ったな！？」

「ごめんなさい。ついちゃっかり」

「わざとじゃねぇか！！」

「うるさいわね。仕方ないじゃない。暦とゴミって似てるし、紛らわしい名前をつける方が悪いんじゃない。」

「似てねぇよ！！だいたい戦場ヶ原お前似てる似てない以前に僕のこと阿良々木って言ってたじゃねぇか！！てかその前に、名前が悪いって暦ってつけた僕の親に謝れ！！」

「はいはい。メンゴ、メンゴ。」

「適当極まりねぇなおい！！」

そんなこんなあって、羽川とクラス委員の仕事があるため今日は戦場ヶ原には先に帰ってもらうことにした。

そこへ丁度先約の用事を済ませた羽川がやってきた。

「ごめんね、阿良々木君、遅くなって。」

「その言葉を戦場ヶ原にも聞かせたいよ。」

と小さく僕は呟いた。

「戦場ヶ原さんがどうかした？」

「あ、いや何でもない。それより仕事なんだけど。」

「それならほとんど終わらせておいたから後は日誌を書くだけだから。」

「えっマジ！？いつの間に！？悪いな。」

「いいよ、別に。私が勝手にしただけだし。」

「そういや日誌の今日の感想みたいなところって何も考えずに過ごしてたらネタが無くて話を盛ったりしてしまうんだよな。」

「そうだね、話題がないと盛ってしまいがちだよね。私もたまにするし。」

「えっ羽川も盛ったりするの！？」

「盛るぜぇ～超盛るぜぇ～」

「どうした羽川！？お前までもしかしてメタ発言か！？」

「だって戦場ヶ原さんもメタ発言してたし私も言った方がいいのかなと思って。」

「しなくていいよ！てかあの場に羽川いなかっただろ！何で知ってるんだよ！本当お前は何でも知ってるな。」

「何でもは知らないわよ。知ってることだけ。」

この言葉を聞けただけで僕は幸せだった。
クラス委員の仕事を終え、とはいってもほとんど全部羽川がやったのだが、僕は学校の門の前を出た時に僕の頭上を人のような黒い影が飛び越えた。
まぁ大方の予想はついている。人を飛び越していけるやつなどあいつ以外に居れば教えてほしいものだ。

「やぁ、阿良々木先輩。奇遇だな。」

「こんな仕組まれた奇遇があってたまるものか!!」

「そうかなら脱げばいいんだな。」

「出てきていきなりやりたい放題すんじゃねぇ!!なんでお前はそうすぐに脱ぎたくなるんだよ。」

「それは私が変態だからだ。」

反論が出来なかった。

「それより何か用か?」

「特にはないのだが阿良々木先輩と話しをしたかったから待たせて

もらっていた。」

やはり可愛い後輩である。

「そうか。」

「迷惑だったか？」

「いや迷惑じゃないよ。」

「そういや週末に戦場ヶ原先輩と海に行くらしいな。」

「なんで知ってるんだよ。まぁ、戦場ヶ原本人が言ったんだろうけど」

「その通り、さすがは阿良々木先輩だ。戦場ヶ原先輩が門を出てきて私を見つけるなり２０分程その話をしていた。」

「どんだけ話したいんだよ、あいつは。」

「いや～羨ましすぎるぞ阿良々木先輩。戦場ヶ原先輩と一緒に海で露出プｒ」

「それ以上は言わせるか！！筆者の初投稿の小説でお前の下ネタ全開の会話をさしてたまるか！！」

「ほぉ、阿良々木先輩ともお方がメタ発言か。」

しまった。僕としたことがついメタ発言をしてしまった。
いや、しかし神原を止めるにはこれしかなかったんだ…これしか。

「その前に何故私は脱いではいけないんだ。中は同じだっていうのにベル坊は全裸ではないか。」

「お前もがっつりメタ発言してんじゃねぇか！！だいたい向こうは赤ん坊だろうが！！」

いや、赤ん坊でも全裸はどうかと思うが。

「なら私も赤ちゃんになって赤ちゃんプｒ」

「もういいよ！」

周りから見れば冷たい目を向けられそうなそんな話をしながら途中で神原とは別れた。

こよみデイリー　2（後書き）

いや～今回もめちゃくちゃで原作レイプに近い形になってしまいました。
まぁ自己満足で書いてるんで面白くないかもしれませんが、これからもよろしくです。

こよみデイリー　3（前書き）

いや～投稿したやつ見直したんですが酷いですねぇ～。
何がって全部が酷いです。ｗｗｗ
誤字・脱字・改行ミス。
クソっ１Ｐ目いきなり八九寺が八九時になってるじゃねぇか。
そして１番は内容が酷すぎるｗｗｗ
まぁまだ悪あがきはしますけどｗｗｗ
では３話です。どうぞ

こよみデイリー　3

今日は何故こんなに皆メタ発言をするんだ。
そんなことを思ってると前髪を目元まで伸ばした見慣れた少女が歩いてきた。

「あ～暦お兄ちゃん。とぅっとぅる～。」

「千石、お前だけはメタ発言をしないと信じていたのに。一言目で言ってしまってるじゃないか。」

「メタ発言？なんのこと？」

「あ、いや、千石がメタ発言するわけないよな。ただたまたま挨拶の仕方が一緒だっただけだな。」

「そうだよ。撫子がメタ発言するはずないよ～。」

そうだ、千石は僕の中では妹よりも妹キャラなんだ。そんな千石がメタ発言をするわけないじゃないか。

「それより千石、今学校の帰りか？」

「うん、そうだよ。暦お兄ちゃんも学校の帰り？」

「あぁ。」

「そうだ、暦お兄ちゃん麻婆豆腐って食べられる？」

「まぁ食べられるけどどうかしたか？」

「撫子この前美味しい麻婆豆腐があるお店見つけたから教えてあげるね」

あれ？これってまさか某アニメの激辛麻婆豆腐じゃないよな？
いや千石のことだ。純粋に麻婆豆腐が美味しかったところがあったから教えてくれるだけだ。
妹よりも妹キャラなんだぞ、さっきもメタ発言？何それ？バカなの？死ぬの？みたいな反応だったじゃないか。
それを僕はなんてことを思ってるんだ。

「そうか、じゃあ楽しみにしてるよ。」

「うん、楽しみにしてて。」

そんな約束をして千石とは別れ、ようやく家に着いた。
そういや戦場ヶ原のやつ週末に海に行くって言ってたけどまさか泊まり掛けではないだろうな。
てか今思えば行くと決めただけで何も決めてないじゃないか。
仕方ない後で電話でもして聞くか。
そして、夕食を食べ、お風呂に入って今はベットでゴロゴロしながら電話を掛けているとこである。

「もしもし」

「もしもし、戦場ヶ原？僕だけど。」

「只今電話に出ることが出来ません。電話主が阿良々木君なら爆発しなさい。」

「なんでだよ！！爆発する意味がわかんねぇよ！！てか最初にもしもしって言ってたじゃねぇか！！」

「うるさいわね、切り落とすわよ。」

「どこの部位をですか！？」

「冗談よ。爆発しろっていうのは。」

「切り落とすのは事実かよ！？」

「それより何かしら？」

「あ～海の件だけど何も決めてなかったから聞こうかと思って。」

「そうだったわね。本当は土日を使って泊まり掛けで行く予定だったのだけれど生憎明日は予定が入ってしまっているから日曜の早朝に出ようと思っているのだけれどどうかしら？」

「僕は全然構わない。」

てか泊まり掛けで行くつもりだったのかよ。

「なので悪いけれど明日は神原と水着でも買いに行って頂戴な。」

「まぁ、新しい水着を買うのはいいが何で神原なんだよ。」

「あの子たまには構ってあげないといけないから明日は代わりに阿良々木君が遊んで頂戴。」

「まぁいいけど。」

「とりあえずそういうことだから明日は頼んだわよ。」

「あぁ。」

「あと日曜は朝４時に私の家に集合ということで」

「了解。」

「それじゃあ、よろしく。」

電話を切った後に気付いたのだが朝の４時って始発もないじゃないか。

まさか、またジープの父親同伴!?てかそれしかないな、時間的に。

そんなことを思いながら次は神原に電話をかける。

「神原駿河、特技は超電磁砲だ。」

「嘘つけ!!お前はどこぞの能力者だよ!!」

「その声とツッコミは阿良々木先輩だな。」

「お前は相変わらずその判断の仕方かよ。」

「私の電話番号を知ってる人は少ないからな。それよりどうしたのだ?」

「あ~明日なんだけどお前暇か?」

「買い物のことだな。それなら大丈夫だ。」

「なんだ知ってるのか。」

「あぁ、戦場ヶ原先輩から連絡があったからな。」

「そうか、なら話が早いな。明日何時ぐらいがいい?」

「私は何時でも構わないぞ。阿良々木先輩が呼ぶのならいつでもどこでも駆けつけるからな。」

「それは頼もしいな。じゃあ、1時に呼びに行くよ。」

「了解した。」

切った後、明日の予定も決まったところで僕は眠りについた。

はずだった。

こよみデイリー　3（後書き）

撫子との絡みをどうしていいかわからないためガハラさんとバルカン後輩中心になってるんで次からなんとか頑張るようにします。

次回予告
八九寺Pと忍が出るかもよ。

こよみデイリー　４（前書き）

今思ったんですが日常物語って言うより海物語になりそうですよね。
海ネタは最初からやろうとは思ってまして、しかし海物語にすると
僕の中でパチンコと被るので泣く泣く日常物語にしました。
さてさて今回も内容は酷いですが見てやって下さい。
ではこよみデイリー４です。どうぞ。

こよみデイリー　4

眠りについたはずだった。
だとシリアス展開に持っていきそうになるのでこれからの展開を考えるとここは
眠りにつこうとしていたのに～
が合っているな、たぶん。

「起きろお前様。緊急事態じゃ。」

「何だよこんな夜中に。」

時計を見ると深夜2時を回っていた。

「だから緊急事態じゃと言っておるのじゃ。」

「もしかして怪異絡みか!?お前が緊急事態って言ってるぐらいだからそれほど厄介なやつなんだな?」

「いや怪異ではない。」

「じゃあ何だよ?」

「いや最近ミスドに行っておらんかったじゃろ?禁断症状みたいなのが出て全く我慢が出来ないのじゃ。」

「知ったこっちゃねぇよ！！お前はそのために僕の大事な睡眠時間を遮ったのか！？」

「そんなこととはなんじゃ！！僕にとっては一大事なことじゃよ！！最近行ってない間に焼きドと言うものが発売しとるんじゃよ！？」

「んなこと言われてもこの時間帯に起こされてもミスドは開いてねぇよ！！」

「マクドは２４時間営業があるのになぜミスドは２４時間営業の店がないのじゃ。」

「それはドーナツ１個とコーヒー１杯で居座り続ける人が出るからじゃないのか？」

てか実際に２４時間営業の場所があるのかないのかは知らないが。

「２４時間営業であれば夜中に僕が毎日のように買いに行くのに。」

「お前が買いに行くんじゃなくて、僕のお金で僕に買いに行かすんだろうが！！てか僕が同伴しないと行けないじゃないか。」

だいたい毎日行かれたらこの歳で借金を背負う人生になるじゃないか。

「こんな話をしてたら余計食べたくなってしまったではないか。」

「だから知ったこっちゃねぇよ!!お前が勝手に話を進めてるんだろうが。まぁ確かに最近連れて行ってなかったからなぁ、明日神原との買い物の帰りに買ってやるよ。」

「本当かお前様!?」

「あぁ。だから今日はもう寝ようぜ。」

「そうか!!明日は何を買うかのぉ。そうじゃのぉ、やっぱり焼きドは全種類は買うべきじゃな。
フレーバー焼きドのダブルベリーは必要じゃな、まぁゴールデンチョコレートは必ず買うが。そうじゃお前様何が良いと思うかの?」

「知らねぇよ!!お前が食いたいものを買えばいいじゃねぇか!!」

「本当か!?どうしたお前様、太っ腹じゃのぉ。」

しまった。こいつ完全に全種類を買い占めるつもりでいるじゃねぇか。
それだけは絶対阻止しなければ。
僕のこれからの生活を賭けて。

「そうじゃのぉ、ゴールデンチョコレートと焼きド全種類とポン・デ・リング全種類と…」
結局興奮した忍を止められるはずもなく夜が明けて朝になってしまった。

その忍はと言うと日の出と共に寝てしまった。
全く脳天気なものである。
僕がベットの上に座って呆けているといつものように二人の妹の火
憐と月火が起こしに来たのだが

「あれ？兄ちゃん起きてるじゃん。今日地球が爆発するんじゃねぇ
の？月火ちゃん。」

「それは言い過ぎだよ。真夏なのに雪が降るぐらいだよ。」

本当に朝から失礼なやつらである。

「なんで今日は早かったんだよ兄ちゃん。」

「あ～ちょっと寝れなくてな。それよりその右手に持ってるいかに
も重たそうなダンベルはなんなんだ？」

入って来た時から気になって仕方がなかったんだ。
確実に３０キロはあろうダンベルをでっかい方の妹は軽々片手で持
ってるんだもん。

「これ？これは兄ちゃん用に昨日買ったんだよ。結構高かったんだ
ぜ。」

「僕の趣味に筋トレはない。僕用って一体何に使うって言うんだよ。

」

「だから今日朝起こすためにこれを持って来たんじゃないかよ～。頭に落としたらさすがに起きるかなと思って。なのに兄ちゃんったらこれを落とす前に起きてるんだもん。この苦労とお金を返して欲しいよ。」

「そんもん落とされたら二度と起きねぇよ！！」

「何！？これでも起きねぇって言うのか兄ちゃんは！！」

「そういう意味じゃねぇよ！！二度と目を覚まさないって事だよ！！」

全く恐ろしい妹である。
もし昨日忍に起こされず寝ていたら僕は今日命日を迎えていたのか。
これは忍に感謝をしないとダメだな。
よし、今日のミスドは5個プラスしてやるよ。

「とりあえず起きてるなら朝ごはん出来てるから早く食べてね、お兄ちゃん。行こう火憐ちゃん。」

ちっこい方の妹は優しく声をかけた。
ただ気になったのが手に千枚通しが見えたような気がしたんだが。
いやそんなはずは無い……そうだ月火ちゃんはたこ焼きの練習をしてたんだ。
そうしかない。
そうであってほしい。

もしあれで僕を起こすために持っていたらのなら僕は阿良々木姉妹をヒステリック姉妹として世界仰天ニュースに応募してやる。
朝からいろいろあったが朝食を済ませ、これでも僕は受験生なので勉強をするべく机に向かった。
いつもは羽川か戦場ヶ原のどちらかに勉強を見てもらっていて、今日は羽川の番であったが予定があるということを前もって聞いていたので特に予定に変更はなかった。

そこで神原と待ち合わせてる時間まで勉強をしようというわけである。

机に座るとたまに思うのだがこの引き出しから青色の猫型ロボットが出てきて何か楽に記憶が出来る道具を出してくれないかと思ってしまうことがある。

ただ僕はアンキパンだけは勘弁だ。
僕が覚えなければならない量は胃がいくつあっても足りない。

しかも、トイレに行くと排出によって効果が無くなるらしい。

前日に全部を暗記しようと思ってもそんなに食べられないし、かと言って何日か前に食べるとトイレに行けなくなるのでお腹が爆発しそうである。

そんな馬鹿なことを考えてから勉強に取り組んだ。
もちろん真面目に。

何事も集中していれば時間は時が経つのは早く感じる。
まだ時間は少しあったがキリが良いところだったので勉強を切り上げ少し早めに家を出ることにした。

家を出て少し歩いたところで僕の前に大きなリュックを背負ったツインテールの小学生が現れた。

八九寺であった。

以前までの僕なら興奮しながら猛スピードで八九寺に抱きついていただろう。

しかし、僕は今受験生であり、ましてや彼女がいる。

もうそんな変態ロリコンみたいなことはもうしない。

悪いな、八九寺。

と回れ右をしながらそう心の中で言った後、僕はさらに回れ右をして全速力で走った。

八九寺に向かって。

こよみデイリー　４（後書き）

予告通り忍は出せたんですが八九寺Ｐを出すともっと長くなりそうだったので名前だけだして次回に持ち越しです。

ネタがあまり浮かばないためか余計内容が酷くなったような気がしますｗｗｗ

次回予告
ついに八九寺Ｐ登場です。

こよみデイリー　5（前書き）

いよいよ八九寺Ｐのご登場です。

「は～～ち～～く～～じ～～っ！！！！！会いたかったぞ八九寺～！！ほらもっと触らせろ！揉ませろ！舐めさせろ！」

「きゃ～っ！きゃ～っ！ぎゃ～っ！」

と八九寺は悲鳴と共に

「がぶっ！」

と噛みついてきた。

「がうっ、ぐぁうっ！」

「痛え～！何すんだこいつ！」

痛いのも、何すんだこいつも僕であった。

「シャーッ、シャーッ！」

何ヵ所か噛まれたことで僕は正気に戻ったものの暴走している八九寺は、超サイヤ人のごとく髪を逆立て依然威嚇を続けた。

当たり前である。

「シャー！ッシャーッ！」

「大丈夫、敵ではないお前の味方だ」

「しゃーっ！しゃー！」

「よし、ゆっくり深呼吸をしよう」

「しゃー！……すーはー、すーはー」「しゃー！……すーはー、すーはー」

それにしても初号機もビックリの暴走だな。
もしかしたら初号機よりも強いんじゃねぇか？こいつ。

「よし、いいぞ。僕だ、わかるか？いつも誰にでも優しく評判の良いごく一般の高校生で…」

「ん…うぅ…」

八九寺はだんだん我を戻して髪もいつも通りになり姿も戻った。

「大丈夫か？」

「これはこれはクララ木さんじゃないですか」

「僕をアルプスを舞台にしたアニメに出てくるキャラみたいな名前で呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

確かに噛まれた後に噛まれたけど今回は僕が悪い。
しかし、いつもの流れをしないと僕の中でモヤモヤ感が残るのでいつも通り返すことにした。

「違う、わざとだ…」

「噛みまみた」

「わざとじゃない！？」

「カビ炊いた」

「そんなもん炊くんじゃねぇ！！」

楽しい時間であった。

「阿良々木さんお出かけですか？」

「あぁ、神原とちょっと買い物にな」

「あぁ、あのＢＬ女子高生ですか」

「どんなあだ名だよ」

「そういや今日は明日行く海のために水着を買いに行くんでしたね」

「なんでお前が知ってるんだよ！？」

「私を誰だと思っているんですか？」

「さすが八九寺Ｐ」

「その気になればこの小説を終わらせることなんてちょちょいのちょいです」

「何！？そこまで権力持ってるのかお前は！？」

「当然です。明日の海の行き先をカリブ海にして阿良々木さんをデイヴィ・ジョーンズの手下として働かさせることもできます」

「世界をも巻き込むのかお前は！？だいたいデイヴィ・ジョーンズは前作で死んだよ」

「なら私の手下として働いてもらいます」

「なんでお前の手下にならなきゃいけないんだよ」

「だって阿良々木さんの一人称って僕じゃないですか？僕の読み方

ってしもべとも読めるじゃないですか?ほら」

「ほらじゃねぇよ!!何の答えにもなってねぇよ!!」

「わがままですねぇ阿良々木さんは。だから最近の若い者はと言われるんですよ」

「全く関係ないし、なんで言われる代表が僕なんだよ!!だいたいお前も若いじゃないか、僕よりも」

「生きていれば私の方が年上ですし、二十歳を越えています」

「申し訳ございませんでした」

「分かればいいんですよ分かれば」

それにしてもよく次から次へと話が出てくるなこいつ。

まぁいつもだけど。

「それはようやく私の出番になったからです」

「僕のモノローグを勝手に読むな」

「前回は予告されていたにも関わらず出してもらえませんでしたからね」

「確かに前々回の予告に出ていたな」

「はい、私は終わらせる権力があると言いましたけど自分が出ないうちに終わらせるのは嫌だったので続けさせていたんですよ」

「どんだけだよ！？」

「まぁこれで私も出れたことですし終わらせますか！！」

「笑顔で言うことじゃねぇよ！！」

こいつ怖えよ。
僕の物語を中途半端で終わらしてたまるか。
頑張れ筆者、負けるな筆者。

「まぁ冗談はここまでで。時に阿良々木さん、傷物語が映画化みたいですね」

「冗談は終わってもメタな会話は続くのな」

「メタメタ続きます」

「めちゃめちゃ続きますみたいな言い方をするな」

映像化記念でちょこちょこ映ってもよろしいでしょうか？」

「良いわけねぇだろ！！」

「今考えてる場面は阿良々木さんとエピソード君が闘ってるのを見

ている羽川さんの横で一緒に見てるところと阿良々木さんっ忍さん…傷物語ではキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードでしたね、お二人が闘ってるのをグラウンドで見てる場面を考えています」

「どっちも良い場面じゃねぇか！！そんなとこで関係ないやつが出るなよ！！」

「だって良い場面じゃないと映らないじゃないですか」

「お前は若手芸人かよ！！てか最初エピソード君って言ったよな？あいつそんな若いのか？」

「猫物語（白）の時点で誕生日1ヶ月前で6歳だと本人が言っていましたよ」

「何！？あいつそんなに若いのか！？どんだけ成長早いんだよ」

「まぁ詳しいことは買って読んで下さい」

ネタバレになるといけないんで買って読んでみて下さい

「ちなみに羽川さんと戦場ヶ原さんがあんなことやこんなことをしていましたよ」

「八九寺、僕は用事が出来て今から宮脇書店へ行かなくなったから後は頼んだ」

「本当救いようのないダメ人間ですね」

そんなやりとりも楽しかった。
まだ話してはいたかったがこのまま話していると日が暮れそうなので話を終わらせ神原の家へと向かった。

こよみデイリー　5（後書き）

八九寺Ｐ「ようやく私の出番ですか」
クロネコ「仕方がなかったんです、八九寺さん」
八九寺Ｐ「まぁ出てくるのが遅かったのは別にいいです。それより何なんですか！？この薄くてぺらぺらな内容は！？」
クロネコ「グダグダと適当な話ばっかりなんで話はすぐに思いつきますが内容がぺ～らぺらなんで残念な小説になってしまってます」
八九寺Ｐ「自分で言っているとより惨めに見えますよ。あとこれより酷くなると打ち切りにしますからね」
クロネコ「はい、がんばりますｏｒｚ」

こよみデイリー　6（前書き）

活動報告にも書きましたが、見やすいように改行を行いました。

それでは見てやって下さい。
こよみデイリー6です。どうぞ。

八九寺と話していたため結局１３時丁度に神原家に着きおばあちゃんにいつも通り神原の部屋へ案内された。

神原の部屋はドアではなく障子になっている。

その障子を開けた。

「やぁ、阿良ｒ」

その瞬間、僕は障子を閉じた。

何故かって？

そんなもの決まってるじゃないか。

年頃の女の子が裸で仁王立ちしていたら誰だって閉めると思う。

障子の向こう側から声がした。神原の声だ。

「何故閉めるのだ？阿良々木先輩」

「なんで裸なんだよ！？服を着ろ！！」

「いけなかったか？阿良々木先輩が呼びに来ると言っていたから脱いで待っていろという意味だと思ったんだが」

「なんでそうなるんだよ！？」

「むっ。私は昔誰かから呼びに行くということは脱いで待ってろということだと教わった気がするのだが」

「デタラメを言うな！！しかも誰かって誰だよ！！もしそんな奴がいるなら今すぐ僕の前に連れて来い！！説教をしてやる」

待てよ以前星空デートに行く途中の車の中で神原の師匠は戦場ヶ原ってことがわかったような……いや、でもあいつに限ってそんなことは……大いにあり得る。

「とりあえず着たぞ阿良々木先輩」

「じゃあ、入ｒ」

本日2回目の瞬間障子閉めである。

「着てないじゃねぇか！！なんで下着のみなんだよ。ほとんど変わってないじゃねぇか」

なんだよこのリアルアハ体験みたいなのは。

「私も服を着たとは一言も言ってないぞ」

「そんな屁理屈はいらねぇよ！」

「あ～ずっと立っていたら胸が凝った。誰か揉んでくれる人はいな

いものかな」

「それで一体誰が損をするんだ！？」

本当こいつはいきなり何を言い出すんだよ。
いつかこの小説排除させられるぞ、某知事によって。
てかＰＴＡが黙ってないぞ。
そうこうしている間に神原はようやく服を着た。

「ところでそのＰＴＡなんだが」

「お前も勝手に人の心の中を読むな」

僕にはプライバシーってものが存在しないのか？
どこに行った個人情報保護法

「読心術だ」

「うるせぇ！！お前にそんな仕様はねぇよ！！」

「そうなのか！？てっきりあるのかと思ってたぞ」

どれだけこいつは才能を持つ気なんだよ。

「で、ＰＴＡがなんだって？」

「ＰＴＡの意味は、Ｐａｒｅｎｔ　Ｔｅａｃｈｅｒ　Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎだが最近はＰｒｏｔｅｃｔ　Ｔｅａｃｈｅｒ　Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎを作った方がいいのではないのかと思ってな」

「教師を守る組合か。確かに最近はモンスターペアレントってやつが増えて教師も大変だって言うしな」

「うむ。これでは生徒が保護されすぎて教師と生徒の禁断ｎ…」

「結局そういう話かよ！！」

たまには神原も真面目な話をするんだなと見直した自分が馬鹿みたいだった。

家を出て向かう先はこの街で唯一のショッピングセンターである。わかりやすく言うとイオンみたいなものである。

着いて早々と神原は

「さてどのブーメラン型の水着を買うのだ？」

「なんで勝手に決めてんだよ。普通のハーフパンツデザインのでいいよ」

「それは残念だな。それを着た阿良々木先輩と忍野さんとの絡みを想像しようと思ったんだが」

仕方がないので神原をスルーすることにした。

「さすがに今日は土曜で学校が休みだし子供が多いな」

「あぁいいぞ、阿良々木先輩。とてもいい放置プレイだ」

喜ばすだけであった。

クソっこいつは無敵か！？

無敵艦隊神原駿河。

なんか中国語っぽくなってしまった。

「無敵艦隊かぁ。私はフェルナンド・トーレスが好きだ」

「サッカーのスペイン代表の話をしてんじゃねぇよ！！」

「さすが阿良々木先輩だ。よくわかったな」

「だいたいなんでお前がサッカーの話わかるんだよ。バスケの話ならまだしも」

「それは筆者がサッカーが好きだからだ」

今更だが誰がメタ発言しようとも何の気にもしない。もうツッコまないからな。

「あ～なるほどな……って納得出来るか！！」

やっぱり無理なものは無理であった。

筆者の話をしながら買うべきものも買い２時間ほどウィンドウショッピングを楽しみ、神原はその後、ＢＬ小説を買いにどこかへと去って行った。

さてこの後は昨日忍に約束をしたミスドに行かないといけない。
てかこのまま買わずに帰ったら僕は心渡を持った忍に襲われるのかな…。
そんな物騒なことを考えてるうちにミスドに到着した。
その瞬間、僕の影から金髪美幼女……いや忍が出てきた。

「お前様早く行くぞ。売り切れてしまう」

「そんなすぐに無くならねぇよ。どこのタイムセール中のスーパーだよ」

と言いながら店に入ると不思議な目と言うか、不審者を見る目と言うか、なんとも言えない視線が突き刺さる。

そりゃそうだな、こんな田舎町に金髪幼女を連れた高校生なんて合わないもん。
いや都会でもギリアウトだろうと思うが。
まぁただし、僕は通いなれているため特には気にしない。

「お前様よ、これ全部食っていいのかの？」

「良いわけねぇだろ！！」

そこまで僕を苦しめたいのかお前は。

さてはお前、僕のこと嫌いだな。

横で項垂れている僕を横目に金髪美幼女はキラキラした目でドーナツを見つめていた。

今となっては怪異の王の欠片すら見えない。

「お前様よ、焼きドの他にもクールミスドがあるぞ。ぱないの！」

いつからだ？このロリババァがギャル語を喋るようになったのは。

「ん？お前様今なんか良からぬ単語を出しよったな？」

「そ、そ、そんなわけないだろ」

「そうか。ならいいが」

「危ねぇ、もう少しでロリババァと言ったことがバレるとこだった」

「お前様、心の声が筒抜けじゃぞ。まぁ今日はミスドだから勘弁してやろう」

さすがミスタードーナツ様。怪異の王を手なずけるとは。感謝します。

結局忍は、焼きド全種類、ポンデシリーズ全種類とゴールデンチョコレートを2つを買わされた。財布は現在とは真逆の季節の冬みたいに寒くなったけど今日の朝、命を救われてるからこれで借りは返したことにしよう。

店を出て家までの帰路を忍は、影の中に入らず自らミスドを手で持ち満面の笑みを浮かべながら歩いていた。

「ところでポン・デ・忍」

「儂をドーナツみたいな名前で呼ぶでない」

「いや、だってなんか3文字なら合いそうだなと思って」

「ならポン・デ・暦も合うではないか」

「何!?まさか忍お前天才か!?」

「我が主様は相変わらず馬鹿なんじゃの」

金髪幼女に馬鹿呼ばわりされた記念日になってしまった。

家に着いた僕は夕飯後、明日の用意をした後、また机に向かって勉強をし始めた。

なんてったって僕は受験生なんだもん。

一方忍はというと、あれだけあったドーナツを２０分もかからないうちに全部食べきりやがった。
その小さい体のどこにそれだけ入るんだよ。
僕でもそんな食えねぇよ。

そして、さっき勉強をし始めたと言ったが何を嗅ぎ付けてか妹達が部屋に入ってきたため勉強は中断した。

「兄ちゃん、海に行くの！？いいなぁ…で、一人で？」

「んなわけねぇだろ！！」

どこに一人で海に行く男子高校生がいるんだよ。

「じゃあ、誰と行くんだよ？」

「か、彼女だよ」

「兄ちゃん、二次元に興味を持つのはいいけど現実とは区別つけようぜ」

「三次元だよ！！人間だよ！！本物だよ！！」

どこまで信用してないんだよ、このでっかいのは。

「嘘だ！！」

叫んだのはちっこい方の妹である。
てか何？このひぐらし的展開。

「お兄ちゃんに彼女が出来るはずないよ！！」

「ストレートに失礼だな！！」

「じゃあ証拠を見してよお兄ちゃん」

「わかったよ。今度紹介してやるよ」

「それで兄ちゃんがラブプラスとか見せてきたらぶっ飛ばすからな」

「だから人間だよ！！」

こいつには一回説教が必要だな。

そして、勉強もそこそこにいつもより少し早い眠りについた。

こよみデイリー　6（後書き）

今回は私情を入れすぎましたｗｗｗ
フェルナンド・トーレスの流れは完全に思いつきです

そういやガハラさんと阿良々木姉妹って原作では面識ありましたっけ？

完全に忘れてしまったので会っていない体でお願いしますｗｗｗ

あとダメ出しとかでも良いんで一言くれるとやる気が出るんで書いてくれたら嬉しいです。

まぁちゃんと最後まで見てくれる人はいないと思いますがｗｗｗ

こよみデイリー　7（前書き）

原作ではガハラさんはまだ阿良々木姉妹とはまだ会ってないみたいですね。たぶん。
偽物語で夏休み明けに紹介すると書いてたので。

あと1日1話ぐらいのペースで進んでるんですが内容が内容ですし……ね。

こよみデイリー7です。どうぞ。

こよみデイリー　7

翌日、いつもより睡眠時間は短かったものの寝不足感は全く感じなかった。

準備を終えた僕は戦場ヶ原の家へ向かうことにした。

まだ暗い道を一人ママチャリを漕ぎながら戦場ヶ原の家へと向かっていた。

すると目の前に物体が現れた。
その物体が何で誰なのかは吸血鬼の部分が少し残っている僕にはすぐ認識できた。
八九寺である。

なんでこいつはこんな時間に歩いているんだよ。
僕はママチャリを置いて八九寺に向かってダッシュしようとした瞬間、八九寺はこちらを向いた。
その時、僕はビックリした勢いで前に転けてしまった。

「これはこれは語り部さん」

「確かに僕はこの話の語り部ではある。しかし、もう一度だけ言う、僕の名前は阿良々木だ」

「すみません、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない！？」

「夏季間近」

「真っ只中だよ！！」

いや、筆者のリアルタイムだと本当に間近だな。６月下旬だし。

「偶然ですね、阿良々木さん。私は今たまたま散歩をしていたんですよ」

「そんな仕組まれた偶然があるか！！そんな偶然神原だけで間に合ってるよ！！てか子供が散歩するような時間じゃねぇよ。散歩と言うより徘徊だよ」

今何時だと思ってるんだよ。
まだ午前４時前だぞ。

「徘徊とは高齢者扱いですか。これで私もロリからロリババァの部類に移籍ですか」

「お前のどこにババァの要素があるんだよ。がっつり子供じゃねぇか。」

ロリババァと言うのは、しｎ…おっと危ねぇ。
もう少しでミスドを店ごと買わされるとこだったぜ。

冷や汗をかきながら街灯で出来ている僕の影を見ると忍が目元まで出して睨んでいた。

何だよこの光景…子供の幽霊に、影から目元まで出ている金髪幼女。
完全にホラーだよ。
貞子もビックリだな。

「まぁ、ここで待ち伏せしていたのは事実ですけどね」

「目的はなんだよ」

「決まってるじゃないですか阿良々木さん。出番ですよ！で・ば・ん！！これを逃すと阿良々木さんは海に行ってしまいますので私の出番はしばらく無いと思いますので眠気を我慢して待っていました」

「どんだけ体張って出たいんだよお前は！」

しばらくって1話か2話ぐらいじゃないのか？
僕にはメタ的なことはわからないが。

「出番が欲しかっただけで話はないんですけど…気をつけて行って来て下さい」

「あぁ。土産話でも期待しておけ」
戦場ヶ原の家に着くと戦場ヶ原は家の前で待っていた。
「おはよう。ムササビ君」
「僕をグライダーのように滑空する動物みたいな名前で言うな。僕の名前は阿良々木だ」
「ごめんなさい、噛んだわ」
「違う、わざとだ。てかそれは八九寺のネタだ!!」
「えぇ、わざとよ。何？何か文句あるの？」
「逆切れかよ!!」
「何よ。どうせ阿良々木君なんかポケモンを初めてする時に何も持たずに草むらに入ったら普通はオーキド博士が止めに来てポケモンをくれるけど阿良々木君は草むらに入ったけど誰も止めてくれなくてそのまま、ポケモンと戦闘モードに入ればいいのよ。」
「ダイレクトアタックで死んじゃうよ!!常に目の前が真っ暗になった状態じゃねぇか。てかこうなったら状態じゃない、常態が合ってるよ!!なんで僕だけ丸腰で闘わなきゃ行けねぇんだよ!」
生身の人間が鼠や鳩と闘うってシュール過ぎだろ。
てか下手したら、動物愛護団体が黙っちゃいねぇぞ。

「大丈夫よ。ポケモンには、道具にげんきのかけらがあるからそれを使えば」

「その主人公が瀕死で動けねぇんだよ！！」

だいたいそんな序盤でその道具は出ないよ。

「まぁ、私は家を出た瞬間に手持ち６匹で６匹ともＬｖ１００だけど」

「お前プロアクションリプレイ使いやがったな！！てかそれの何が楽しいんだよ。ああいうのは育てながら越していくからこそ楽しいんだろうが」

てかプロアクションリプレイってまだあるのか？

「だって強いポケモンを使って弱いポケモンを倒すと尋常じゃない早さでライフが減って瞬殺でスカッとするじゃない」

「小さい頃からそんなこと思ってたのかよ！！」

末恐ろしい子である。

「何か今余計なこと思わなかった？」

「い、いや何も思ってないよ」

相変わらず鋭いやつだ。

「そ、ならいいけど」

「そうだ戦場ヶ原、今度会ってほしいやつがいるんだけど」

「何？結婚するの？」

「お前は僕の何なんだよ！！」

「恋人よ」

僕が悪かったよ戦場ヶ原。

「妹だよ。妹。あいつら僕に彼女がいることを信用してないんだよ」

「そりゃそうよ。だって阿良々木君だもの」

「何だよ、その僕の全てを否定する言い方は！」

自分の彼氏をそんな風に言うのはお前ぐらいだよ。

「それより、そろそろいいかしら?お父さんも待たせているし」

「あぁ、そうだな」

ってやっぱ父親同伴ジープかよ。

車に乗り込むと

「言っておくけど阿良々木君、今はまだ深夜・早朝割増料金だから」

「金取るのかよ!!」

「うるさいわね。少しの間だけお口セメダインにしてくれる?」

「二度と開かねぇよ。言うんだったらお口チャックだろうが!!」

「お金に関してはもちろん冗談よ」

「セメダインは本気なのかよ」

「阿良々木君の素行次第よ」

「僕がいつ悪い行いをしたって言うんだよ。どちらかと言うとお前の方がよっぽど悪い子だよ」

「お父さん、あなたの娘は素行が悪い子らしいわよ」

なんだよ、前にもあったような似た展開は！！
これがデジャヴか！？

「それより戦場ヶ原、気になったんだけど神原と遊ぶ時っていつもどこ行ってんだ？あの部屋にいるのはさすがに無理だと思うから」

「それは私に言ってるのかしら？それともお父さんかしら？お父さん、阿良々木君が神原といつもどｋ」

「ひたぎさんです！！僕が聞いているのはひたぎさんです」

まぁ、逆に戦場ヶ原のお父さんと神原の絡みも見てみたいっちゃ見てみたいけど。

「そうねぇ、ショッピングセンターでぶらぶらするぐらいかしら。他に何もないし」

「そうか。あとあいつを呼びに行ったらいつも裸なのか？」

「いつもあの子が私の家に呼びに来るからわからないけど、今の部分は流せないわね。どういうこと？まさか私の可愛い後輩に手を出してないでしょうね？」

「出すわけねぇだろ！！」

そんなことしてみろ。
以前のホッチキスひたぎに逆戻りじゃねぇか。

「ならいいのだけれど」

「少しぐらい僕を信用しろよ」

「信用してなかったら神原のことを任していないし、こんな話もしないわよ」

「そうか、ありがとう」

「何よ。気持ち悪いわね」

「気持ち悪いとは何だよ!!人が感謝しているのに」

「今日は暑いわね、って言おうとしたら噛んだのよ。私がそんなはしたないこと言うわけないじゃない。変な言いがかりはやめて頂戴」

「適当なことほざいてんじゃねぇよ!!どこをどう噛んだらそうなるんだよ。てか冒頭で出てきていきなり僕を犬の死骸呼ばわりしてたじゃねぇか」

「それは遠い昔の話よ。あの頃は若かったから」

「近い一昨日の話だよ!!」

こうした話を繰り返してるうちに海に着いたのであった。

こよみデイリー　7（後書き）

クロネコ「勝手に出てこないで下さいよ～。」

八九寺Ｐ「というか阿良々木さんと戦場ヶ原さんを会わすまでの繋ぎが欲しかったんでしょ？」

クロネコ「バレたか」

八九寺Ｐ「バレバレです」

クロネコ「ちなみにＰＶ２０００、ユニーク３００を越えました。こんな駄作に付き合って頂いて本当にありがたいことです」

八九寺Ｐ「本当そうですよ。てかあなたＰＶとかユニークの意味わかってないでしょ？」

クロネコ「うん。なので誰か知っている親切な方がこのページを見たら教えて頂けたら僕は嬉しくて泣きます」

八九寺Ｐ「そこまでですか」

こよみデイリー　8（前書き）

いや～そろそろネタが思いつかなくなってまいりました。

てか今更ですが標準語って難しいですねｗｗｗ

いつもは関西弁なんで何か変になってしまいます。

では、こよみデイリー８です。どうぞ。

こよみデイリー　8

海に着くと戦場ヶ原のお父さんは帰って行った。
これから仕事らしい。
仕事があるのに早い時間から送ってもらって本当ありがたいですよ。

「ところで阿良々木君」

「あん？」

「朝食まだだったわよね？」

「あぁそういやそうだな」

現在7時前である。

「思ったより早く着いたので朝食にしましょう」

「朝食って言ったって、海の家はまだ開いていないし、近くに店やコンビニもないぞ」

「だからそのためじゃない」

まさかこれは、手作りのサンドイッチを作って来てるから食べましょう的展開！？

「それってもしかして」

「そうよ、今から阿良々木君に海に潜ってもらって魚を採ってきてもらいます」

「なんでだよ!!なんで僕が黄金伝説的なことを朝一でしなきゃいけねぇんだよ!!」

クソっ少しでも喜んだ僕が馬鹿だったのか?……不幸だ

「じゃあもう1つ選択肢を増やしてあげる。この道を5キロ程行ったとこにコンビニがあると思うから全力疾走で行って来て頂戴。」

「どっちもやだよ!!だいたいなんで全力疾走だよ。倒れるわ!!あとあると思うって知ってるのかよ?」

「えぇ、感よ」

「知らねぇんだな」

なんで海の家開いてないんだよ。僕ってやっぱ不幸な人間なのか?

「そうね、阿良々木君に幸福なんてやってくるわけないじゃない」

「だから人の心の中を勝手に読むなよ。しかも言ってることは失礼極まりないし」

「違うわよ、モノローグを読んだのよ」
「ほとんど一緒だよ！！」
「まぁあれね、不幸中の災いよ」
「何も上手くねぇよ！！」
「冗談よ、ちゃんと作って来てるわよ。サンドイッチだけど」
「え！？マジで！？本気で嬉しい」
「べ、ベツニアンタノタメニツクッタンジャナインダカラネー。」
「別にツンデらなくてもいいよ！！」
てか出来ないんだったらするなよ。
カタコトで棒読みじゃねぇか。
「さ、食べましょう」
「おう」
戦場ヶ原手作りのサンドイッチはお世辞抜きで抜群に上手かった。
てか、こいつ料理の練習でもしてたのか？
そうこうしているうちに人も集まりだし、海水浴らしい賑わいにな

ってきた。
到着して1時間半、僕達はようやく着替えることにした。
本当1時間半も何してたんだ僕達は。
着替え終わった僕らは合流した。
戦場ヶ原の水着姿は初めて見たが……まぁ文句なんてあるわけないじゃん。
と見ていると
「何ジロジロ見てるのよ、この変態ロリコン野郎」
「人聞きが悪いぞ。僕がいつロリコン紛いなことをしたって言うんだ！！」
「略してクズ」
「何も略してしてないよ！！違う悪口が出てきただけだよ！！」
「変態ロリコンクズ野郎」
「繋げるな！！」
こいつは悪口を編み出す天才か！？
「それより夏ってテンション上がるわよね」
「僕には年中同じように見えるんだが」

「失礼ね、私だって夏の曲を聴くとテンション上がるのよ」

「へぇ、それは初耳だなぁ。どんな曲聴くんだよ」

「ａｉｋｏとか結構好きね。歌詞が可愛いし」

「ａｉｋｏのオススメとかあるのか？」

「この流れからしたら夏には関係ないけどカブトムシとか好きね」

「あぁあの曲か。確かに良いなぁ」

「少し背の高い～あなたの耳に寄せたおでこ～♪」

なんか歌い出したぞ。

まぁガハラさんの歌なんて聴くことなんてないし、このまま歌わすか。

「甘い～匂いに～誘われた私は下柳」

「カブトムシだよ！！オッサンが誘われたら気持ち悪いだけだろうが」

てか何で阪神タイガースの投手の名前なんか知ってるんだよ。

「あと大塚愛のスマイリーもいいわね。」

「まぁ夏らしくてテンションも上がるが」

また替え歌するんじゃねぇだろうなぁ。

「殴りたい時には～そっと側に移動する♪笑って～笑って～君と明日会いたい～」

「そんなの歌われて会いたくなるわけねぇだろ！！」

なんだよこのＤＶな曲は。
お前にぴったりな曲だよ。

海に入るまでにツッコミ疲れが出そうだ。

「こんなもんで疲れるとは阿良々木君も落ちたものね」

「だから平然とモノローグを読むなって言ってるんだよ」

「読心術よ」

「神原の師匠はやっぱりお前だったか！！」

「先に言っとくけど神原をエロくしたのは否定しないけど変態にな

ったのは知らないわよ」

「まぁお前は少しは関与してるよ」

「話は変わるけれどこの話の筆者も結構ツッコミの場面に出くわすらしいわよ」

そうなのか？なんか話が合うかもしれないな。

「本当に変わるなぁ。例えばどんなだ？」

「その前に、この筆者はコブクロが大好きだと言うことを覚えておいて頂戴」

「あぁ」

「以前コブクロがＣＤ発売の時にライブ映像をプリントした箱のティッシュを２種類、数量限定のローソン限定で発売したのよ」

「あぁ」

「３件周ってようやく１種類は買えたのだけれど、あと１種類がどうしても売ってなくて、仕方がないからバイト終わりに近くのローソンに行くことにしたの。夜１２時ぐらいに行ったら探しても無くて、ダメ元で聞いてみようとレジに行ったら丁度若い人からおじいちゃんに変わったのよ。まぁこの時点で誰でも嫌な予感はするわよね」

「正直おじいちゃんよりかは若い人の方が良いな」

「その時に「すいません。コブクロのティッシュって売っていますか?」と聞いたら「はいはい、コブクロのティッシュね。こっちこっち」と返事が返ってきて筆者はテンションＭＡＸで付いて行ったら、鼻セレブのポケットティッシュを渡されたの」

「コブクロのティッシュじゃなくて、小袋のティッシュじゃねぇかよ!!字にしねぇと分かりづれぇよ!!」

しまったツッコミを入れてしまった。

「話のオチを一文字も間違いなく言わないでくれるかしら?」

「あ…悪い」

「ＫＹね」

「空気読めないか…今のは言われても仕方がないな」

「違うわよ、暦ヤダよ」

「僕自身を全否定!?」

「まぁ筆者と阿良々木君が違うところは、筆者は心の中でそれを叫んだそうよ。周りのことを考えて」

「その言い方だと僕が周りを考えていないと聞こえるんだが」

「え…いや…その…」

「濁すなよ!!どうせならちゃんと言えよ」

「わかったわ。邪魔」

「その選択肢は間違ってる！！」

「そんなことより泳ぎに行きましょ」

「うやむやにするな！！」

と言いつつも泳ぎに行く僕であった。

こよみデイリー　8（後書き）

話が進まねぇｗｗｗ

文字稼ぎに僕の実話まで入れるとかもうこの小説終わってるなｗｗｗ

まぁ地道に頑張りますよ。

てかそろそろ囮物語発売じゃないか！！

こよみデイリー　９（前書き）

早くも９話なんですが普通小説ってこんな早く書くものじゃないですよね？

いや…まぁ…これは小説とは言えませんがｗｗｗ

てか、グダグダな会話ばっかやからすぐ書けるんか／（＾Ｏ＾）＼

とりあえず、こよみデイリー９です。どうぞ。

こよみデイリー　9

ようやく、海に来て初めての水に触った。
いやーやっぱり夏の海は気持ち良くいいな。
どうせなら神原も誘ってあげればよかったかな。

「そういや戦場ヶ原、お前って泳げるのか？」

「えぇ泳げるわよ。あの出来事以来泳いでいないけど」

あの出来事とはご存知の通り蟹の件である。
蟹に行き逢った少女、戦場ヶ原ひたぎである。
戦場ヶ原は以前おもし蟹に憑かれ、重さを根こそぎ持っていかれた。
しかし、現在はその件も解決し重さも戻っている。
まぁ適当な神様だったため一時的に僕の体重が増え１００キロになったのはビックリだったが。
だが、シリアスな話は今回はＮＧだ。
本当にＫＹになってしまう。

「へぇ意外と泳げないのかと思ってたよ」

「見くびらないで頂戴。私の昔のあだ名はかっぱっぱよ」

「お前はどこぞの喜翠荘の従業員だよ！！」

人のあだ名を勝手に自分のものにするんじゃねぇよ。
てか、いろいろなマンガやアニメを出すなよ。
いつかギャラが発生するぞ。

「嘘なんて言わなきゃバレないのよ」

「今、自分で嘘だと言うことを言ってしまってるよ」

もしかして、こいつって案外天然なのか？

少し遊んで時間を見に行くと時間は正午を過ぎていた。
まぁ、あれだけ喋っていたからな。
一体何しに来てるんだよ僕達は。

「お昼にしましょう、阿良々木君」

「そうだな」

僕達は海の家で昼食を食べることにした。

僕達は、たこ焼きと焼きそばと冷やし中華を1つずつ頼んだ。

「阿良々木君、たこ焼き食べさしてあげる。あーん」

前もこんな状況あった気がするが、悪い気なんてするはずがない

「あ、あーん」

その時、戦場ヶ原はたこ焼きを床に落としてしまった。

「ごめんなさい、私としたことが滑ってしまったわ」

まぁ、今のはどう見てもわざとじゃないように見えたので

「あぁ別にいいよ」

戦場ヶ原は、その後ゆっくりたこ焼きを拾うとそのまま

「ではもう1回、あーん」

「あーん。じゃねぇわ!!落としたものを食わすんじゃねぇよ」

「何?阿良々木君、もしかして30日ルール知らないの?30日以内だったらセーフなのよ」

「アウトだよ！！言うんだったら3秒ルールだろうが！！３０日も経っていたら菌が付くどころか腐るわ」

てか３０日も落ちてたらただのゴミだよ

「ということは阿良々木君は３０日経った状態ってことね」

「誰がゴミだよ！！」

もうモノローグを読まれることに関してなんの抵抗も無くなった僕であった。
昼食を食べた後、戦場ヶ原は

「そういや私ってスイカ割りってしたことないのよ」

「そういや僕もやったことないな」

「というわけで今からスイカ割りをします」

「唐突過ぎだろ。あとスイカなんてないじゃないか」

「大丈夫よ。阿良々木君の顔を緑と黒で塗ってスイカの代わりに割ればいいじゃない」

「事件だよ！！割って流れてくるのは果汁じゃなくて血液だよ！！」

「いいじゃない、色は一緒だし」

「そういう問題じゃねぇ！！」

「じゃあ、今回は許してあげる」

今回はって、次はするのかよ。

とりあえず僕は、なんとか身を守ることができた。

「それより誰かジョーズみたいなサメに襲われるグッドイベントは起きないかしら」

「バッドイベントだよ！！何を恐ろしいこと言ってんだよ！！」

てかこいつの誰かって絶対僕のことだな。

「ひたぎクラブよりひたぎシャークの方がよかったのだけれど」

「知るか、そんなこと！！」

ヤダよ、鮫に行き逢った少女って。

恐ろしい話をされたものの、その後は当然平和に過ごせた。

てか僕に何かあったらこの話が出来てないし。

楽しい時間はすぐに過ぎるもので気付けば海が太陽でオレンジにな

る時間になっていた。

「戦場ヶ原、そろそろ帰るか」

「そうね」

そうして、僕達は着替えを済まして駅へと向かった。

電車の中で戦場ヶ原は、

「冬は以前言ってた通り北海道に行くから予定は空けときなさい」

「北海道？」

「忘れたのかしら？私の家で阿良々木君に私が裸を見られた時に言ったじゃない」

「僕が無理矢理見たみたいな言い方をするな！！お前が勝手にあの状態になったんだろうが！！」

「女性の方が立場が弱いのを利用して泣き寝入りにさせようて魂胆ね。酷いわ阿良々木君」

「人聞きの悪いこと言うんじゃねぇ！！てか僕とお前とならお前の方が立場上じゃねぇか！！」

「自分で言って情けないと思わない？」

「うるせぇ!!そんな哀れな目で見るな」

言った瞬間に思ったよ。
思ったけど事実じゃないか。

「それより思い出したかしら?」

「思い出すもなにも、あれ本気だったのか?」

「当たり前じゃない、私は嘘をついたことがないのよ」

「その言葉が既に嘘だよ」

「私が言っているのは嘘じゃないの、冗談よ」

「屁理屈だ!!」

「物は言い様よ」

「どっちでもいいよ!!」

「とりあえず冬は北海道行くから」

「行くって言ったって推薦で決まっている戦場ヶ原とは違って僕は受験があるし」

「そんなものセンター試験で受かりゃなんの問題もないわよ。そう

すれば2月中旬ぐらいには行けるわよ」

「簡単に言うなよ！！」

「何？私と羽川さま…羽川さんが見てあげてるって言うのに受かる気配もないって言うの？」

「今、また羽川様って言ったか！？」

「言ってないわよ、変な言いがかりはやめなさい。それよりどうするの？受かるの？どうなの？」

うっ…たしかにこれで受からなかったら僕はもうどこも受からないかもしれないぞ、本当に。

「う…受かるようにします」

「当然よ。これで阿良々木君が滑ったらもう人生終わりよ」

「そんなになのか！？」

「そうよ。話も滑っているのに大学まで滑ったらどうするつもり？」

「うるせぇ！！いつ僕の話が滑ったんだよ！？あと何回も滑るって言うな」

「え…そんな…本人に言うと…ねぇ」

「何だよそのリアルな感じは！？」

落ち込むぞ。本気で落ち込むぞ。

そして、地元の駅に着き、戦場ヶ原を送った後、自分の家に帰宅した。

こよみデイリー　9（後書き）

ついに裏サブタイトル「海物語ーこよみシー」が終わりましたｗｗｗ

次はどんな展開にしようか今考えています。

次回、久々にファイヤーシスターズの登場です？

こよみデイリー　１０（前書き）

ついに二桁いきました～。

さて、今回もおふざけが過ぎてますが見てあげて下さい。

こよみデイリー１０です。どうぞ。

こよみデイリー　１０

家に着くやいなや妹達が駆け寄ってきた。
こんな風に書くと兄の帰りを待っていた感じで微笑ましく思われそうだがこいつらは絶対違う。
いや、ある意味待っていたか？

「「（お）兄ちゃん、お帰りー」」

「あぁ」

「で、何か面白いことあったか？」

「面白いことって？」

「例えば、ジョーズに襲われたりとか～」

「お前は戦場ヶ原か！！」

このでっかいのもいつか戦場ヶ原みたいになるのか？
……てか、ダンベルを頭に落とそうとしてる時点で同じようなもんじゃないか。

「じゃあ、イカが侵略してきたり」

「しねぇよ！！」

どこぞのイカ娘だよ。

「なーんだ、イカは侵略しないでゲソか」

「語尾がおかしい！？」

「それより、お兄ちゃんいつ彼女さんを紹介してくれるの？今日は連れて来てないみたいだけど」

「あぁ、そういやそんなこと言ったなぁ。今度な今度」

「兄ちゃん、そんなこと言って本当はいないんじゃねぇの？」

「いるよ！！戦場ヶ原ひたぎって名前でいるよ」

「二次元で？」

「現実（リアル）だよ！！しかもこの話は2回目だよ」

「あ～私、都合の悪いことと良いことは忘れるように作られてるんだよ」

「全部じゃねぇか！！この鳥頭！！」

「何言ってんだよ兄ちゃん、私ポニーテールだからどっちかと言ったら馬だぜ。それぐらいわかれよ」

「その頭のこと言ってんじゃねぇよ！！」

こいつは馬鹿なのか?真正馬鹿か?
この先が本当に心配だよ、こいつ。

「とりあえず、約束だから忘れないでよ、お兄ちゃん」

「あぁ、わかってるよ。僕は火憐ちゃんじゃないからすぐには忘れないよ」

「私がいつすぐ忘れるようなことをしたって言うんだよ?」

「おい、でっかいの。すぐ忘れたことをすぐ忘れてるじゃないか。」

つい今までそのことで話してたじゃないか。

とりあえず、このまま話していると疲れそうだったので自分の部屋に戻ることにした。
部屋でくつろいでいると携帯が鳴った。

ディスプレイには
「戦場ヶ原ひたぎ」
の名前が表示されていた。

「もしもし、どうした?戦場ヶ原」

「あら、その声とアホ面は阿良々木君ね」

「テレビ電話じゃないんだから顔が見えるわけないだろ！！」

てか自分でかけてきたのにわからないのかよ。

さすが神原の師匠。

「冗談の反対よ」

「事実じゃねぇか！！」

「それより今日はありがとう。楽しかったわ」

「あぁ、僕も楽しかった」

「それで考えたのだけれど夏休みに勉強の息抜きに今度は山に行こうと思うのだけれど」

「あぁ、僕は全然構わないが」

「私あのアニメみたいに一回アルプスの山で大きいブランコに乗りたいのよ」

「あれは実現不可能だ！！」

「何のアニメだったかしら……思い出したわ。大自然の女ハイジね」

「アルプスの少女ハイジだよ！！」

なんだよその野性味溢れる生活をしてそうな女は。

クララもビックリですぐ立つよ。

「知ってるわよ、一緒にいる犬の名前も」

「なら聞いてみようじゃないか」

「パトラッシュ」

「ヨーゼフだ！！最終回になってもハイジは天に召されねぇよ！！」

「ちょっとフランダースの犬とアルプスの少女ハイジが混ざっただけよ。これでも私はアニヲタよ。」

「ほぉ、自信ありげだな」

「えぇ、昔のアニメも今のアニメもどんと来い超常現象よ」

「お前、誰がＴＲＩＣＫの上田次郎を知ってんだよ」

「それより問題を出してみなさい。阿良々木君をギャフンと言わしてあげるわ」

「じゃあ、アップ程度に…マルコが母アンナを尋ねるためにアルゼンチンへ旅に出る物語は？」

「馬鹿にするのも大概にしなさいよ。ほとんど答えが出てるじゃない」

「だから、アップだよ」

「答えは、母をたずねて三千歩」

「近えよ!!ご近所じゃねぇか!!」

「今のはわざと間違えてあげたのよ」

「じゃあ次は、女子高生が武道館を目標に音楽をしたり、高校生活の日常を描いたほのぼのアニメは?」

「へいおん」

「けいおんだよ!確かに平穏だけど」

「もっと簡単なの出しなさいよ」

「逆ギレ!?てか、けいおんも結構簡単だよ!!」

「化物語でひたぎクラブの主役は誰でしょう。とか阿良々木暦の彼女は誰でしょうとか西尾維新さんが書いてる小説の中で斎藤千和が担当してるキャラは誰でしょうとか出しなさいよ」

「全部お前じゃねぇか!!」

そんなひたぎ無双な問題がどこにあるんだよ。

「話は戻るけど山って言ったけどキャンプみたいな形で1泊するつもりだから」

「ならその辺のキャンプ場じゃダメなのか？」

「阿良々木君、この前私が連れて行った天文台覚えてる？」

「あぁ、星が最高に良かった」

「あれを超えるぐらいの星をもっと近くでみたいの。だから山がいいの」

「なるほどねぇ」

「だから阿良々木君、それまでに探しておきなさい」

「はいはい、わかったよ」

「はいは0回よ」

「それじゃ無視だろうが！！お前絶対怒るだろ」

「当たり前じゃない。誰だって無視されたら怒るわよ」

「無茶苦茶言うんじゃねぇ！！」

「探して見つかったら、いつも通りのある日に今夜星を見に行こうって言いながら立ち上がって言ってよ。そうしたら、皆でたまには良いこと言うんだねって笑ってあげるわ」

「完全に君の知らない物語じゃないか！！」

ここで名曲を出すなよ。
いや、ホント名曲だよあれは。
次世代の子供達へと伝えていきたい曲だよ。

「まぁ、探しておくよ」

と電話を切り何気なくカレンダーを見た。
今日は7月3日の日曜日かぁ。
あれ?僕なんか忘れていないか?
それも重要なこと…。

その時、忍が出てきた。
いきなり出るなよビックリするなぁ。

「お前様よ、重要なことっていうのは、あの蟹の娘の誕生日じゃないのか?」

そうだそうだガハラさんの誕生日……だ!?

そうだ、戦場ヶ原の誕生日だ!!
ナイスだ忍!!
ファインプレーだよ

「忍よく気付いた。ご褒美にチューをしてやろう」

「それで儂になんの得があるのじゃ！？」

とりあえず、明日何かプレゼントを買いに行くか。

こよみデイリー　１０（後書き）

え～囮物語発売ということで読破してきました。↑

なんていうか…うん…まさかの展開というか…あまり言うとネタバレになるんで言わないです。

さすが西尾維新さんですよ～

あれを見たらこんなふざけたやつを書いてて良いのかを本気で思います。

書くのを止めようかとも↑え

とりあえず、次回をお楽しみに～

こよみデイリー　１１（前書き）

まぁ、特に前書きはないです。

いつも通りのグダグダ感です。

では、こよみデイリー１１、いってみよー。

こよみデイリー　１１

僕は気付けば寝ていたらしく今日は妹達に叩き起こされた。

叩き起こされるというのは普通は無理に起こされることだが僕の場合は文字通り叩き起こされたのだ。

ここで叩き起こされるまでの回想を教えようと思う。

昨日、お風呂に入った後、忍にご褒美のキスをしてやろうとした時、吸血鬼パンチをアゴに喰い、１Ｒ、ＴＫＯとなったのだ。

その時、気絶しそのまま眠りについたらしい。

永遠の眠りにつかなくてよかったよ。

そして今朝、妹達に叩き起こされたのだが、起こし方が、ちっさい方の妹が、耳の横でフライパンを叩いて、僕がビックリして起き上がったところをでっかい方の妹の右ストレートを喰らったのだ。

どんなコンボだよ。

月火ちゃんのはまだ百歩譲って良いとしよう。

「おい。」

「お、兄ちゃん起きたか！！」

「あぁ、起きたよ。お前達に対する怒りがな」

「なんでだよー。私達は兄ちゃんの為に起こしてやってんのにさぁ。後、前兄ちゃんに怒られたからダンベルは使わなかったのに」

でっかい方の妹はブーブー横で言っている。

ダンベルを使わないのは当たり前だよ。
お前は僕を人間だと思っていないだろ。

いや確かに純な人間じゃないんだけどな。

「おい、でっかいの。起こしてくれるのは良いよ。ただ、お前が殴る必要はなかったよな？」

「え～！！だってフライパンだけで終わってたら私の出番ないじゃん」

「お前の出番なんか知ったこっちゃねぇよ！！」

僕は月火ちゃんを先に下に降ろし、でっかいのには軽く説教をし、学校へと向かった。

しかし、説教と言いながら例の歯ブラシ勝負になりかけたのは口が裂けても月火ちゃんには言えない。

何で言えないかって？
だって言ったら僕の体が裂けそうだもん。

通学路を歩いていると目の前に大きいリュックを背負ったクワガタ…ではなかった。

ツインテールの少女がキョロキョロしている。

八九寺である。

しかし、僕は学習能力はある。

この前の件で、悪いことをしたと思っている。

だいたい僕は八九寺のことそんなに好きじゃないし。

仕方ない、遠回りして行くか。

僕は走り出した。

八九寺に向かって。

「はーちーくー」

その瞬間、僕の右足を何かが掴んだ。

と同時に、アスファルトの上で綺麗なヘッドスライディングをすることになってしまった。

犯人は、わかっている、忍だ。

「痛え。おい、忍何するんだ!?」

忍に小さい声で聞くが返事はない。
その時、八九寺が近づいて来た。

「何を一人でアスファルトの上でヘッドスライディングを決めているんですか？斧乃木さん」

「おい、八九寺、僕を「僕はキメ顔でそう言った」という語尾を付ける僕っ娘みたいな名前で呼ぶな」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない！？」

「針撒いた」

「危ねぇよ！！」

お前はまきびしを撒く忍者かよ。
てかお前その時いないじゃないか。
なんで、余接ちゃんのこと知ってるんだよ、さすが八九寺Ｐ。

とにもかくにも今日も楽しかった。

「海はどうでしたか？阿良々木さん」

「あぁ普通に楽しかったよ」

「そうですか、残念です」

「なんでガッカリしてんだよ！」

「だって阿良々木さんのことだから当然ジョーズ並のサメに襲われたりとかしたんじゃないかと思ってましたもので」

「なんでお前までそうなるんだよ！」

「阿良々木さんは襲われる以外に需要があると思ってるのですか！？それって一体誰得なんですか」

「得もクソも関係ねぇよ！！何だよ需要って！！お前らは僕をどこまで不幸にする気だ！！」

「それは阿良々木さんの右手に宿る幻想殺しのせいです」

「そこまで言ったら完全にアウトだよ！！お前はどこの世界と混同させてやがる！！」

「私を誰だと思ってるんですか？別の世界を持ってくるぐらい私に

は容易いことですよ上条ｓ」

「アウトー！！それ以上喋んじゃねぇ」

これ以上八九寺と話していると、とある世界に飲み込まれそうだったので僕は無理矢理話を終わらして学校へ向かうことにした。
あくまでもとある世界っていうのは僕はわからないので皆さんの想像で補ってもらおう。
だって、わからないから「とある」と言っているのだから。

と心の中で一人で思っていると

「まぁ、とある世界というのは魔術や科学が交差してるのよ」

「僕がせっかく濁していたのに綺麗に説明してんじゃねぇよ、戦場ヶ原！！」

「綺麗だなんて朝から大胆ね。そんなこと朝からストレートに言われたらさすがに私でも恥ずかしいわよ、阿良々木君」

「お前のことを言ったんじゃねぇ！！」

「そうよね、阿良々木君ごときの虫けらが私の魅力に気付くはずないわよね」

「気付いてるよ！！僕には勿体無いことぐらい知ってるよ！！」

「そ、ありがとう」

気付けば周りのクラスメイトは僕達の方を見ていた。
やられた、完全に戦場ヶ原に嵌められた。
そこへ
「朝から楽しそうだね、阿良々木君」
「おぉ、羽川」
「おはよう」
「あぁ、おはよう。てか楽しくもなんともねぇよ。どう考えてもあいつが僕をいじって楽しんでるだけじゃないか」
「そんなこと言っちゃって」
「いやいやマジだって。あと今日の勉強の担当って羽川だったよな？」
「うん、そうだよ」
「すまん！今日は休みにしてくれ」
「それはいいけど何かあるの？」
「実は、戦場ヶ原の誕生日プレゼントを買いに行こうと思って」

「そういやもうすぐ戦場ヶ原の誕生日だったねぇ。それなら今日は特別に休みにしてあげる」

「サンキュー羽川。その分夜にしっかりやります」

「それより誕生日覚えてるって阿良々木君偉いね」

「え…う、うん。ア、アタリマエダロ」

「カタコトになってるよ」

「ソンナコトナイゼヨ」

「どこの時代のどこの人よ。まさか忘れてて忍ちゃんが教えてくれたとか？」

お見事です、羽川さん。
てか羽川がツッコミを入れた！？
なんでこんな時にボイスレコーダーを回してないんだ僕は。

「何でも知ってるな、羽川は」

「言わないよ？」

クソっバレたか。
良いパス出したと思ったのになぁ。
オフサイドになってしまったか。

「忍ちゃんに今度お礼にミスド買ってあげなよ？」

いや、羽川。すでに土曜日に購入済みだ。

てかなんてことを言うんだ！？

これで忍が起きてたら今日の帰り大変なことになるぞ。

頼むから寝ておいてくれよ。

そうして僕は、忍が起きていないことを祈りながら学校での１日を過ごした。

こよみデイリー　11（後書き）

八九寺「不覚です」

クロネコ「いきなり何をでせうか！？」

八九寺「以前出た時に後書きで出るのを忘れていました」

クロネコ「いやーおかげで書くのが楽でしたよ」

八九寺「もうこれは死ぬしかないです」

クロネコ「そんなにですか！？てかもう死んでるじゃん」

八九寺「幽霊は2度死ぬんですよ」

クロネコ「死なねぇよ」

八九寺「成仏する時です」

クロネコ「僕が悪かったです。それだけは勘弁して下さい」

八九寺「まぁ、こんなクソ小説で私は成仏しないですよ。それこそ悔いが残ります」

クロネコ「う…」

こよみデイリー　１２（前書き）

補足ですが前話での阿良々木君とバサ姉が話している時、ガハラさんは席を外しています。

ガハラさんがいるのにガハラさんの誕生日の話をすると阿良々木君は馬鹿になってしまうので一応補足をさしてもらいます。

こよみデイリー　12

授業が終わり、戦場ヶ原に一緒に帰ろうと誘われたが、なんとか誤魔化して現在、例のショッピングセンターにいる。

さて何を買ったら良いものか。

誰か連れてこればよかったかな。

神原は、暴走するからアウトだし、羽川はわざわざ勉強を休ましてもらってるから何だか悪いし、千石はそういうなわからなさそうだし、八九寺に関しては小学生だしどこにいるかすらわからないし。

僕って本当友達少ないな。

なんだかアンニュイな気分になった僕であった。

「あ、兄ちゃん」

なんだか聞いたことのある声だなぁ。

振り向くと僕より身長の高い女の子が立っていた。

「こんなとこで何してんだ?でっかいの。また正義ごっこか?」

「だからごっこじゃねぇって、正義そのものだ」

「まぁ、どっちでもいいけど。月火ちゃんは一緒じゃないのか?」

「うん?そりゃ時には別行動もあるってもんだぜ兄ちゃん」

「ふーん。で、何してんだ?」

「何ってショッピングセンターなんだから買い物に決まってんじゃん。そんなこともわからねぇのか?馬鹿だなぁ、兄ちゃん」

鳥頭で馬鹿な妹に馬鹿呼ばわりをされてしまった。

「いや、それはわかってるけど……まぁいいや」

「それより兄ちゃんは何してんだよ?」

「何ってショッピングセンターなんだから買い物に決まってんだろ」

しまった。馬鹿な妹と同じ返しになってしまった。

「あぁそうか!!買い物か。なんで私は気付かなかったんだよ」

それはお前が馬鹿だからだよ。
ほんの十数秒前の自分の言動を覚えてねぇのかよ。

「で、何買いに来たんだよ?兄ちゃん」

「まぁ、誕生日プレゼントだよ」

「自分の？」

「んなわけねぇよ！！彼女のだよ」

「兄ちゃんいい加減目を覚ませよ。存在してない人物に買っても金の無駄になるだけだぜ」

「だからいるっつてんだろうが！！」

「じゃあ証拠見せろよ」

「だから今度会わすって言ってるだろ」

「写真とかないのかよー」

「写真？」

写真なんてあったか？
と携帯のフォルダを開く。
すると1枚のツーショット写真が出てきた。

あーそういや海に行った時にテンション上がり過ぎて撮ったんだったけ？

「この前海に行った時のやつなら」

と若干ドヤ顔で見せる。

「う、う、嘘だー。嘘だー。こんな綺麗な人が兄ちゃんの彼女なわけない！！あーそうだ。これは夢なんだ。兄ちゃんビンタをしてくれ」

僕は実の妹にビンタを食らわした。
しかも往復。

「ほら痛くないってことは夢だ。よかったー」

「お前はどこまで頑丈なんだよ！！本当に神経通ってるのか！？」

「じゃあ、次は兄ちゃんが叩かれろよ」
「なんでそうなるんだよ！？お前がビンタしろって言ったからやｔ」

「パチーン」

説明しなくてもわかるだろう。
ビンタをされたのだ。
実の妹に。理不尽な理由で。

「痛えー！！何しやがるこのでかいのは！！」

ショッピングセンターで実の妹をビンタしビンタをされる。
痛くて痛い人になってしまった。

「わかったよ。兄ちゃんに彼女がいるのは認めるよ。てか写真見せられた時点で認めていたよ」

「じゃあこのビンタは意味ないじゃねぇか」

「え!?私は兄ちゃんにビンタされただけで得したと思ってるぜ」

「Mかっけー」

うん。実にMカッコイイ妹であった。

「で、何のプレゼント買うんだ?」

「いや、それで今迷ってて。ほら、プレゼントとかあげたことないし」

「無難にペンダントで良くね?」

「ペンダント?」

「そう、ペンダント。自分もお揃いのやつ買ったらいいじゃん」

「そうか。サンキュー我が妹よ」

「なになに礼なんていらないよ。お金さえくれれば」

「がっつり貰う気じゃねぇか!!」

その後、結局妹と一緒に買いに行ったのだが、というか勝手に付いてきただけなのだが、店員に「彼女さん大事にしてあげて下さい」と言われるハメになってしまった。

その言葉に火憐ちゃんは何故か上機嫌になっていた。

こいつは一体なんなんだ。

「私達恋人同士に見えるのかな？兄ちゃん！！」

何を満面の笑みで言ってやがる。

「彼氏のいるお前が何でも喜んでるんだよ！！しかも、実の兄相手に」

「それは心配ない。瑞鳥君は好きな人で兄ちゃんは愛する人だからセーフだ！！」

「アウトだよ！！いろいろとアウトだ！！」

こいつには一回、話し合いが必要だな。

ショッピングセンターを出て、火憐ちゃんは走って帰るということで別々に帰ることにした。

途中家へ向かって歩いていると

「お前様よ。ミスドはこっちじゃないぞ」

うん。影の中から忍さんである。
ミスド、ミスドってこいつさてはＣＭ狙っているな。

「え？いや、別にミスド寄る予定なんてないが」

「何じゃと！？」

と忍は水族館のショーのイルカ並のジャンプをしながら影から出てきた。

「儂が蟹の娘の誕生日をせっかく教えてあげたって言うのにそんな扱いをするかのう。あの委員長も言っておったじゃろ。礼をしろと」

起きてたのかよ。聞いてたのかよ。

なんであの時間に起きてるんだよ。
いつも寝ているのに。

「この前買ったとこだろ」

「それとこれては別じゃよ」

「今度買ってやるよ」

「ほぉ、恩を仇で返すんじゃな」

「そんな大それたことじゃないだろ」

「儂にとっては重要なことじゃよ」

「わかったよ。５つぐらいでいいなら買ってやる」

「１０個」

「なんだいらないのか」

「５個でお願いします」

結局ミスドで忍にドーナツを買って家へと帰った。

家に帰ると玄関にびしょ濡れの火憐ちゃんが立っていた。

「なんだ？風呂にでも入ったのか？」

「いいや、全力疾走で帰って来たから汗かいたんだよ」

いや、それは汗ってレベルじゃないぞ。

完全に水をかぶったみたいになってるじゃねぇか。

そんなことを思っているうちに僕の体が一気に湿った感触を帯びた。

でっかい方の妹が抱きついてきたのだ。

「いきなり何しやがる!!」

「いやーこの不快感を兄ちゃんにも味わって欲しくてー」

「味わいたくねぇよ!!なんの嫌がらせだよ。離れろ!!」

その時、2階からちっこい方の妹が降りてきた。

「何してるん?」

「頼む月火ちゃん、こいつを引き剥がしてくれ」

なんで関西弁なんだよ。

「玄関で兄妹で何イチャイチャしとんねん。ちょい待っとき」

だから、なんだよその関西弁は。

そう言いながら奥へと歩いていった。

ん？これってヤバいんじゃね？

「おい、でっかいの！今すぐ離れろ。離れないと大変なことになる」

「何言ってんだよ兄ちゃんは。まさか抱きついたことで欲情したとか！？」

「するわけないだろうが！！」

そんなやりとりをしてるうちに月火ちゃんが戻ってきた。

右手に果物ナイフを持って。

「いつまでそうしてるつもりなん？」

僕は本気で身の危険を感じたため火事場の馬鹿力というやつが出たのだろうか。

でっかいのを引き剥がすことができた。

その後、僕と火憐ちゃんは月火ちゃんに説教をされたのは言うまでもない。

その後は何事も無く日々が過ぎ、７月７日、戦場ヶ原の誕生日を迎えた。

こよみデイリー　１２（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「なぁなぁ月火ちゃん、今日関西弁使ってたよな？」

月火「そうだねぇ。私自身は関西弁よくわからないけどここの筆者が勝手に使っちゃうから使うハメになっちゃうんだよ」

火憐「とんだ迷惑やろうだな」

月火「本当そうだね」

火憐「それでは予告編クイズ～」

月火「クイズ～」

火憐「最近ではこの小説の癖が出てるのか日常でも標準語でツッコミをいれてしまう筆者だって」

月火「クイズじゃなくて筆者の現状報告だね」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー１２」

火憐「次は沖縄の言葉とか言われたら大丈夫か？」

月火「なんくるないさー」

こよみデイリー　１３（前書き）

なかなかネタが思いつかず間が空いてしまいました。

今回は少し短いですがこよみデイリー１３です。どうぞ。

こよみデイリー　13

7月7日、今日もいつも通り妹に叩き起こされた僕がいた。

今日は八九寺に会わなかったためかいつもより早く学校に着いた。

うーん…八九寺に時間を合わして会わなかった時のことを考えていなかったなぁ。

そんなことを考えていると

「あら人の死体が転がっていると思ったら阿良々木君じゃない」

「前より酷くなってる!?てかそれは事件だよ!!人の死体が転がってたら」

「商談よ」

「キャリアウーマンだったのかお前!?」

「私にかかれば交渉事なんてあっという間よ」

「お前に任せると全て破談になりそうだよ」

「失礼な。阿良々木君も私の件の時にわかったはずよ。沈黙と無関心を約束してもらう時、阿良々木君ったら言葉を発するどころか口を閉じて2回頷いて交渉成立したじゃない」

「無理矢理じゃねぇか！！口は閉じてねぇよ！！てかお前が閉じたんだろ。ホッチキスで」

「さぁ、なんのことかさっぱりだわ」

「とぼけんじゃねぇよ！！」

「私の脳は阿良々木君に関しての記憶は消えるようにできてあるのよ」

「ピンポイントかつ悪質な脳だな！！」

「冗談よ。阿良々木君の良いところだけ忘れるだけよ」

「それだと僕が残念な子にしかならないじゃないか！！」

てかマイナスなイメージしか残ってないじゃないか。

「残念な子は今更始まったことじゃないから安心してもいいわよ」

「なんの安心だよ！！」

戦場ヶ原が冗談を商談と噛んだことで僕への口撃はヒートアップしていくとは思わなかったな。

そんなこんなでいつの間にか時間は過ぎＨＲの時間になろうとしていた。

とりあえず、戦場ヶ原からは誕生日のキーワードが出なかったので僕が動揺することはなく、今日の授業を終えることができた。

授業を終え、僕は戦場ヶ原の家へ向かった。

「お邪魔します」

「邪魔するなら帰って頂戴」

「いきなりなんだよ！！」

「吉本新喜劇みたいな流れになるかなと思って。本当ノリが悪いわね阿良々木君」

「僕は関西人じゃないから知るわけないじゃないか」

「嘘よ」

「そろそろ休憩にしましょう」

「あぁそうだな」

「そうしないと阿良々木君の脳がパンクするわ」

「一言余計なんだよ」

「阿良々木君の頭の容量って１００キロバイトよね？」

「少な過ぎだよ！！携帯だと写メ１枚で終わりじゃないか。ギガとかテラですら足んないよ！！そんな値も越えてもっとあるよ！！」

「え！？そうなの？」

「なに真面目にビックリしてやがんだ！！」

「だって阿良々木君の口からギガとかテラって単語が出たから」

「お前僕を馬鹿にしてるんだな！？そうだな！？」

「馬鹿にしてるんじゃないわよ。馬鹿なのよ」

言い返せなかった。

いや、言い返すとより酷くなって返ってくるので諦めたが正解だ。

「お茶入れてくるわね」

「あぁ、ありがとう」

戦場ヶ原がお茶を入れて返ってきたところでプレゼントを渡した。

「戦場ヶ原、誕生日おめでとう」

「え!?何!?爆弾?それとも何か悪いことでもしたの?」

「素直に喜べよ!!」

「冗談よ。ありがとう。とても嬉しいわ」

「ならよかった」

「阿良々木君は誕生日プレゼント何が良い?ゲーム?」

「お前は僕の親か!!」

「だって阿良々木君って友達少ないからゲームの中だけでも友達を多く作ってもらおうかと思って」

「そんな気遣いは要らないよ!!」

「ならどんな文房具がいいのかしら?」

「僕は以前のお前じゃない」

「いや、私も今では使わなくなったから処分に困っているのよ。こんなにハサミやらホッチキスは要らないもの」

「僕はお前のゴミ収集業者じゃない!!」

「当たり前じゃない。阿良々木君はゴミそのものよ。燃えるゴミよ」

「またゴミ扱いかよ。僕は燃えるゴミじゃない！！」

「え！？燃えないの？ならお葬式の時は火葬ではなくて埋葬ね」

「そういう意味で言ったんじゃねぇよ！！」

「なら何が良いの？婚約届？」

「急に重たいよ！！」

「ガハラジョークよ」

「なんだガハラジョークって！？」

いや、正直ガハラジョークってネーミングセンスは有りだな。

「まぁちゃんとしたやつプレゼントするから楽しみにしていて頂戴な」

「あ、あぁ、楽しみにしてるよ」

色んな意味で楽しみだよ本当に。

この後、僕達は何事もなかったかのように勉強に戻った。

こよみデイリー　１３（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「実はこのこよみデイリー１３って戦場ヶ原さんの誕生日に合わして７月７日に投稿するつもりだったらしいぜ」

月火「結局、間に合わなかったみたいだね」

火憐「その理由が間に合いそうだったのにニコ動を見ていたらいつの間にか日付が変わってたんだって」

月火「とんだ間抜けバカ野郎だね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「私は来週出るでしょうか？」

月火「筆者すらわからない答えを読者がわかるはずないよー」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー１４」

火憐「短冊には神様が昇進します様にと書いたぜ」

月火「神様が最高位だよー」

こよみデイリー　１４（前書き）

最近ネタが本当に浮かんできません。

でも見てくれている人が１人でもいる限り書き続けます！！！↑うるせぇ

こよみデイリー　１４

戦場ヶ原の誕生日も無事に済み、早くも週末を迎えようとしていた。
時は金曜日の夕方、僕は一週間の疲れを感じながら帰宅をしていた。

「なんか僕って一週間を早く感じる割にはやたら疲れるな」

と一人言を呟いた時

「そうなのか？」

そう言いながら僕の横を駆け抜けて目の前で急ブレーキをかけたように止まる少女

「やぁ阿良々木先輩、奇遇だな」

神原である

「お前これに関しても奇遇じゃねぇだろ」

「さすが阿良々木先輩だ。お見通しってわけだな。いや、なに、学校にいると阿良々木先輩が呟いたのが聞こえたのでな。走ってきたのだ」

「お前の耳は地獄耳か！！」

地獄耳でもそんな聞こえねぇよ。

「何を言ってるんだ阿良々木先輩。阿良々木先輩の声が聞こえるのだぞ？天国の耳ではないか」

「そういう意味で地獄って言ったんじゃねぇよ」

しかも、道端で堂々と恥ずかしいことを言いやがった。

てか聞いてるこっちが恥ずかしいよ。

「そういや今週、戦場ヶ原先輩の誕生日だったな」

「あぁ、そうだよ」

「本当偶然だな。こればかしは」

「え？もしかしてお前も誕生日だったのか？」

「あぁ、私の愛読しているＢＬ本の新巻の発売だった」

「知るか！！そんなこと！！」

その言い方だったら完全に誕生日が一緒だろ。
なんの偶然でもないよ。

「しかも日にちも戦場ヶ原先輩と一緒だぞ」

「だから聞いてねぇよ！！」

誰かこいつを止められるやつはいないのか。

「それより神原、今週の日曜空いているか？」

「空いていなくても阿良々木先輩のためなら無理矢理にでも時間を作る」

相変わらず頼りになる後輩だ。

「そろそろ部屋を片付けに行こうかなと思ってな」

「それは助かる。そろそろ部屋が変態…おっと、私があまりに変態なために大変を変態と噛んでしまった」

「無理矢理過ぎるだろ。あと少しぐらいは自分で片付けてみろよ」

「いや～ほら言うじゃないか、片付けより三度の飯って」
「ただの規則正しい生活してるやつじゃねぇか！！」

まぁこれが神原なんだが。

「まぁそういうことだから頼むよ」
「あぁ、了解した」

その後颯爽と去って行った。
家に帰ると家の前に一人の少女が逆立ちの状態で立っていた。
いや、あいつしか居ないんだけど。
あのでっかい方の妹である。

「おい、でっかいの。一体何をしてるんだ？」
「おぉ兄ちゃん、お帰りー。今丁度逆立ちで街を一周してきたところだ」
「頼むから僕をこれ以上疲れさせないでくれ」
「勉強できない兄ちゃんがなんで疲れるんだよ」

「勉強はできなくても勉強はするわ！！」

「保健体育の？」

「中学生か！！」

このまま逆立ちをした女の子と話す男子高校生がいるのを見られては阿良々木家の評判にも繋がるのでとりあえず家に入れた。

「お兄ちゃん、火憐ちゃんお帰りー」

「あぁ、ただいま」

「ただいまー！！」

「珍しいね、お兄ちゃんと火憐ちゃんが一緒って」

「あぁ、帰ってきたら家の前でこいつが逆立ちでいたんだよ」

「今日もトレーニングお疲れー」

どんなトレーニングだよ。

「なんて言ったって火憐ちゃんはファイヤーシスターズの神風特攻隊だからね」

「ほぉ、片道分の体力だけを持って行くのか」

家に帰ってこれないじゃねぇか。
この街にどんだけ命をかけてんだよこの妹達は。

「そうだお兄ちゃん、最近この辺で都市伝説が増えたの知ってる？」

「都市伝説？」

「うん。学校のパソコンで調べてたら見つけて、今度はその調査するの。それで火憐ちゃんはトレーニングしてるんだよ」

「へぇ。どんな都市伝説だ？」

「えーとねぇ、今わかっているのが、文房具を武器にして襲う女の子と電車より速く走る女の子とリアル猫耳の女の子とツインテール女子小学生にセクハラをする男子高校生」

なんなんだそいつらは？
てかそんなやつら本当にいるのかよ。

あれ？てかなんか変な汗が溢れてきたぞ。
おかしいなぁ、風邪かな。

「へ、へ、へ、へぇ」

「お兄ちゃん何か知らない？」

「し、し、知らねぇなぁ。僕は全然知らないぞ。知るわけないぞ。うん」

「そっかぁ。でもこの中で一番許せないのはセクハラ高校生だよね、お兄ちゃん？」

「そ、そ、そうだなぁ。本当最低なやつだよなぁ」

月火ちゃんのそのタレ目が何か知ってそうで本当に怖いよ。

「そこで、私がセクハラ高校生を見つけてちょっとお灸を据えてやろうかと思ってトレーニングしてんだよ」

「お、お、おう、そうか。あ、あんまり無理するなよ」

「おう！てか兄ちゃんなんか顔色悪いぞ」

「い、い、いや大丈夫だよ」

「疲れてるんじゃねぇの？兄ちゃんもあんまり無理するなよ」

「あ、あぁ」

なんとかこの場を抜け出し、自分の部屋に戻った。

「なんだよ都市伝説って！！全部僕の周りにいるやつじゃねぇか！

！」

「良かったのぉ、お前様よ?まだ金髪美幼女を連れた男子高校生がミスドに来るとかが無くて」

忍である。

「あぁ、それが出たらすぐにあいつらは僕だと答えに辿り着くだろうな」

「お前様も大変じゃな」

忍は笑っている。
うん、こいつ僕のピンチを楽しんでやがる。

「クソっこうなったらあいつらの口を塞ぐしかねぇな。忍、血を吸ってくれ」

「何を怖いことを言っておるのじゃお前様！！実の妹君じゃろうが」

「大丈夫だ。火憐ちゃんはタフだし月火ちゃんは不死身だから」

「あの下のしでの鳥の妹のことは良いとして、上の妹の理由がタフってどんな理由じゃ！！」

「なんだよお前だって羽川のこと携帯食料って言ってたじゃねぇか」

「あれは若気の至りじゃよ」

「うるせぇ！！５００歳の老婆の本気だったじゃねぇか！！」

「まぁあの蟹の娘はもう更生したみたいじゃし心配はないじゃろう。猿の娘は速いというだけじゃから逆に凄いと思われるじゃろ。委員長は筆者が猫物語のことがあった体で書くかが問題じゃな」

「久々のメタ発言かよ。ビックリするなぁ」

いや、でもそうだな。

うん、たぶん日が進んで猫物語の日にちと同じ日になったら設定を入れてくるだろう。

てかそれだったらもう少しで戦場ヶ原はドロるのか。

「それより問題はお前様じゃよ。一番解明されやすいではないか」

「そうだなぁ。八九寺に合っても、またやりそうだなぁ」

「少しぐらい我慢ができんのか」

「まぁ頑張ってみるよ。あとミスドも行かない方が良いな」

「お前様、妹君達に処刑されるのは仕方がないことじゃな」

「お前自分がミスドに行きたいだけに僕の身の安全を捨てたな！？」

「なら儂はどうやってミスドを食べればいいのじゃ！！」

「食わなくても死なねぇよ！！」

「それで死んだら責任をとれるんじゃろうな？」

「だいたいそれで死ぬんだったらもっと前に死んでるだろ？ミスドができる前に」

「今はミスドが栄養源になっておるのじゃ」

完全に現代っ子じゃねぇか。

「もし、お前様がミスドに行かないと言うんじゃったら、儂はあの蝸牛の娘に走っていくお前様の足首を毎回掴むからな」

「よし、ミスドは行かないといけないな」

結局、僕に打開策は神からの許可が降りなかったようだ。

そう思いながら今までと同じ生活をすることを決めた瞬間でもあった。

こよみデイリー　１４（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「今日は都市伝説の話題だー！！」

月火「だー！！」

火憐「地球上のオナラを集めて爆発させると南半球がぶっ飛ぶらしいぜ」

月火「なぜ南半球!?北半球は!?」

火憐「それでは、予告編クイズ～！！」

月火「クイズ～！！」

火憐「なぜ南半球なのでしょうか?」

月火「だからそれを聞いてるんだよー」

火憐&月火「次回、こよみデイリー１５」

火憐「どうなったかはあなた次第です」

月火「ようは知らないんだね」

こよみデイリー　１５（前書き）

誰かネタを提供してくれる人はいないですかねぇ。

あ、ちなみに後書きを途中からアニメの化物語風にしたのはスルーして下さいｗｗｗ

では、こよみデイリー１５です。どうぞ～

こよみデイリー　15

僕が都市伝説の中心になりつつある今日この頃、どうにかこうにか日々を過ごしていた。

そして、今日は日曜であり、神原の家に掃除をしに行く日である。

そして、なぜか今日はいつもより少し早めに目が覚めた。

前にもこんなことあったよな？とドアに目を向けた途端

「兄ちゃん起きろー」

「お兄ちゃん起きなよー」

デジャブか？

「あれ？兄ちゃん今日も早く起きたのかよ」

「あぁ、それより右手を上げて持っているゴルフクラブを降ろせ」

「やぁ！！」

ドーンという音と共に僕のベッドが揺れる

「何しやがんだ！！」

「え！？だって降ろせって言ったじゃん」

「降り下ろせなんて一言も言ってねぇよ！！お前は僕を殺す気かぁ！！」

もしかして八九寺の件がバレたのか？

「あの世にホールインワン！！」

「上手くねぇよ！！おい、月火ちゃんからも何か言ってやってくれよ」

「私はウォーターハザードになっちゃうかも」

「それは三途の川か！？」

「あ！でも大丈夫！打ち直しは向こう側にちゃんと打つから」

「渡らすんじゃねぇ！！」

朝からなんだよ、コイツらは。

「で、兄ちゃんこんな早く起きてどこか行くのか？」

「あぁ、ちょっと早く起きてしまったけど」

「ふーん。まぁ私達はセクハラ高校生探しに行くんだけどな」

「お、おう、気を付けてな」

「何だよ気持ち悪いなぁ。いつもそんなこと言わないくせに」

「いや、あの、あれだよ、兄貴としての優しさを改めてわからそうかと思って」

さすがにこれは無理があったかな。

「そんなことしなくても兄ちゃんは優しいのはわかってるよ」

バカな妹でよかったとつくづく思った瞬間であった。

妹達の口撃もなんとかすり抜け現在神原の家に行くために自転車を走らせていた。

その時、前にはツインテール八九寺が現れた。

僕は自転車を止めて八九寺に駆け寄ろうとした時、八九寺がこちらを向いた。

「これはこれはドアラ木さんではないですか」

「八九寺、僕をバック転を何回も失敗した某野球球団のマスコットキャラクターみたいな名前で呼ぶな。僕は阿良々木だ」

「すみません、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた！」

「わざとじゃない！？」

「ガチすぎた」

「本当に噛んだのかよ！！」

うん。今日も良い一日になりそうだ。

「お久しぶりです阿良々木さん」

「久しぶりって言っても1週間ぶりぐらいじゃないか」

「いやいや阿良々木さんと会えない日が続くと長く感じるものですよ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか」

「はい！これで読者からの私への好感度が上がったと思います」

「台無しだよ！！」

「恩人にそんなことを言ってもいいんですか？」

「恩人？」

「はい。最近都市伝説の中心になりつつある阿良々木さんが私に抱きついてくるのを止めてあげたのですよ」

「何！？もう八九寺まで話が届いてるのか！？」

「はい！それはもう、文房具少女の戦場ヶ原さんや猫耳少女の羽川さんまで」

「ふっふっふ、お前は知ってはならないことを知ってしまったな」

「いや、だいぶ前から知ってますし」

「こうなればお前の口を封じるしかないな」

「もう死んでますって」

「まぁ冗談はおいといて、別にぼ、ぼ、僕はき、気にしてないしな」

「めちゃくちゃ気にしてるじゃないですか」

「そりゃそうだろ！！犯人は僕の妹に処刑されるんだぞ！！」

「いいじゃないですか。阿良々木さんは死なないんですし」

「死ななくても痛みは感じるよ！！」

「まぁ自動自得ですねっ！！」

「僕の意思は無視に動いていたのか」

それを言うなら自業自得だろ。

「その犯人が兄だと知ったら妹さん達はどう思うか」

「躊躇なく襲ってくるよ」

「お見舞いは行きますから安心して下さい」

「襲われる前提で話を進めるんじゃねぇ！！」

「それよりどこか行くんですか？」

「あぁ、神原の部屋を掃除しにな」

「もうそんな時期ですか。」

「そんな時期ってなんで知ってるんだよ」

「私を誰だと思ってるんですか？」

「さすがは八九寺Ｐ」

「私にかかれば小説の内容を変えることも簡単です。まよいオンリーとか」

「お前しか出てないじゃないか」

「私一人で十分です」

「ただの独り言になるだけじゃねぇか」

「独り言というより永遠と私の良いところを話し続けます」

「ん？１話完結の短編小説か？」

「失礼な！１００話までします。いざとなったらゲストに戦場ヶ原さんと羽川さんと千石さんと神原さんと忍野さんと忍さんと火憐さんと月火さんを呼びます」

「主人公の僕がいないってどういうことだ！？」

「まよいオンリーは私が主人公ですので阿良々木さんがいなくてもなんの問題もありません」

「新手のいじめか！！ある意味公開処刑じゃねぇか！！」

「まぁ冗談はここまでとして、もっとお話をしたかったんですが阿良々木さんが遅れるといけないので今日はここまでです」

「あぁ、またな」

「はい、またお会いしましょう」
八九寺と別れ、神原の家に着いた。

そして現在、神原の部屋の前にいる。

なぜ入らないかと言うと以前、開けた途端神原が裸で立っていたからだ。
八九寺と別れ、神原の家に着いた。
そして現在、神原の部屋の前にいる。

なぜ入らないかと言うと以前、開けた途端神原が裸で立っていたからだ。

僕は深呼吸をして喋りかける

「神原入るぞ」

「あぁ」

扉を開けて神原を見ると普通に服を着ていた。

なんだかんだ言ってたけどこう普通に服を着ているのは意外だった。

「どうした？阿良々木先輩。そんな意外なモノを見たような目をして」

「いや、なんでもない」

「あーそうか。脱げばいいんだな。そうか、それは悪かったな」

「僕が悪かった！！僕が悪かったから脱がないでくれ」

どういう光景だよ。

女子高生が服を脱ぐのを止める男子高校生って世界中探してもここだけだよ。

「とりあえずさっさと片付けるぞ」

「そうだな。今日は私も手伝うぞ」

「お、おぉ。そうか」

いや、まぁ自分の部屋なんだから手伝うのは当たり前なんだが。

掃除を全くしない神原と言っても二人ですれば少し早く終わると思っていた。

がその考えはすぐに崩された。

「おい神原」

「なんだ？阿良々木先輩」

「なんで来た時より散らかってるんだよ」

いや、まぁ自分の部屋なんだから手伝うのは当たり前なんだが。
掃除を全くしない神原と言っても二人ですれば少し早く終わると思っていた。
がその考えはすぐに崩された。

「おい神原」

「なんだ?阿良々木先輩」

「なんで来た時より散らかってるんだよ」

「阿良々木先輩ちゃんと片付けてくれないか?」

「お前だよ!!今からお前に掃除の仕方を教えてやる」

そうして神原に掃除を教えながら掃除をしたため終わった頃には外は綺麗な夕焼けが広がっていた。

「もう夕方じゃないか」

「助かったぞ阿良々木先輩。どう礼をしていいかわからない」

「いや、いいよ。僕が好きでやってるんだし」

「そうか脱げばいいのか」

「お前僕を馬鹿にしてるんだな。挑発してんだな!?」

「挑発と言うより誘惑の方が合ってるんじゃないか?」

「うるせぇ!!とりあえず脱ぐな!!」

「人間というのはするなと言われたらしたくなるものなのだ!!反対のことをしたくなるのだ」

「いや確かに悪戯とかはわからないでもないが」

「悪戯とはなんと卑猥な!!」

「そういう意味じゃねぇよ!!一般的な意味でだよ!!」

「私の中では一般的だと思うのだが」

「一般的じゃねぇよ!!」

「とりあえず、脱ぐなと言われたら脱ぎたくなるのだ」

「わかった、じゃあ脱げ」

「脱いで良いのか!?じゃあ遠慮なく脱がしてもらう」

「脱ぐんじゃねぇよ!!」

「どっちなんだ阿良々木先輩」

「それは僕のセリフだ！！反対のことをしたくなるんじゃねぇのか！！」

「脱げと言われたら誰だって脱ぎたくなるだろう」

「ならねぇよ！！結局、どうしたらいいんだよ」

「要は脱ぎたいのだ」

「僕の反論の苦労を返せ！！」

「そんなことを言われても仕方ないではないか」

「ってそんなことを言いながら堂々と脱いでんじゃねぇよ！！わかった、わかった。僕が悪かった」

なんだよ。
どのルートを辿ってもエンディングは一緒だったのかよ。
なんてクソゲーだよ。

その後なんとか脱がすのを阻止した僕は少し休憩した後帰宅した。

こよみデイリー　１５（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「笑っていいともってあるじゃん。あれのテレフォンショッキングで明日無理ですって言った人っているのかな？」

月火「どうかなぁ。さすがにいないと思うけど」

火憐「でも過去にゲストが間違い電話でかけた一般人が出たことあるらしいぜ」

月火「観客も視聴者も唖然だね」

火憐「私達も傷物語の作り間違いから偽物語にならないかなぁ」

月火「２００％ないよ」

火憐「それでは、予告編クイズ！」

月火「クイズ！」

火憐「笑っていいともが５０００回記念の時、地球が何周回った時だった時でしょうか？」

月火「小学生しか出さないよ、そんな問題」

火憐&月火「次回、こよみデイリー番外編」

火憐「次回も見てくれるかな？」

月火「いいともー！！」

こよみデイリー　番外編（前書き）

最初に言っておきますが今回は今までで一番クソな内容であり、見なくても本編に全く影響はありませんので、お時間がある方は見てあげて下さい。

それでは、こよみデイリー番外編です。
どうぞ～。

こよみデイリー　番外編

クロネコ「今回は番外編ということで僕も参加して僕主体でお送りします。そしてゲストはこの方たちです！！」

八九寺「読者の皆さんコンバトラー！！皆さんのアイドル八九寺真宵です！！」

阿良々木「どうも、阿良々木暦です」

クロネコ「では、この3人で（祝）１５回記念として番外編をお送りします！！」

八九寺「それよりクロネコさん。なぜ１０回目でもなく２０回目でもなく１５回目なんですか？」

クロネコ「良い質問ですねぇ」

阿良々木「何だよその池上彰さんみたいな喋りは！！」

クロネコ「いや～１回言ってみたくて～」

阿良々木「私情を持ってくるな！！」

クロネコ「今回ぐらい良いやん！！話を戻すけど、なぜ１５回かと言うと１０回の時点で忘れてたからです！！」

阿良々木「まぁそんなところだよなぁお前の場合は」

八九寺「あとＰＶが１０，０００を超えたのもあるんですよね？」

クロネコ「さすが八九寺Ｐ！！」

八九寺「まぁ未だにＰＶとユニークがわかってないかと思いますが」

クロネコ「うん。ＰＶ１３，５００のユニーク１，６００って言われてもさっぱりです！！」

八九寺「やっぱりでしたか」

クロネコ「でも見てくれる人が１人でもいる限り書き続けます！！！」

阿良々木「閲覧者が０人になったらどうするんだよ？」

クロネコ「止めます」

阿良々木「意思弱っ！！」

クロネコ「だって～読む人おらんかったら書く気ならんもん～」

八九寺「いい年した人が駄々をこねないで下さい」

クロネコ「大丈夫！まだ高校生に見られるから！！」

八九寺「そういうことじゃなくて」

クロネコ「前タバコを買いに行ったら免許証を３度見されました！！」

阿良々木「え!?お前タバコ吸うの?」

クロネコ「吸わんよ~友達の誕プレに買って行こうかと思って生まれて初めて買った」

阿良々木「そういうことか。てかこの回意味あるのか?グダグダ喋ってるだけじゃないか」

クロネコ「あるわ!!僕が関西弁を普通に使える場である!!」

阿良々木「だからお前の私情を僕達の話に入れてくるんじゃねぇ!!」

クロネコ「だってお前達の話って基本標準語やから癖で日常でも標準語でツッコミを入れてしまう時あるねんもん!!」

阿良々木「知ったこっちゃねぇよ!!」

クロネコ「そんな言い方すんねんやったら妹達の処刑を受けるように話を進めていいんやで」

阿良々木「僕が悪かった。許してくれ」

八九寺「なんですかこの情けない二人は。それよりクロネコさんにお聞きしたいことがあるのですが」

クロネコ「何でしょう?」

八九寺「この小説ってオチというか終わりはあるのですか?」

クロネコ「今年の夏も暑いと思わないか?阿良々木君」

八九寺「話を変えました!!あからさまに変えましたねクロネコさん」

クロネコ「この世には聞いても良いこととそうでもないことがあるんですよ八九寺さん」

八九寺「聞いてはいけないことはないんですね」

クロネコ「まぁ正直に言いますと終わりは今のところ考えてないんで阿良々木さんにはもっとがんばってもらわないといけないです」

阿良々木「例えばどうしたらいいんだよ?」

クロネコ「うーん。大学受験に落ちたり、留年したり」

阿良々木「絶対嫌だよ!!そんなことしたら戦場ヶ原に何を言われるかわかんねぇよ」

クロネコ「ケチやなぁ。スーパー玉出は1円セールしてんねんぞ」

阿良々木「知らねぇよ!!なんだよスーパー玉出って」

クロネコ「何!?スーパー玉出を知らんのか!?お前もう関西から出て行きやがれ!!」

阿良々木「その前に僕は関西に住んでねぇよ」

クロネコ「じゃあ、お前のとこにあるミスドをスーパー玉出に変えてやろうか？」

阿良々木「いや、僕はいいんだけど忍に何されるか知らねぇぞ」

クロネコ「仕方ない諦めるか」

八九寺「というかグダグダ過ぎませんか？」

クロネコ「うん。僕も薄々は気づいていました」

八九寺「テーマを決めてやった方が絶対良かったじゃないですか」

阿良々木「それは僕も思う」

クロネコ「二人で責めるなよ～。だって笑っていいともでもタモさんと千原ジュニアと鶴瓶がテーマ無しで話してるやん」

八九寺「それはプロだからですよ」

クロネコ「いいよ。じゃあ次回はテーマを決めてやりますよ」

八九寺「次回は無いと思いますが」

クロネコ「この番外編がコケすぎて？」

八九寺「その前にこの小説自体が打ち切りになるかもです」

クロネコ「もう少し頑張らせて下さい」

八九寺「ところで阿良々木さん、今日はいつもより静かですけどどうしたんですか？」

阿良々木「だって変にツッコミを入れるとコイツに何されるかわかったこっちゃねぇもん」

クロネコ「イエス！！」

八九寺「じゃあ私が良いこと教えてあげましょう。私はクロネコさんよりも立場が上です。なのでクロネコさんが決めたことでも私がもみ消すことぐらいちょちょいのちょいです」

阿良々木「てことは僕は普通に言い返せるってことか！？」

八九寺「まぁ助けませんが」

阿良々木「なんでだよ！！」

八九寺「今までしてきたことをお忘れですか？私のファーストタッチを奪い、それ以降もセクハラを繰り返してきたのに」

阿良々木「あ、あれはスキンシップだよ」

八九寺「あんなスキンシップがあってたまるものですか！！」

阿良々木「わかった。僕が悪かった。許してくれ」

八九寺「じゃあ、もうしませんか？」

阿良々木「それはむりだ！」

八九寺「なんでそこだけ今までで一番の即答なんですか！？反省の色が見えません！！」

阿良々木「僕の反省の色は透明だ」

八九寺「そんな屁理屈な答えはいりません！！」

クロネコ「あ、あの～僕を忘れて二人で話さないでもらえますか？」

八九寺「あーまだいたんですか？」

クロネコ「作者の扱い酷くないっすか？」

八九寺「てか私達の話に勝手に出てこないで下さい。あなたは書いてればいいんです」

クロネコ「僕の頑張りを見てないんですか！？」

八九寺「それよりそろそろ終わりですよ。最後ぐらい作者らしいことをして下さい」

クロネコ「え～本日の番外編はどうでしたでしょうか？本編以上のグダグダ感が否めませんがたまには良いかなと思っています」

八九寺「いやいつもグダグダやったら意味ないじゃないですか」

クロネコ「そこはスルーして下さい。それでは予告編クイズ！！」

八九寺「それは後書きで火憐さんと月火さんがするのでやらなくて良いです」

クロネコ「うっ…じゃあ、次回、こよｍ」

阿良々木「ストップ！！それもするからやらなくて良い」

クロネコ「じゃあ、何をしたら良いんですか～！！」

八九寺「それでは今回お送りしましたのは、皆さんのアイドル八九寺真宵と」

阿良々木「阿良々木暦と」

クロネコ「クロネコがお送りしました。次回の番外編は２０回目か３０回目か未定です」

八九寺「やっぱりグダグダですね。さすがクロネコクオリティ」

クロネコ「ちなみに次回の番外編のゲストはヴァルハラコンビの神原と戦場ヶ原さんだと思います。それではまた」

こよみデイリー　番外編（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「なぁ月火ちゃん、この回って１５回記念なのに１６回目にしてるよな？」

月火「仕方ないよ作者さんが馬鹿なんだから」

火憐「あと、この回さすがにグダグダ過ぎねぇか」

月火「うん。でもたぶん作者さんが一番わかってると思うよ」

火憐「これに私達も出る日が来るのか？」

月火「望みは少ないけど、あるね」

火憐「このグダグダ感に巻き込まれると思うと憂鬱だぜ」

月火「だねー」

火憐「それでは、予告編クイズ～」

月火「クイズ～」

火憐「七夕の日に皆は何をお願いしたかな？」

月火「ただの質問じゃん！」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー１６」

火憐「番外編には出なくて済みますように」

月火「もう七夕は終わったよ」

こよみデイリー　１６（前書き）

さて大コケしたと思われる番外編から本編に移しまして、番外編の方を見た方は忘れて下さい。

では、こよみデイリー１６、行ってみよー。

こよみデイリー　16

都市伝説の中心になりつつあると言ったがまだバレていないのか、平凡な日々が過ぎ、終業式の日になった。

終業式が終わり、ＨＲも終わったため皆は帰って行ってるが、僕は教室で羽川と話していた。

「１学期も今日で終わりかぁ」

「そうだねぇ。この１学期っていろいろあったよね」

「そうだなぁ。この１学期で羽川とも話すようになったし」

「戦場ヶ原さんという彼女もできたしね」

「一生分の出来事をこの３ヶ月に全て体験したような気分だよ」

「一生かかっても普通は怪異に遭遇しない人の方が圧倒的に多いけどね。」

「そうだよなぁ。地獄のような春休みも含めて」

「でも、後悔はしてないんだよね？」

「するわけないだろ。むしろあの出来事があったからこそ今の僕がいるんだ。むしろ感謝するべきだよ忍に」

ただ僕は忍を許すことはないし、忍は僕を許しはしない。
そんな関係だ。

「そんなこと言ってると忍ちゃんにミスド買わされるよ？」

「忍は今の時間起きてねぇよ」

たぶん。
前にも似たような出来事があったような……いや、あれは夢だ。うん、夢に違いない。
忍がこの時間に起きてるはずないもん。
頼むから寝ててくれ忍さん。

「私、今から保科先生に呼ばれてるから今日はここで。じゃあね」

「あぁ、勉強の日はまた頼むよ」

「うん」

そして、一人で呆けていると

「あらどうしたの？阿良々木君。そんな間抜け面して」

「間抜けは余計だよ。用事は済んだか？」

「ええ。お陰様で。フラスコ計画は順調よ」

「ここは箱庭学園だったのか？めだかさん！？」

「何を言ってるの？私はひたぎちゃんよ」

おっと、僕としたことがメタツッコミになってしまった。
気を付けなければ。

てか自分でちゃん付けするなよ

「てか用事終わったんなら帰るぞ」

「そうね」

その後、駐輪場に行き、戦場ヶ原を自転車の後ろに乗せ二人乗りの状態で僕はペダルを漕ぎ始めた。

こんな場面、羽川に見られたら確実に説教されるな。

「ところで阿良々木君、星が綺麗に見える場所見つけてくれた？」

「あ…悪い。まだだ」

「はぁ、本当に役に立たないわね。これなら石原良純の天気予報の

方がまだ役に立つわよ」

「僕は言われるのはまだいいよ。今すぐ良純さんに謝罪をしろ！！」

「阿良々木君が失礼極まりないことを言い申し訳ございませんでした。今後私が責任を持って監視し、反省させます」

「なんで僕が言ったことになってるんだよ！！」

「だって阿良々木君が言ったんじゃない」

「言ってねぇよ！！数行上を見てみろよ！！」

「あぁ、そのことなら意味ないわよ。投稿した後にコピーして書き替えるから」

「卑劣極まりねぇよ！！」

「それより８月１２日から１４日の間に行くからそれまで頼むわよ」

「ペルセウス流星群か」

「よくわかったわね、馬鹿なのに」

「だから一言余計なんだよ。他に言い方あるだろ」

「うましか」

「その言い方じゃねぇよ！！バカを訓読みしただけじゃねぇか！！」

「よくできましたー。よくできた阿良々木君には花丸をあげましょ

う」

「お前、僕を舐めてるんだな！？」

「舐めてるんじゃないわよ。馬鹿にしてるのよ」

「一緒だよ！！」

「馬鹿が馬鹿の問題を解いたなう」

「うるせぇ！！Ｔｗｉｔｔｅｒに書き込むんじゃねぇ！！」

「で、どうなの？決めれるの？」

「まぁ、７月中には決めておくよ」

「よろしくさん」

そして、話しているうちに戦場ヶ原の家に着いた。

「上がって行ったら？お茶ぐらい出すわよ」

「ありがとう。そうさしてもらうよ」

「お茶っ葉は１５０回ぐらい使用したやつだけど」

「もうただのお湯じゃねぇか！！」

「違うわよ。お茶風味のお湯よ」

「どっちでもいいよ！！」

「嘘よ。ちゃんとしたやつ出すわよ」

「ところで阿良々木君、通知表の成績はどうだったの？」

「あぁ、１学期の半ばぐらいからは結構頑張ったから上がってたよ」

「あらそう、つまらないわね。私的にはあれだけ教えてもらったのにむしろ下がってオール１だったていう展開の方が良かったわ」

「そこまで行ったらもう救いようねぇよ！！素直に留年を覚悟するよ」

「留年したら八つ裂きにするわよ」

「怖いこと言うなや！！」

「良いじゃない。臨終の際に最後の立ち会いの人が彼女の私なのよ。素晴らしき愛よ」

「歪んだ愛だよ」

「何よ。それとも、最後に会う人が私だったら不満なわけ？」

「そんなことないです！！」

「それとも私のお父さんの方が良いのかしら？」

「頼むから勘弁してくれ」

「何？そんなに私のお父さんが嫌いなわけ？」

「そうじゃないよ。てかそういう問題でもない」

「じゃあ何よ？」

「なんで僕が死ぬ体で話を進めてるんだよ！！」

「え！？だって八つ裂きになるんだから死ぬに決まってるじゃない」

「なんで僕、留年してるんだよ！！」

「頭が悪いからじゃない？」

「うるせぇ！！いや、確かにお前よりかは悪いのはわかってるけど」

「ごめんなさい。阿良々木君は頭が悪いんじゃないわ。頭が弱いのよ」

「より酷くなった！？」

「ところで阿良々木君のアホ毛って生きてるのかしら？」

「いきなりなんだよ」

「ほら、アニメの時クネクネ動いてたじゃない」

「演出だよ。実際に勝手に動いてたら気持ち悪いだろ」

「そうね。だから阿良々木君のこと気持ち悪いと思ってたんだ。納得だわ」

「今サラッと悪口を言ったな？」

「言いがかりはやめて頂戴。私は生まれてこのかた悪口を言ったことなんてないわよ」

「嘘つくんじゃねぇよ！！少なくともこの小説だけでも出る度に毎回言ってるよ！！」

「あれは私じゃないわ」

「じゃあ誰だよ！！」

「もう一人の阿良々木君よ」

「自分の過ちを僕に擦り付けるんじゃねぇ！！」

まだもう一人の私とかの方が納得しやすいよ。

まぁ、どっちにしろ納得はできないが。

「それよりアホ毛がある人ってなんでいろいろと不安定なのかしら？」

「何がだよ」

「私の知っている限りでは、そふてにっの明日菜ちゃんは極度の妄想癖だし、Ａチャンネルのるんちゃんはド天然だし、そして阿良々木君は頭が弱いし」

「なんで僕だけ悪口なんだよ！！」

「じゃあ他に何があるって言うの？」

「自分で考えろよ！！本人が言えるはずないだろ」

言いたくもないよ。

「そうねぇ……ゴミ…クズ…馬鹿…ごめんなさい。悪口しか見つからないわ」

「そんなこと堂々と素直に謝るんじゃねぇよ！！」

逆に余計傷つくよ。

「じゃあ、馬鹿の中に鹿ってあるからせんと君でいいんじゃない？」

「適当だな！！僕とせんと君の繋がりは一切ねぇよ！！」

「そんなこと猫でもわかるわよ」

「お前が言ったんだろうが！！」

「猫って言っても羽川さんじゃないわよ」

「わかってるよ！！」

「阪本でもわかるわよ」

「あの赤いスカーフがなかったら逆に僕達が何言ってるかわからないよ」

今度は日常ネタかよ。
わかる人いるのか？

「私は阿良々木君が何言ってるのかちょっとわからないわ」

「何でだよ！！」

「日本語で話して頂戴」

「日本語だよ！！Ｊａｐａｎｅｓｅだよ！！」

「Ｊａｐａｎｅｓｅって英語じゃない」

僕は馬鹿だった。

それからしばらく喋った後、帰宅した。

こよみデイリー　16（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「夏だー」

月火「だー」

火憐「夏なんだよな？」

月火「なんだよー」

火憐「てか最近やたら私達の出番多くないか？」

月火「少ないより良いじゃない？」

火憐「そうだな」

月火「だね」

火憐「では、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「阿良々木家の昨日の晩御飯は何だったでしょうか？」

月火「誰もわからないし、誰も興味ないよ」

火憐&月火「次回、こよみデイリー17」

火憐「昨日の晩御飯何だったけ？」

月火「自分がわかってないじゃん」

こよみデイリー　17（前書き）

ガハラさんとファイヤーシスターズが出るとネタがポンポン出てきます。
面白い面白くないは別にして。

それでは、こよみデイリー17でーす。

こよみデイリー　17

家に着き、一息つくためベッドに寝転んだ。

その時、僕の部屋のドアが勢いよく開いた。

「兄ちゃん、1何個あったんだよ?てか宿題手伝ってやろうか?なぁなぁなぁ」

あれ?今更だけど妹ってこんなにうるさいのか?

テレビのドラマとかアニメだと兄に対して妹が宿題がわからないから手伝ってっていうのを何回も見たことあるのに……おかしいなぁ。

いつのまにこの相場は崩れたんだ?

「勝手に入ってくるなり失礼なこと抜かしやがって。1なんて1つもねぇよ!!1どころか2もねぇよ!!」

「な、なんだと!?これは不吉なことが起こる前兆なのか!?月火ちゃんに報告しなければ!!月火ちゃーん」

と部屋を出て行った。

うるさい妹である。

本当誰に似たんだよ。

そしてすぐに、ちっこい方の妹を連れて戻って来た。
忙しい奴らだ。

「お兄ちゃん1がないどころか2もなかったんだって!?」

「あぁ」

「なんでそんなことするのよ!!私はまだやり残したことがあるの!!まだ死にたくないの!!」

えっ!?なんで僕怒られてるの?
成績が上がって褒められるのはわかるが、怒られるって……。

あーなるほど新しいボケだな、これは。
なんともシュールなボケをかますじゃないか。

「とりあえず、私は街の皆に避難勧告を出してくるから月火ちゃんはネットで避難勧告を促しといて」

「わかったよ、火憐ちゃん」

え?なんかボケ長くない?
そんな続けてたらツッコミが入れられなくなるよ?

部屋から出て行こうとする妹達を

「ちょっと待てコラ！！」

「なんだよ兄ちゃん、今は1分1秒を争うんだよ！！」

「争わねぇよ！！僕が成績上がったぐらいで大騒ぎするなや！！何も起こらねぇよ！！」

「私的にはノストラダムスの予言の再来と言っても過言じゃないと思うぜ」

「過言だよ！！」

だいたい、ノストラダムスの予言は外れたじゃねぇか。

「え！？じゃあ何も起こらねぇの？」

「起こるわけねぇだろ」

「なーんだ。もう、騒がすなよな兄ちゃん」

「いやお前らが勝手に騒ぎ始めたんだろうが」

てか、やたらあっさりだな。

「あれ？月火ちゃんは？」

「ん？あーたぶんネットに配信しに行ったんじゃねぇの？」

「行ったんじゃねぇの？じゃねぇよ！！」

と止めに行こうとした時

「ほら、見てみろよ兄ちゃん。Ｔｗｉｔｔｅｒやってんだけど、月火ちゃんのつぶやき」

「見せてみろ。「お兄ちゃんの成績が上がったなう。明日、天変地異が起きるから皆さん逃げて下さい」」

間に合わなかった。

しかも、なぜかやたらとフォローされてるし。

「とりあえず今回はもう手遅れだから見逃してやるけど今後騒ぐんじゃねぇぞ」

「じゃあ、兄ちゃんが成績を下げたらいいじゃん」

「なんで僕の成績を犠牲にお前らの騒ぎを防がなきゃなんねぇんだよ！！」

「だって手遅れじゃん！！」

「まだ間に合うよ！！」

「来世は頑張ろうぜ、兄ちゃん！」

「諦めた言い方すんじゃねぇ！！」

「諦める勇気も時には必要だぜ」

「黙れ！！とにかく僕は留年はしない」

「留年したら制服を来た私と一緒に登校できるんだぜ」

「いや、お前のとこ一貫校だから受験もしなくていいし、学校が違うじゃねぇか」

「え？そうなの？てっきり直江津にも通えるのかと思ってた」

「２つ通えるわけないだろ。習い事じゃねぇんだから」

「じゃあ、途中まで一緒に行こうぜ」

「最終的にお前のお願いになってるじゃねぇか。てか留年した体で話してるんだよ」

「悪い悪い、ついちゃっかり」

「わざとじゃねぇか！！」

てかこのやりとりどこかでやったような気がするぞ。
デジャヴか？
最近デジャヴが多いなぁ、本当に。

「え?デジャヴとかじゃなくて私は戦場ヶ原さんの返し方を参考にしただけだ」

「人のモノローグを勝手に読むんじゃねぇ!!てかお前は一応まだ戦場ヶ原のこと知らないだろ」

「私は真面目だからこの小説を読んで復習したのさ」

「しなくていいよ!!することによって時系列がめちゃくちゃになってしまうよ!!」

「私は歴史を変えれる女なのさ」

「頼むからそれ以上喋らないでくれ」

これ以上こいつと話しているとこの小説の今後にも影響しそうなので無理矢理に話を終わらせ部屋から出て行かした。

「お前様よ」

「急になんだ?忍。あ……ミスドなら買わねぇぞ」

「わかっておるわい。しかも儂は最近、我慢して我慢して一気に食べようと考えているしな」

それって次行く時にとんでもない量を買わされるってことじゃん。

その日が怖いよ。

「そうじゃなかったらなんだよ？」

「それは……その…」

「なんだよ、はっきり言えよ」

「じゃあ、言うぞ？」

「あぁ」

「最近、儂の出番少なくないかの？」

「……」

「のぉ？」

「……知らねぇよ！！そんなこと僕に言われてもどうしようもできねぇよ」

「だってお前様は番外編まで出ていたんじゃからそれぐらいは言えるじゃろ？」

「番外編は本編とは無関係なんだから話を出すな」

「なぁどうにかならんのかの？なぁお前様よ、なぁなぁ」

めんどくさい奴だなぁ。

以前の無口な忍はどこに消えたんだよ。

どいつもこいつも出たがるなぁ。

千石を見習えよ。

あいつ出てきたの最初の方の1回だけだぞ。

今度、出してやらないとな。

「そうだお前様よ、これからはなるべく夜に出掛けんか？」

「なんでだよ？」

「儂が起きているからじゃ」

「結局お前が出番ほしいだけじゃねぇか。千石を見てみろよ。あいつなんて出たの1回だけだぜ」

「あの娘は内気じゃから別にいいではないか。儂は社交的なんじゃよ。出たがりなのじゃ。出たがり芸人じゃ」

「芸人はほとんど出たがりだよ」

その内容でアメトークでやっても参加芸人が芸能界にいる芸人ほとんどになって大変なことになるよ。

「ならミスド芸人はどうじゃ？」

「そもそもお前は芸人ではない」

「別にいいではないか。ちなみに作者はガリガリ君芸人じゃぞ」

「聞いてねぇよ」

「お前様はロリコン芸人じゃな」

「ただの変態じゃねぇか！！だいたいロリコンではない」

「それでロリコンではないと言うんじゃったらこの世からロリコンはいなくなるぞ」

僕がロリコンと思われているなんてこれは困ったものだ。

「それより今夏アニメのうさぎドロップに金髪少女が出ているのじゃがあれは儂のライバルか何か？」

「いきなり何を言い出すんだよ。全くライバルじゃねぇよ。てか分野が違うじゃねぇか。お前は金髪幼女枠だよ」

「見た目一緒ぐらいの歳だったのにか！？何故じゃ！？」

「僕の判断だ」

「やっぱりか」

「ところでお前様よ」

「なんだよ？」

「学園都市に行きたい」

「は？」

「だから儂は学園都市に行って能力をつけたいのじゃ」

「身につけなくても僕の血を飲めば十分強いじゃねぇか」

「儂は超電磁砲を身につけて街中でぶっ放したいのじゃ」

「とんでもないことを言うんじゃねぇよ！！」

「そうすれば儂の出番も増えるじゃろ？」

「お前の出番と引き替えに街中の人がいなくなるよ」

「それは、ミスドも無くなるのか？」

「あぁ、綺麗に無くなるよ」

「じゃあ、諦める」

単純な考えだなぁ。

お前本気でミスドのＣＭ狙ってるだろ。

「じゃあ今から日常物語から傷物語に変えんか？」

「変えねぇよ！！てか既存の作品だし、本物の作家が書いてるよ！

！」

「でも２０１２年の映画公開まで待てんぞ」

「今年だとハヤテのごとくとかけいおんとか強敵ばかりだぞ」

「うむ。２０１２年で正解じゃな」

こうして忙しなかった１日を無事終えることができた。

こよみデイリー　17（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「いきなりだけど夏と言えば！？」

月火「海！！」

火憐「そうだよなぁ、海だよなぁ。なんで海で食べる焼きそばってあんなに美味しいのかな？」

月火「祭の屋台で食べる焼きそばも美味しいよね？」

火憐「あと焼きそばを食べたい時とカップ焼きそばを食べたい時って別だよな？」

月火「そうだねぇ。焼きそばに近いけど勝ってもいないし、負けてもいないよね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「この現象をカップ焼きそば現象と名付けたぜ」

月火「クイズでもないし何か聞いたけとあるよ」

火憐&月火「次回、こよみデイリー１８」

火憐「これはみなみけから引用したぜ！！中の人繋がりで」

月火「だと思ったよ」

こよみデイリー　１８（前書き）

小、中、高生の方は夏休みに入ったんですかね？

こよみデイリー　18

翌朝、毎度お馴染みのように妹達に叩き起こされる僕がいた。

「兄ちゃん、朝だぞー！！」

「お兄ちゃん、朝だよー！！」

「起きろー！！」

「起きなよー！！」

「起きねぇと兄ちゃんの部屋でエロ本探しするぞ」

「お前は男子中学生か！！」

まぁ探しても見つからねぇよ。
なんせお前達の部屋に隠してるんだからな。

「兄ちゃんのことだから私達の部屋に隠してたりしてな」

「さすがにそれはないよ火憐ちゃん」

「そ、そ、そうだよ。ぼ、僕がそんなとこに隠すはずないじゃないか」

「冗談だよ月火ちゃん。本当に私達の部屋に隠してたら私達は兄ちゃんに姉妹かめはめ波を食らわすぜ」

「それを言うなら兄弟かめはめ波だろうが」

「私達は姉妹なんだから姉妹かめはめ波でいいじゃん」

てか悟飯と悟天の技をパクるなよ。
てかなんで劇場版で使った技を持ってきたんだよ。

「私はさすがにそこまでの大技を出すのはお兄ちゃんに悪いよ。だから、火憐ちゃんはかめはめ波で、私はジャン拳でチョキだけを出すよ」

「目潰しって月火ちゃんが何気に一番酷いよ！！」

というか、なんでドラゴンボールの話になってんだよ。
てか、もうこれは絶対バレないようにしないと駄目だな。
見つかったら僕は殺されるぞ。

今度こいつらが出て行っている間に場所を変えるか。

朝食を摂った僕は羽川と勉強のため図書館に向かった。

羽川は僕の家でも良いと言ったが、僕の家に来ると妹達に邪魔されかねないので図書館にしてもらった。

図書館の前に着くとすでに羽川が待っていた。

「やっほー阿良々木君」

「悪いな待たせて」

「私も今来たところだから」

「そうか」

中に入ると人は全くいなかった。
まぁこれから増えるだろう。

と思いながら一番奥の席に座り勉強を始めた。
2時間程勉強をしたとこで休憩に入った。

「そういや羽川って世界一周をするって言ってたけど言葉とか話せるのか？」

「英語とかならなんとなるかもしれないけどフランス語とかドイツ語は挨拶程度かな。あとは笑顔とジェスチャーだよ」

「Ｄａｓ　ｉｓｔ　ｚｕ　ｔｅｕｅｒは覚えておけよ」

「高すぎます？」

「お前は何でも知ってるな」

「なんでもはｓ……って言わないよ」

「クソっもう少しだったのに」

「というかなんでそんな言葉知ってるのよ？」

「2、3年程前にドイツ語に興味を持って調べてたらこの読み方のダス・イスト・ツー・トイヤーをバズ・ライトイヤーみたいで覚えてしまったんだよ」

「知ってるのはその言葉だけ？」

「あぁ」

「もしかして、知ってるからそれを言っただけ？」

「その通りだ羽川。本当なんでもｓ」

「言わないって言ってるでしょ。他に知らないの？」

少しぐらい言ってくれよ羽川。

作者が知ってるドイツ語を言わされた僕の身にもなってくれ。

てか知ってた理由は作者の実話だよ。

「無限の彼方へ、さぁ行くぞ！」

「知らないからってバズ・ライトイヤーの決め台詞を言わなくてい

いから」

「帰って来たらどうすんだよ？」

「うーん。まだ決めてないけど世界中を見て私がどんな風に感じるかによってこれからが変わると思う」

「なるほどなぁ。考えることが違うぜ羽川は」

「阿良々木君はどうするのよ？」

「何が？」

「何がじゃなくて大学行ってからよ。戦場ヶ原さんと一緒の大学に行くんでしょ？」

「あぁ。ただ僕の場合は大学に入れるかが問題なんだよ」

「大丈夫だよ。ずっと勉強してるんだから。……留年しなきゃね」

「羽川さん！？」

「冗談だよ」

「冗談でも羽川に言われると不安になってくるよ」

「それより将来はどうするの？両親と同じ警察？」

「なんで僕の両親が警察って知ってるんだよ！！お前が知るのは２学期になってからのはずだぞ！？」

「猫物語（白）のことだからあと少しだし良いかなと思って」

「良くないよ！！それに猫物語（白）を話すと偽物語の方が先だからすでに戦場ヶ原がツンデレからツンドロになってるよ！！」

「まぁ猫物語（白）って私が一人称なんだし別に良いんじゃない？」

「そういう問題じゃねぇよ！！今日はどうしたんだよ羽川」

「たまには良いじゃない私もキャラが崩れたって。つばさキャットの最終回のＤＶＤの副音声だって最後はキャラ崩壊してたし」

「いや、まぁそうだけど」

「それにこれ二次創作だし」

「その言葉だけは羽川から聞きたくなかったよ。ちょっと今から家に帰ってＤメールを送ってくる」

「過去改変をしようとしないの」

「お前もラボメンなら分かってくれ」

「いや、ラボメンじゃないし」

「こうなればバイト戦士にも手伝ってもらうしかないな」

「西尾維新さんの物語シリーズとこの小説を合わしてもバイトして

る人は一人もいないから。だいたい、その話に関係あるの中の人的に千石ちゃんだけだからね。」

羽川とは珍しい会話をしながらも、その後は真面目に勉強に取り組み、夕方には図書館を出た。

「あー岡りん。とぅっとぅるー」

「千石、もう完全にアウトだよ」

「だって撫子ラボメンの一人だし」

「ラボメンは椎名まゆりだ。確かにお前の中の人はまゆしぃの声を担当しているがここでは関係ないぞ」

「ごめんなさい。久々に登場だったから自分が誰なのか忘れてたよ」

「テンション上がるんじゃなくて!?そこは覚えておこうぜ!?」

「テンションが上がって自分が誰かわからなくなったよ」

「もうめちゃくちゃだよ」

「そうだ、暦お兄ちゃんどこか行ってたの？」

「あぁ、羽川と勉強しに図書館にな」

「そうなんだ暦お兄ちゃんは偉いね」

「一応受験生だしな」

「千石は何してたんだよ？」

「撫子は今から図書館に行くの」

「入れ違いだな。夏休みの宿題でもするのか？」

「ううん。夏休みの宿題を残り1日で終わらす方法が書いてある本があるか探しに行くの」

「あるわけないだろ！！てか最終日までしない気満々じゃねぇか」

「うん！！やる気満々だよ」

「しない方向にやる気を出すなよ。そのやる気を宿題に行かせよ」

「こんな時にドラえもんが居てくれたらアンキパンを出してもらうのに」

「アンキパンを食べても暗記するだけで宿題は終わらないよ！！」

「こ、暦お兄ちゃんは欲しい時に欲しいツッコミを入れてくれるね。さすがだよ」

千石はお腹を抱え、笑うのを耐えながら僕を褒めた。

「僕も時間があったら勉強教えてやるから少しは自分で頑張ろうぜ」

「本当に！？」

「あぁ」

「じゃあ、撫子頑張る！とりあえず自由研究は終わらせるね」

「自由研究は何にするんだ？」

「１つの畳に目はいくつあるか」

「自由過ぎるだろ！！」

「じゃあ他のやつ考えておくよ」

てか畳の目を数えるってだいぶハードだぞ。

それから千石とは別れ、帰宅した。

帰宅後、部屋に入るやいなや忍が出てきた。

「お前様、最近携帯のニュースは見たかの？」

「まぁ携帯のニュースぐらいは見てるよ」

「じゃあ、知っておるな」

「何をだよ？」

「ミスドで８月１０日から１０月にかけて日本各地の銘菓や名物の特徴を人気商品で表現したミスド味めぐりじゃよ！！」

「知らねぇよ！！」

「なんじゃと！？今年の１０大ニュースに入るぞ？」

「どんだけだよ！？」

「ちなみに今回登場したのは、大阪のたこ焼きをイメージしたポン・デ・たこ焼き風と京都の八つ橋をイメージしたポン・デ・ニッキあずきと沖縄のなんじゃったっけ？丸い揚げたやつなんじゃが……アレキサンダーじゃったかの？」

「サーターアンダギーだろうが！！」

「そうじゃ、そうじゃ。それのベイクドファッション紅いもじゃ」

「それで何が言いたいんだよ？」

「わかっておるくせに」

「分かわってるけど分かりたくないんだよ！！」

「むぅ…仕方ない。お前様の悪行を妹君達に教えるしかないのか」

「忍、８月１０日はミスドに行くぞ」

「うむ。よくわかっておるの」

金髪幼女に脅しをかけられた男子高校生がそこにはいた。

「それよりお前様よ」

「今度はなんだよ」

「儂のキャストは結局誰になるんかの？」

「そんなこと僕が知るか！！」

「いやー、決めてもらわんと儂も中の人ネタができないんじゃよ」

「結局出番目当てかよ」

「この際佰物語の引き継ぎで平野綾ということでいいかの？」

「勝手に決めんじゃねぇ！！平野さんの都合も考えろ」

「儂の都合も考えてほしいものじゃ」

「まぁツッコミを入れたものの正直この小説のみならいいんじゃねぇの？」

「二次創作じゃしな！！」

「それは言わなくていい」

「じゃあ決まりじゃな。あともう一つ」

「なんだよ？」

「傷物語の主題歌は誰が歌うんじゃ？」

「それも知らねぇよ」

「儂の中の最有力候補がｓｕｐｅｒｃｅｌｌなんじゃが最近ボーカルを募集しおったからｎａｇｉさんがどうなるかがわからないのじゃ」

「それは発表があるまで待ｔ」

「あー！！しまった。儂したことがとんでもない失敗をしもうたわ！！」

「なんだよ急に」

「ボーカル募集に儂も応募すれば儂が歌えたんじゃないのか？」

「それは受かったらの話だろ」

「悔やまれるのぉ」

「その前に誰も見た目金髪幼女は取らねぇよ」

「大丈夫じゃ。中は２０代の声優でありＣＤも出しておる平野綾じゃからのぉ」

「それならｓｕｐｅｒｃｅｌｌに応募しなくても平野さん単体でいけるじゃねぇか」

「うむ。それもそうじゃな」

「だいたい、可能性なら僕にもあるぞ」

「お前様には無い！！」

「即否定！？てかなんでだよ？」

「友達が少ない変態ロリコン野郎だからじゃ」

「全然理由になってないよ！！」

「お前様は１０月からのＷＯＲＫＩＮＧ！！で頑張ってれば良いのじゃ」

「もうぐちゃぐちゃ過ぎてわからないよ」

結局、忍との会話で決まったことは８月１０日にミスドに行かされるということだけであった。

まぁそうだろ。

その後、夜になって僕は勉強をしてからベッドに横になった。

さて、明日は戦場ヶ原の日か。

こよみデイリー　１８（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ガッツ石松とバックしますって似てねぇ？」

月火「似てるー」

火憐「オレンジとオレん家って似てねぇ？」

月火「似てる！」

火憐「三倉茉奈と三倉佳奈って似てねぇ？」

月火「似てる！！」

火憐「では、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「私達って似てねぇ？」

月火「似てるー！！」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー１９」

火憐「さすがに今回はふざけ過ぎたな」

月火「うん。手抜き度ＭＡＸだね」

こよみデイリー　１９（前書き）

今回はひたぎ×こよみのみとなっております。
少し長いですがお付き合い下さい。

こよみデイリー　19

今日は、戦場ヶ原に勉強を教えてもらう日のため、僕は戦場ヶ原の家にいるのである。

「もう終わりね」

「え？何？僕を見捨てないでくれよ。戦場ヶ原」

「え？あぁ、夏休みの宿題が終わりってことよ」

「早！！」

「どこかの阿良々木君とは違うのよ」

「がっつり名前を出しちゃってるよ」

「あら、ごめんなさい。私、素直な人間だからつい」

「あぁ特に悪い方面で素直過ぎるな」

「私がいつ悪いことしたって言うの？」

「逆に良いことをいつしたんだよ？」

「失礼ね。さすがの良い子の私でも怒るわよ。仏の顔も三度までって言うでしょ？」

「お前にいつ仏の顔があったんだよ？」

「全米が驚愕！あのひたぎクラブの続編、ひたぎブッダがついに公開」

「勝手に劇場化すんじゃねぇ！！」

「おまけで短編映画、傷物語も上映決定！」

「あるとしたら逆だよ！！なんで本命がおまけなんだよ！！こんなことしてみろ、全国の傷物語を楽しみにしている物語シリーズファンに攻撃されるぞ」

「なら私は口撃をして攻撃をするまでよ」

「怖いこと言うな！！…ってホッチキスを仕舞え」

「え？さすがに3次元の人に攻撃はできないから、このホッチキスを阿良々木君にしようと思ってるのだけれどダムなのかしら？」

「良いわけないだろ！！」

「仕方ないわね。話は戻るけど仏の顔も三度までより闇魔の顔は何度でもね」

「怖いよ！！僕、永遠に罰を受けるの？」

「罰（バツ）と言うより罰（バチ）ね」

「なんで僕がバチを受けなきゃならねぇんだよ」

「小学生にセクハラをしたり妹達のファーストキスを奪ったり」

「な、な、な、なんｄ」

「冗談よ。阿良々木君がそんなことするわけないものね？」

微笑みながらこちらを見ながら言った。

こいつ本当に知らないよな？

「もし本当にやっていたなら」

その時、戦場ヶ原の携帯が鳴った。

「どこまでも続くこの空のような終わりのない永遠を誓って♪」

「出なくていいのか？」

「えぇメールの着信音だから。それよりこのｓｔａｐｌｅ　ｓｔａｂｌｅって歌本当に良いわよね。歌ってる人はとても上手いし完璧じゃない」

「せっかく触れなかったのに自分から言うなや！！」

「この歌でもしかしてゴールドディスク大賞取った？」

「取る以前にＣＤ化してねぇよ」

「なんですって！？君の知らない物語はＣＤ化して大ヒットしたのに私のｓｔａｐｌｅ　ｓｔａｂｌｅはＣＤ化になってないですって

！？」

「ＯＰは全部なってないよ」

「今すぐＳｏｎｙ　Ｍｕｓｉｃ　Ｒｅｃｏｒｄｓさんに行くわよ、阿良々木君」

「行かねぇよ！！まぁ行ったところで何もできないと思うけど。てか他の人はどうすんだよ」

「そのことに関しては問題ないわよ。私の中の人はとても優秀だから神原の声だって、羽川さんの声だって、八九寺Ｐの声だって、千石ちゃんの声だってできるわ」

「いや、そこは本人達がいいよ」

「私だと不満があるの？」

「いや、その…あれだよ…戦場ヶ原も他の人にされたら疑問に思うだろ？」

「当たり前よ。そんなことされたら阿良々木君を八つ裂きにするわよ」

「なんで僕が被害を受けてるんだよ！！」

「阿良々木君だからよ」

「理由になっちゃいねぇよ！！」

「そう？これ以上ないぐらい完璧な理由だと思うのだけれど」

「これ以上ないぐらい適当な理由だよ」

「阿良々木君の人生と一緒でピッタリじゃない」

「僕は適当に人生を過ごしてないよ」

「あら？阿良々木君の人生が適当ではないんだったらこの世からいい加減って意味の方の適当って言葉を無くさなきゃいけないわね」

「そこまで！？」

「当たり前じゃない。ゴミのような阿良々木君だけのためにあるような言葉だもの」

「またゴミって言ったなお前は！？」

「ほら、天空の城のラピュタであったじゃない。ムスカが阿良々木がゴミのようだって台詞が」

「人がゴミのようだだよ！！なんでムスカがピンポイントで僕を見ているんだよ！！」

「ごめんなさい」

「あ、いや…いいよ」

「じゃなくてゴミに謝ったのよ。阿良々木君みたいなのと同じ扱いをしてしまったから」

「お前と次会う時は法廷だな！！」

「私に裁判で勝てるとでも」

「証拠は山程あるよ！！」

「私は戦場ヶ原ひたぎよ」

「何自分が判決を下すみたいな言い方してるんだよ！！」

「裁判員制度で選ばれる市民を私の権力で、神原、羽川さん、八九寺ちゃん、忍ちゃん、火憐ちゃん、月火ちゃんを選ぶようにするから大丈夫よ」

「お前にそんな権力はない！！てか千石は入ってないんだな」

「当たり前じゃない。あの子は貴方の味方よ？今は」

「今はってどういうことだよ」

「さぁそれは囮物語を読んでからのお楽しみね」

「ここでメタネタを入れてくるか」

「1つ疑問に思うのだけれど」

「なんだよ？」

「この物語って私と阿良々木君の絡みがやたら多くない？」

「あーそのことだけどお前と僕のコンビだとネタが他の人よりも浮かぶらしいぜ」

「あらそう。でも私は嫌じゃないけど。むしろ好きよ、阿良々木君をいじめる機会が増えて」

「主人公なのに僕の存在って…」

とりあえず、作者には言いたいことが山程あるから後書きで覚えてろよ。

「そうだ戦場ヶ原」

「どうしたの？」

「前言ってたキャンプ場の件だけど」

「あぁ、見つかったの？」

「近くが良いのか？」

「日本ならどこでも良いわよ」

「鹿児島なんだけど」

「……」

「戦場ヶ原？」

「……」

「戦場ヶ原さん？」

「……」

「戦場ヶ原様？」

「あぁ、ごめんなさい。寝てたわ」

「なんで寝るんだよ。人が話してるのに！！怒ったんじゃないかと思ったよ」

「鹿児島ね。わかった、いいでしょう」

「そんな簡単に答えていいのか？」

「私が頼んだんだから阿良々木君が言ったことに私は従うだけよ」

男よりも男らしい彼女である。

「目指すは女の娘よ」

「ただの女子じゃねぇか。てか勝手にモノローグを読むな」

「何よ、主人公Ａのくせに」

「主人公なのにクラスメートＡと同じ扱い！？てかＡって何人かいるのかよ」

「私は彼女Ａだけど」

「彼女が何人もいる主人公って印象悪すぎだろ！！」

「心配しなくても傷物語でのパンチラネタを４ページも喋ってたのと友達を作ると人間強度が下がると言ってた時点で阿良々木君の印象はどん底よ」

「あれは言わないでくれ。若気の至りだ」

「若ハゲの至り？」

「ハゲてねぇよ！！」

「阿良々木君って将来ハゲるとしたらアホ毛以外のとこね」

「逆に嫌だよ！！」

「見た目は完全におやじっちね」

「例えがなんでたまごっちなんだよ」

「久々に思い出したのよ。てか最近、阿良々木君のツッコミレベルが下がってると思うのだけど？」

「知らねぇよ」

「生徒会役員共の津田君のツッコミを見て勉強しなさい」

「彼にはツッコミを入れ続ける気持ちが分かると思うよ」

「この際、生徒会役員共のメンバーを全員呼びましょうか」

「それだけは本当に勘弁して下さい」

「冗談よ。私にそんな権限はないわよ」

あの人達を呼ばれたらそれこそめちゃくちゃになってしまう。

「だよな」

「私が生徒会役員共みたいな人になることはできるけど」

「是非とも遠慮願いたい」

「そんなに拒むことないじゃない。阿良々木君自体下ネタみたいなものなんだし」

「お前と出会って今までで一番理解出来ないよそれ！！」

「やっぱり頭が悪いのね」

「お前の口が悪いんだよ！！」

「ＡＫＢの板野友美さんみたいにアヒル口をすれば許してもらえるかしら？」

「その口じゃねぇよ！！言葉の方だよ」

「これは仕方ないじゃない。方言みたいなものよ」

「どこの地域にそんな暴言を使うとこがあるんだよ！！」

「日本」

「黙れ！！」

馬鹿にしすぎだろ。
なんだよ日本って。
そんな答え最近の小学生でも言わないよ。

その時、戦場ヶ原の威力抜群の右フックを食らった。

「痛えー！！何しやがるんだ」

「え！？だって殴れって言ったじゃない」

「黙れって言ったんだよ！！」

「ごめんなさい。阿良々木君の頭が悪いのが移ったみたいで私の耳が悪くなったわ。本当にごめんなさい」

「移らねぇよ！！だいたい謝りながら悪口を言うってどんだけ器用なんだよ！！」

「そんな褒めなくても」

「褒めてねぇよ！！怒ってるんだよ！！」

「阿良々木君ダンスできるの？」

「踊ってねぇよ!!お前わざと間違ってるだろ」

「えぇ、わざとよ」

「堂々とストレートに言いやがった」

「素直な子だからね」

「結局そこに戻るんだな」

その後、勉強に戻った僕達であったが

「あら、もうこんな時間」

時計を見ると針は午後6時を指していた。

「集中すると時間経つの早いな」

「夕飯食べて行く?」

「え?作ってくれるの?」

「えぇ、仕方がないから手料理を食べさせてあげるわよ」

「それは素直に嬉しいな」

「ここからは日常物語ではなくて食物語ーひたぎシェフーよ」

「勝手に物語を変えるな!!料理マンガならぬ料理小説になっちゃうよ」

「美味しんぼや味一もんめやクッキングパパをも抜く大作になるわよ」

「ならねぇよ。この小説の作者にそんな能力はない」

「なら出さすまでよ」

そう言いながら包丁を取り出した。

「ちょっと待て、危ないよ。てか僕達と作者は住んでる次元が違うよ」

「なら阿良々木君が代理で受ければいいじゃない」

「なんで僕なんだよ!!って包丁を持ちながら近づいてくるな!!」

「だって阿良々木君は主人公Aじゃない」

「だから、Bは誰だよ!!」

「佐藤B作よ」

「何一つ上手くねぇよ!!とりあえず佐藤B作さんに謝れ」

「阿良々木君が失礼な発言をしてしまい申し訳ありませんでした。これからは私が教育者として更生させていきます」

「だからなんで僕なんだよ!!てかこのくだり2回目だよ」

「あら、覚えてたの？鳥頭じゃなかったのね」

「もう僕が悪かったから許してくれ」

「最初からそう言えばいいのよ。あと料理なのだけれど塩と砂糖を間違っちゃったってベタな展開を望むのならしてあげるけど」

「そんなこと言われてやってくれと言うやつがいたら僕が説教してやる」

「そ、なら無しでいいのね」

その後はちゃんとした戦場ヶ原の手料理を食べて帰宅した。

味の方は普通に美味しかった。

うん、本当にこれは冗談抜きで。

こよみデイリー　１９（後書き）

クロネコ「クロネコだぜ！！」

阿良々木「阿良々木だよ。って紹介の仕方も妹達と一緒！？」

クロネコ「だって一応、次回予告だし」

阿良々木「理由になっちゃいないよ」

クロネコ「で、なんなんすか？こんなとこに呼び出しておいて」

阿良々木「お前な、もう少しガハラさんをデレさせろよ。あれじゃツンデレじゃなくてツンツンじゃないか」

クロネコ「だって僕には何の影響も無いですし」

阿良々木「僕にはあるんだよ！！」

クロネコ「んじゃ、番外編で言って下さいよ」

阿良々木「またあのグダグダするの！？」

クロネコ「いや次は別の企画で」

阿良々木「どんな駄作になるやら」

クロネコ「それでは、予告編クイズ！！」

阿良々木「くいず～」

クロネコ「いつ戦場ヶ原さんはデレるのでしょうか？」

阿良々木「お前次第だよ」

クロネコ&阿良々木「次回、こよみデイリー２０」

クロネコ「番外編は化物語×生徒会役員共の予定ですよ」

阿良々木「その回は絶対に出たくない」

こよみデイリー　２０（前書き）

あぁ～日本のどこかに～私を待ってるヒキガエル～♪

では、こよみデイリー２０です。

こよみデイリー　２０

帰宅した僕は休憩しようとベッドに寝転がった。
なんだか今日は勉強以外で疲れたなぁ。
勉強以外と言うのは戦場ヶ原との掛け合い以外ないけど。
しばらく休憩し、お風呂に入ろうとした時、携帯が鳴った。
ん？神原？珍しいなぁこんな時間に。
「神原、どうしたんだ？こんな時間に」
「その声と卑猥な言葉は阿良々木先輩だな」
「お前がかけたのに分かっていなかったのかよ。てか僕の言葉のどこに卑猥な単語があったんだよ！！」
「こんな時間と言うのはほとんどの人は夜中と思うだろう。夜中と言うのはエロいことが増えるだろう。ほら卑猥ではないか」
「もうお前の頭が心配だよ。で、なんだよ？用件は」
「あぁ、そのことだ。変態なんだ！！」
「それは知ってるよ」
「間違った。あまりに変態なものだから大変と間違ってしまった。

これで2回目だな。私は意外と天然キャラなのか？」

「切るぞ？」

「あー悪かった。ちゃんと話すから！！実はな」

「あぁ」

「ガリガリ君で当たりが出たのだ！！」

切れば良かったとこの時、後悔をした。

「……」

「阿良々木先輩？」

「……」

「何か言ってくれらぎ子ちゃん」

「それは言うなぁ！！」

「なんで無視をするんだ」

「もしかしてお前の用件ってそれか？」

「あぁ！！あまりにも嬉しくてな！！これは交換してもう1本貰うべきか記念に置いとくべきか阿良々木先輩の意見を聞こうと思っていたんだ」

「知らねぇよ!!好きにすりゃいいだろ!!」

「わかった!!では脱いでから交換しに行けばいいんだな?」

「どこにその選択肢があったんだよ!!だいたい繋がりが全くねぇよ」

「完全にあるではないか。ガリガリ君はダウンタウンの浜ちゃんに若干似てる。浜ちゃんと言えば芸人。芸人と言えば最近の若手芸人。若手芸人と言えば脱ぎたがる。脱ぎたがると言えば神原駿河ではないか」

「無理矢理過ぎるよ!!数学で言うと式は適当で間違っているのに答えだけ合ってるやつだよ!!」

「私の前では方程式や当たり前は無力化されるのさ。燃えている家を普通は水で消すとこを、私の場合は、ガソリンで消すのだ」

「大爆発で大惨事だよ!!」

近辺の家はぶっ飛ぶぞ。

「ではさつまいもを投げるとするか」

「美味しい焼き芋の出来上がりだな」

「芋と言えば阿良々木先輩、花物語なんだが」

「芋はどこに行った!?」

「芋も花も一緒ではないか」

「一緒じゃないよ！！」

どこをどうしたら一緒になるんだよ。

「まぁ、花物語に限らず、囮物語と傾物語の３つって化物語シリーズの私と千石ちゃんと八九寺ちゃんの各話を完結するための話なのか？」

「千石は最終巻になるみたいだけど考え方によっちゃそう思えないこともないな」

「だから３つともに化の字が入っているのか？」

「たまたまじゃねぇの？羽川の猫物語は化って入ってないし、これから出る鬼物語と恋物語も入ってないし」

「結論から言うと私は脱げｒｙ」

「じゃあ、またな」

これ以上話していると本当にダメになってしまいそうだったので無理矢理切った。

その直後、神原からメールが来た。

「一方的に切ってしまう新しいプレイだな。うん。悪くないぞ。むしろゾクゾクする」

こいつを喜ばすだけだったか。
今度は違う方法を考えとかないとな。
その時、部屋に火憐ちゃんが入って来た。
「兄ちゃん、電話誰だったんだ？」
「人の話を聞くな」
「悪い悪い。で、誰？彼女さん？」
「違うよ。神原だよ……ってお前知らないな」
「何！？神原さん！？」
え？何？めちゃくちゃ食いついてきたんですけど。
「なんで兄ちゃんなんかが神原さんと知り合いなんだよ！！」
「別に良いだろうが」
「兄ちゃん！！」
「なんだよ？」
「一生のお願い！！神原さんに会わして」
「駄目だ」
「何でだよ？」

だってこいつらを会わしたら神原の理性が持つかわかんねぇもん。

「駄目なものは駄目だ」

「頼むよー。偽物語の話なのに先にしちゃってるんだぞ」

「そんなの知らねぇよ！！」

「本当は月火ちゃんの服を借りてスカートで兄ちゃんに抱きつくはずだったんだけど先にしてしまったからジャージになってしまったけど」

「どっちでも良いよ」

「わかった！！私の処女やるから」

「いらねぇよ！！てか何言ってんだよこいつは！！」

「じゃあ、偽物語のアニメ化を延期でいい」

「延期も何も予定すら立ってねぇよ」

「でも去年の短冊に私達書いたぜ。偽物語アニメ化って」

「書いて思い通りなら今年は大変なことになるよ！！シャフトの皆さん過労死だよ」

「じゃあ、短冊意味ないじゃん」

「ああいうのは書いてそれに向けて頑張るもんなんだよ」

「えー。あ、それより兄ちゃん、セクハラ男子高校生なんだけどもう少しでわかりそうなんだぜ」

「Ｒｅａｌｌｙ?」

「なんで英語なんだよ?まぁ、本当だよ」

「おい、でっかいの」

「なんだよ?」

「今度、神原を紹介してやるからその捜査は打ち切りにしろ」

「え!?マジで!?神原さんに会わしてくれんの!?」

「あぁ、もちろんだ。だからその捜査は打ち切り」

「わかった!!捜査は今をもって打ち切りにする!!迷宮入り決定だ」

「んじゃ、神原に空いてる日を聞いとくからまた教えるよ」

「頼んだぜ兄ちゃん!!」

「あぁ」

「さすが兄ちゃんだぜ!!本当頼りになるよ。私の処女いるか?」

「いらねぇよ!!とりあえず、部屋から出ていけ」

「イエッサー!!」

とりあえず、これで僕の命は助かった。
妹達を神原に会わすのは気が引けるけど今回ばかりは仕方がない。
そして、戦場ヶ原と鹿児島へ旅行に行く前日、戦場ヶ原に呼び出された僕は戦場ヶ原の家にいた。

「さて、阿良々木君」

「なんだよ?」

「なんでいるの?」

「お前が呼び出したんだろ!!」

「私、召還技とか使えないわよ」

「その呼び出すじゃねぇよ!!電話で呼び出しただろうが」

「知ってるわよ。阿良々木君みたいに馬鹿じゃないんだから」

「うるせぇ!!僕に馬鹿馬鹿言うけどこれでも小学校の頃はお利口さんって言われてたんだぜ」

「ロリコンさん?」

「お利口さんだよ!!誰がロリコンさんだよ」

「阿良々木君、今高校三年生だからロリコンの高校三年生で略してロリ高三ね」

「上手いこと言ってんじゃねぇよ！！」

「アダ名は任せなさい。なんて言ったって私は直江津の有吉弘行よ」

「じゃあ、羽川はなんだよ」

「猫耳委員長」

「う……思ったよりも良い。じゃあ、神原は？」

「露出狂」

「そのまんまじゃねぇか」

「なら自分はどうなんだよ。自分にアダ名をつけるなんてとてもじゃないけどできないけどな」

「ひたぎ様よ」

「躊躇せずに言いやがった！！しかも、様って」

「当たり前じゃない。神は私の下僕よ」

「失礼なことを言うんじゃねぇよ！！罰が当たるぞ。てか、この中じゃ僕の酷さが際立ってるよ」

「あぁ、頭の悪さが際立ってるわね」

「アダ名の話だよ！！」

「明日の話なのだけれど」

「無理矢理話を変えるな！！」

「阿良々木君と無駄話してる時間は私にはないの。この後、私はこの畳の目を数えないといけないのよ」

「めちゃめちゃ時間あるじゃねぇか！！」

「冗談よ？」

「何故疑問系！？」

「人生には正解の答えはないのよ。それと一緒よ」

「これに関しては正解の答えが出せるよ」

「じゃあ、正解は本気ね」

「そこは冗談にしとけよ！！まぁ、いいや。それより明日の事なら別に電話で良いじゃないか」

「阿良々木君に飽いたかったのよ」

「僕に飽きたのか！？」

「ごめんなさい。漢字が間違ってたわ」器用な間違いをするなぁ。
僕は初めてだよ。
喋って漢字を間違えるやつなんて。

てか、間違ったかすら普通わからねぇよ。

「会いたかったのよ」

「僕の考えが間違っていた。許してくれ」

その後、明日の時間やその他のことを話して帰宅した。

こよみデイリー　２０（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「前は乗っ取られて私達の出番がなかったな」

月火「そうだったねぇ。しかも、下手だし」

火憐「もうやらない方がマシだったよな？」

月火「本気でやらない方がマシだったよ」

火憐「後で兄ちゃんには説教をしないといけないな」

月火「うん。とことん反省をしてもらおう」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「次回はどうすんの？今回で２０回目だから例のやつなの？」

月火「まぁ、一応あれでいいんじゃない？」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー番外編２」

火憐「やらない方が良いと思うけどな」

月火「もしかしたら、変更で本編をするかもね」

こよみデイリー　番外編２（前書き）

日にちがだいぶ空きましたね。

さぁ、黒歴史の開幕です？

こよみデイリー　番外編2

戦場ヶ原「今回、こよみデイリー番外編2を担当するのは、神は私の弟子。戦場ヶ原ひたぎと」

神原「特技は、ファイヤーボール。神原駿河だ」

戦場ヶ原「今回は、あなたと二人での進行なのね」

神原「あぁ。ヴァルハラコンビ復活だな」

戦場ヶ原「そうね」

神原「ところで戦場ヶ原先輩、生徒会役員共のメンバーを出す案はどうなったのだ？」

戦場ヶ原「あぁ、その事ね。実は、アドバイスをもらったり、考えた結果見送ることになったみたいよ」

神原「そうだったのか」

戦場ヶ原「えぇ。だから、今回は今までのこよみデイリーを振り返って適当に話しをするみたい」

神原「化物語のＤＶＤｏｒＢｌｕ－ｒａｙの副音声みたいなやつだな」

戦場ヶ原「簡単に言うとそういうことね」

神原「それと、戦場ヶ原先輩、阿良々木先輩は何故出ないのだ？」

戦場ヶ原「阿良々木君は絶対に嫌だと拒否したみたいよ」

神原「確かに以前から出たくないと言っていたな」

戦場ヶ原「さ、前置きをこれぐらいで本題に入りましょう」

神原「そうだな」

戦場ヶ原「さて、今回はめちゃくちゃにならないようにテーマを決めましょう」

神原「なんだか今日は戦場ヶ原先輩が頼もしいな」

戦場ヶ原「当たり前じゃない。私はいつでも頼もしいのよ」

神原「いつもはめちゃくちゃなこと言ってるのに」

戦場ヶ原「で、テーマはどうする？」

神原「うーん。今、作者の世界では夏だし海とか夏をテーマにしたやつでいいのではないか？ちょうどこちらも海とかの話も出てるし」

戦場ヶ原「そうね。そうしましょ」

神原「夏と言えばやはり脱ぎたくなるな！！」

戦場ヶ原「神原、いきなり脱線してるわよ」

神原「脱線ってなんだかエロいな」

戦場ヶ原「どこにエロ要素が入ってるのよ」

神原「だって、脱線の脱って脱ぐって漢字ではないか」

戦場ヶ原「神原」

神原「線を脱ぐとはエロいではないか。線ということは似ているものは紐だな。うむ。戦場ヶ原先輩、私は今からヒモパンを買ってくる」

戦場ヶ原「神原」

神原「上下セットになってるやつとかあるのかな」

戦場ヶ原「か・ん・ば・る・お・こ・る・わ・よ」

神原「す、す、すまなかった」

戦場ヶ原「で、海なんだけど私と阿良々木君が海に行ってた時、貴方は何をしていたの？」

神原「私はもちろん1日中ＢＬ本を読んでいた」

戦場ヶ原「貴方らしいって言っちゃ貴方らしいわね」

神原「戦場ヶ原先輩は海で何をしたのだ？」

戦場ヶ原「永遠に遠泳よ」

神原「恋人同士のやることじゃないだろ」

戦場ヶ原「冗談よ。さすがにそんなことしてもつまらないもの」

神原「まぁ、恋人同士で行ってすることじゃないしな」

戦場ヶ原「だって阿良々木君って泳げるから溺れたりしないから遠泳なんかしても意味がないじゃない」

神原「二人は付き合っているというより吐き合ってる気がするのだが」

戦場ヶ原「失礼ね。二人で暴言を吐いていないわよ。阿良々木君に言わすわけないじゃない。私が一方的に言ってるのよ」

神原「相変わらずの関係だな」

戦場ヶ原「それから、前から思っていたのだけれど海で食べる焼きそばはなんであんなに美味しいのかしら」

神原「以前、ファイヤーシスターズも後書きで言っていたな。私もそれは思う。焼きそばに限らず全てが美味しく感じる」

戦場ヶ原「私はこれを海の家焼きそば現象と名付けたわ」

神原「完全に桜庭コハルさんのみなみけに出てきたカップ焼きそば現象のパクリだな」

戦場ヶ原「これはパクリではないわ。オマージュよ」

神原「逃げ道を作ったな。ところで戦場ヶ原先輩、作中に出てきた都市伝説なんだが、私だけ微妙ではないか？」

戦場ヶ原「確かに電車より早く走る少女って微妙よね。なんかリアルというか」

神原「そうなんだ、戦場ヶ原先輩。私に関してはただのスポーツ少女ってどちらかと言うと普通の扱いになっているのだ」

戦場ヶ原「これを聞いた限りでは、ずば抜けてスポーツが出来るスポーツ少女って感じね」

神原「あぁ。だから露出癖があり、どこでも全裸になる少女の方がまだ良かった」

戦場ヶ原「いや、貴方は「脱げばいいのだな」って言いながら結局脱いでないじゃない。だから普通の扱いになるのよ」

神原「それは阿良々木先輩が脱がしてくれないのだ！！」

戦場ヶ原「その言い方だと、阿良々木君の手で神原の服を脱がせてあげないみたいな言い方になるから辞めて頂戴」

神原「では、今後は強制的に脱ぐとしよう」

戦場ヶ原「神原、脱ぐのは勝手だけど下手したら条例違反だと言われて某知事にこの作品を消されるわよ」

神原「それは困る。私の露出する場面が無くなってしまう」

戦場ヶ原「あくまでも脱ぐのは辞めないのね」

神原「ところで、戦場ヶ原先輩。夏と言えば海もあるのだが他に何かあるか？」

戦場ヶ原「そうね、私は花火も良いと思うわよ」

神原「うむ。花火も夏の定番だな」

戦場ヶ原「線香花火なんかとても良いじゃない」

神原「あぁ。確かに線香花火って良いな」

戦場ヶ原「でも、線香花火って儚いわよね」

神原「そうだな。だが、そこも良い」

戦場ヶ原「まるで阿良々木君みたい」

神原「本人がいなくても言うんだな。いや、わかっていたけど」

戦場ヶ原「それより神原、そろそろ今回は終わりみたいよ」

神原「何か早くないか？」

戦場ヶ原「作者がこれ以上はネタが思いつかないみたい」

神原「なんか本当駄目だな」

戦場ヶ原「えぇ、クズね。阿良々木君と同類よ」

神原「私はそこまで言ってないが。そして、阿良々木先輩も何故か被害を受けてる」

戦場ヶ原「まぁ、最後ぐらいちゃんとして終わりましょう」

神原「あぁ、そうだな」

戦場ヶ原「じゃあ、一言ずつ言って終わりましょう。では神原から」

神原「何かあったらエロいな。神原駿河と」

戦場ヶ原「何かあったら八つ裂きよ。戦場ヶ原ひたぎがお送りしました」

こよみデイリー　番外編２（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「懲りもせずに２回目をやってしまったな」

月火「馬鹿だねぇ」

火憐「前よりかは少しはマシだったと思うけど」

月火「これで前より酷かったら本当に打ち切りだよ」

火憐「まぁ良くはなかったけど」

月火「そうだね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「パンはパンでも食べられないパンは？」

月火「予告じゃなくて、ただのなぞなぞだね」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー２１」

火憐「答えは腐ったパンだぜ」

月火「リアルな方！？」

こよみデイリー　２１（前書き）

さて今回はどこまで話が進むのでしょうか（´▽`）

こよみデイリー　21

当日、僕は少し早めに駅に着いていた。
ここは田舎町ではあるが市街地へ仕事に行く人と駅で何人もすれ違っている。
すると戦場ヶ原がやって来た。
「何で私より早く来てるのよ」
「朝一で会って一言目がそれかよ!!遅れて怒られるならまだしも、早く来て怒られるって前代未聞だよ!!」
「もしかして、早く来て私に罪悪感を感じさせようとしてたの？陰険ね阿良々木君」
「そんなことするか!!」
「朝からうるさいわね。鶏と一緒ね」
「鶏と一緒にするなや!!」
「鶏…鳥…鳥頭…すぐ忘れる…馬鹿…あぁ仕方がないのよね」
「そんな哀れな目で見るな!!」
「人偏に哀って書いてなんて読むんだったかしら」

たぶん、僕（あららぎ）だな。

このままここにいるのもあれなんで、ホームに移動した。

「阿良々木君って怪我しても治るのよね？」

「あぁ、大抵のことは」

「じゃあ、電車が来たら飛び込んでも治るの？」

「バラバラになるよ！！ただの人身事故だよ！！」

「一回やってｒｙ」

「やんねぇよ！！」

確実に死ぬわ！！

でも、忍に血を飲んでもらったらどうなるんだろ。

たぶん、跳ねられる前に電車を止められるな。

「もし、やって生きてたら、良かったわねって言ってあげるわ。死んでしまったらそれが阿良々木君の寿命ってことよ。どう？」

「どうじゃねぇよ！！ハイリスクノーリターンじゃねぇか！！」

「大丈夫よ。お葬式は出てあげるから」

「そういうこと言ってんじゃねぇよ」

「そう。じゃあ、次の急行が来た時にやりましょう」
「僕の話を聞いてましたか？ひたぎさん？」
「えぇ、聞いてたわよ。そのまま、逆の耳から出て行ったけど」
「聞いてないじゃねぇか！！」
「昔流行ったじゃない。右から左へ受け流す歌」
「ずいぶん懐かしいな」
「最後は自分が時代に受け流されたみたいだけど」
「思ってるほどそんなに上手くないよ」
その後、無事に電車に乗ることが出来た。
この無事と言うのは例の実験をせずにということである。
「それよりそろそろ私が偽物語でデレる時期ね」
「話の展開が目まぐるしいな。まぁ確かにそんな時期だな」
てか最近、何の抵抗も無くメタ話に入っていってる自分が情けない。
「じゃあ、今から阿良々木君の頭を殴って拉致して良いかしら？」
「良くねぇよ！！なんだよ、その新手の拉致の仕方は」

「もしくは、鹿児島で殴打して拉致りましょうか？」

「いろいろと話が進まなくなるよ」

「大丈夫よ。私一人でキャンプを楽しむから」

「一人でキャンプって強い心臓の持ち主だな！！」

いや、前からわかってたけど。

「だいたい、僕はどうすんだよ」

「山に棄てて帰るわ」

「やめろ！！」

「ごめんなさい。阿良々木君はゴミだから棄てるじゃなくて捨てるだったわ」

「いつになったら僕はまともな人間扱いになるんだ」

「え！？阿良々木君ってまだ人間扱いされることに希望を持っていたの？」

「純粋に驚かれた！？」

「ここで戦場ヶ原ひたぎの化物語クイーズ」

「なんだよ、いきなり」

「ゴミはゴミでも人間の形をしたゴミってだーれだ」

「完全に僕じゃないか！！」

「あら、自覚してるのね」

「自覚させられたんだよ」

「そんな阿良々木君にツンデレサービス」

「前にもあったなこんなの」

「阿良々木君って本当ゴミね。でもゴミはゴミでも捨てられない大切なゴミなんだからね」

「今回は酷い！！結局、終始言ってたのは僕がゴミってことだけじゃねぇか！！」

「ゴミ以上ゴミ未満」

「ゴミじゃねぇか！！」

「疲れたから寝てもいいかしら？」

「お前が言い出したんだろ！！」

「もっとクールにツッコミが出来ないのかしら？」

「まさかのツッコミに対してのダメ出し！？」

「生徒会役員共の津田君を見習いなさい。あの神ツッコミを」

「どんだけ津田君を推すんだよ」

「そろそろＳＹＤ４８が出てくるわね」

「なんだよＳＹＤ４８って。ＡＫＢ４８の姉妹ユニットかなんかか？」

「Ｓ（生徒会）Ｙ（役員）Ｄ（共）よ」

「あのマンガに４８人も出たの見たことないぞ」

「大丈夫よ。適当に水増しするから。最悪、私達が入ればいいでしょ、直江津メンバーが」

「それでも足りないよ」

「じゃあ、足りなかったら足りなかったで別にいいじゃない。そんなの適当で」

「今すぐ、ＳＹＤ関係者と秋元さんに謝れ！！」

「Ｅｓ　ｔｕｔ　ｍｉｒ　ｌｅｉｄ．」

「日本語で謝れ！！誰がドイツ語がわかるんだよ」

「よくわかったわね。阿良々木君のくせに」

「くせにってなんだよ」

「何で知ってるの？」

「まぁちょっとな」

「あぁ、あれね。アスカに会いに行きたくて必死に勉強したのね。でも、それは叶わないことよ。アスカは実在しないのだから。この現実を言うことで阿良々木君を傷つけてるのはわかってる。わかっているけど阿良々木君に気づいてほしかったから」

「ちょっと待て！！なんで僕がアスカに会いたくて勉強した体で勝手に話を進めてるんだよ」

「え！？違うの！？」

「本日2回目の純粋な驚き！？」

「でも、阿良々木君ってパソコンに向かってギャルゲーしながら一人で「設定の勝利ですな。うえっへっへっへ」って言ってｒｙ」

「ねぇよ！！お前のせいで僕のキャラがどの方向に進んでるかわからなくなってるよ！！」

「隠さなくていいのよ。私はどんな阿良々木君でも受け止めるから」

「隠すも何も事実無根だよ」

「徹底して否定するわね」

「徹底して攻めるんだな」

「それより、阿良々木君」

「なんだよ？」

「前回の番外編２の時に私は阿良々木君が泳げる発言したけど、化物語アニメコンプリートガイドで書いてある、なでこプールを読み返したのだけれど、阿良々木君泳げないみたいじゃない」

「あぁ、吸血鬼の後遺症でな」

「これじゃあ、私が嘘つきみたいになるじゃない」

「いや、まぁ作者が忘れてたんだからお前は関係ないよ」

「それでもよ。それでも私が言ったのに違いはないから」

「から？」

「言ったのに違いはないから、今すぐ泳げるようにしてもらえる？いえ、泳げるにしなさい」

「無茶を言うな！！」

「そうすれば私が嘘をついたというこの既成事実を隠蔽することができるわ」

「公の場で何堂々と隠蔽宣言してるんだよ！！」

「しらばっくれるよりマシよ」

「いや、まぁそうだけど」

「今起きてるこの現状を解決するには阿良々木君が泳げるようなるのが一番なのよ」

「でも、さすがにそれはキツイぞ」

「わかったわ。なら、これからは泳ぐ時は体の周りに空きペットボトルを巻き付けて泳ぎなさい」

「いろいろ言ってきたけど結局、なんの解決にもなってないような気がするが」

「これで良いのよ別に。ややこしくすることで読者は読む気を無くして、あぁ結局泳げるんだとなるのよ」

「誤魔化してるだけじゃねぇか」

「まぁ結論から言うと、言ってしまったことは仕方がないから後はノリでどうにかするのよ」

「じゃあ、このやりとりは一体なんだったんだ」

「文字稼ぎよ」

「ただの時間の無駄使いだよ!!読者に謝れ!!」

「ハイハイ、サーセン、サーセン」

「謝る気ゼロだな」

そうこうしてる内に東京駅に着き、ここからは新幹線に乗った。

贅沢だなって？

まぁ、貯めていたお年玉とかあったし、基本僕はあまりお金使わないから余っているんだよ。

使うって言ってもエロ本……おっとこれ以上は言えないな。

それより最近って便利なんだな。

いつの間にか東京から鹿児島まで新幹線が通ってるんだもん。まぁ、新大阪で乗り換えはあるけど。

こよみデイリー　２１（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「私達も鹿児島に行きたかったなぁ」

月火「行きたかったねぇ。でも、今回は仕方がないよ」

火憐「兄ちゃんの鞄の中に入ったら行けたんじゃねえか？」

月火「私は、そんなエスパー伊東みたいなことしてまで行きたくないよ」

火憐「私は兄ちゃんの為ならなんだって出来るぜ」

月火「素晴らしき兄妹愛だね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「今回のクイズはお休み！！」

月火「休み！？」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー２２」

火憐「作者がクイズのネタが本当に浮かばなかったんだって」

月火「まぁ、今回だけは許してあげよう」

こよみデイリー　２２（前書き）

いろいろ忙しくて遅くなりましたｍ（＿＿）ｍ

また、今回はグダグダになったんですが今回は見逃してやって下さい（＾Ｏ＾）

こよみデイリー　22

目的地、１９９１年から４年連続で日本一星空が綺麗な場所にもなった輝北うわば公園についた。

周りには、キャンプに来たであろう家族や友達グループがいた。

「恥ずかしいわ」

「何が？」

「いや、ほら周りは家族や友達グループじゃない」

「あぁ、確かに恋人同士っていうのは少ないけど別に気にすることないだろ？お前にしては珍しいな」

「あの子あんな生きたアホ毛を生やしてる男を連れて来てるって思われないからしら」

「思われねぇよ！！だいたい動くのはアニメだけだよ！！何回言ったらわかるんだよ」

「何回言われてもわかりたくないわよ」

「ならこのくだりは一生終わらねぇよ！！」

「ところで阿呆良木君」

「僕がアホだと皆に勘違いされるだろ。一応言っておく、僕の名前

は阿良々木だ」

「失礼、噛んだわ」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない！？」

「狩り出した」

「何を！？」

「阿良々木君を。通称、阿良々木狩りね」

「そんな通称聞いたことねぇよ！！」

「ちなみにネットで、アホ毛、馬鹿、狩りと調べると阿良々木狩りが出てくるわよ」

「適当なこと抜かすんじゃねぇよ！！」

「もう１つ、阿良々木狩りとは全国の直江津高校３年の阿良々木暦が狩られることよ。不意にやられるために犯人はわからないみたいｂｙ．Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ」

「Ｗｉｋｉｐｅｄｉａにそんな情報はないし、完全に僕しか被害者いないじゃないか！！それに犯人はいるとしたら戦場ヶ原、お前だよ！！」

「え!?何でわかったの!?」

「素でびっくりするなや」

「もしかして、阿良々木君って名探偵なの?」

「小学生でもわかるよ!!」

「名探偵こよみ……ダッサ」

「自分で言っておいてダサいはないだろ」

「見た目はアホ毛、頭脳は空っぽ」

「それ何の生き物だよ!!」

「阿良々木君に決まってるじゃない」

「僕の本体がアホ毛だと!?」

「違うの!?」

「違うよ!!」

「この毛の部分が阿良々木君でそっから下が「え!?何この物体」ってやつじゃないの?」

「そうだったら僕の評価がわからなくなってきたよ」

「そんなに知りたいなら死んでみたらわかるわよ」

「なんで死ななきゃならねぇんだよ！！」

「ほら、蓋棺事定って言うじゃない。生前の評価は当てにならない。一生が終わり棺にふたをして初めてその人の真の値打ちが決まるのよ」

「へぇ。初めて聞いたな」

「だって馬鹿だもの」

「さらっと悪口を言いやがった」

「どうする？知りたければ私が手伝ってあげるわよ。まぁ、そうしたとこで阿良々木君が知れるわけでもないし私も知ろうとしないけど」

「それが本当の無駄死にだな」

「評価なんて気にしなくていいのよ。私は阿良々木君が必要だから側にいるの」

「戦場ヶ原」

「アホ毛が阿良々木君だろうと阿良々木君がアホだろうとどっちでもいいのよ」

「おい、悪口入ってるぞ」

「ごめんなさい。ついいつもの癖で言ってしまったわ」

「もう一回言ってくれないか？」

「恥ずかしいけど仕方ないわ。アホ毛が阿良々木君だろうと阿良々木君がアホだろうとどっちでもいいのよ」

「それだよ！！その最後の部分が今までの言葉を帳消しにしてるんだよ！！」

「アホよりバカの方が良かったからしら」

「そういうこと言ってんじゃねぇよ！！」

「そうよね。アホをバカにしたらバカ毛になるから変になるものね」

「アホ毛でもバカ毛でもどっちでもいいよ！！」

「何をそんなに怒ってるのよ」

「……もう、いいです」

「そ、なら良いわ」

結局、今日も言い負かされた僕がそこにいた。

「そういやなんとなく思ったのだけれど私達の話って阿良々木君と忍野さん以外女の子しか出ないのだけれど、私達の高校の男女比率ってどうなのかしら？」

「知らねぇよ。それこそ本家である化物語を書いている西尾先生に聞けよ」

「なら、この話だけでも決めておきましょう」

「まぁ、いいけどこの日常物語に関係あるのか？」

「全く関係ないわ」

「ならなんで決めるんだよ」

「だって他の人にもし聞かれたら答えられないじゃない」

「聞くやついねぇよ。まぁ、その辺はお前が決めてくれ」

「そ、じゃあ…私達のクラスは男子１８人、女子１７人」

「おぉ、意外とまともだな」

「阿良々木１人」

「なんで僕だけ別枠！？これはイジメだろ！！」

「え…だって…阿良々木君だもの」

「理由になっちゃいねぇよ」

「仕方ないことよ。これは直江津高校の校則なのだから」

「そんな校則ねぇよ!!学校ぐるみでイジメに参加してんじゃねぇか!!」

「阿良々木君がこの学校に受かったのは、この校則を作るためよ」

「どこまで僕をイジメたいんだ!?」

「実は学校が決めたんじゃなくて国が決めたことよ」

「僕が何をしたって言うんだ!!海外へ逃げなきゃならないのかよ」

「ちなみにその他各国へは報告済みだから逃げても意味ないわよ」

「遠回しに地球外退去通告!?この国のトップは何してくれてんだよ」

「あと、この国や他の各国を動かしてるのは私よ」

「やっぱお前か!!てかどんだけ権力あるんだよ」

「まぁ冗談はおいといて、さっさとテントを張るわよ」

結局、言いたいだけ言った戦場ヶ原はせっせとテントを張り出した。

こいつはまだデレないのか？

むしろ日に日にツンの部分が侵食していってないか？

テントを張った後、近くを散策しに行き、帰って来た頃には夕方になっていた。

夕食なのだが、キャンプ場と言えばやはりカレーが定番である。

「キャンプ場と言えばやっぱりカレイよね」

「え！？」

「私としたことが間違ったわ。カレーよね」

「器用な間違いをするんだな。それよりお前カレー作れたのか？」

「当たり前よ。私にとってこれぐらい日常異端児よ」

「あぁ、お前は迷うことなき、これ以上ない異端児だよ」

それを言うなら日常茶飯事だろ。

「失礼。噛んだわ」

「違う。わざとだ」

「噛みまみ……それより二人だからカレーの量は少なめで良いわよね」

「途中で飽きるなや！！」

「私のネタなんだからどうしようと勝手でしょ」

「違う。それは八九寺のネタだ」

「八九寺？誰よそれ」

「いや、お前知ってるだろ？あいつの母親の家を一緒に探しただろうが」

「5年3組の八九寺真宵ちゃんなんて一切知らないわよ」

「めちゃめちゃ知ってるじゃないか」

「正直、私は日々ビクビクしながら生きているのよ」

「なんでだよ」

「噛みネタを最近多用しているから、いつ八九寺Pの圧力がかかって私が降板させられるか心配なのよ」

「いやその心配はないだろ」

「ほら、八九寺ちゃんが使うのってもう定番だから噛みネタと言うより神ネタなのよね」

「そんなに！？」

「えぇ。あと生活には関係ないけど阿良々木君が降板しないかワクワクしているのよ」

「ワクワクするな！！だいたい主人公が降板する小説がどこにあるんだよ」

「ここよ」

「断言しやがった！！」

「大丈夫。阿良々木君の代わりに私が最後までやってあげるから。だからもう、ゆっくり休んで頂戴」

「え!?死ぬの!?僕死ぬの!?」

「タッチであったじゃない。カッちゃんが交通事故で亡くなってタッちゃんが霊安室で「綺麗な顔してるだろ?死んでるんだぜ、それ。大した怪我もないのに、ちょっと打ちどころが悪かっただけで、もう……動かないんだぜ」と言う名ゼリフが」

「だからって関係ないだろ。どこに繋がりがあった!?」

「私は直江津の浅倉南よ」

「誰でもわかるような嘘をつくんじゃねぇ!!」

「とりあえず言うぐらい良いじゃない」

「まぁ、言うぐらい好きにしろよ」

「だからその為にゆっくり休んで頂戴と言っているのよ」

「なんでお前の言いたい言葉を言う為だけに死ななきゃならねぇんだよ」

「雰囲気でないじゃない」

「雰囲気出すためだけに人を死なすんじゃねぇ!!」

「仕方ないわね。じゃあ、そのままで良いわよ」

「当たり前だよ」

「じゃあ、言うわよ」

「お好きにどうぞ」

「綺麗な顔してるだろ？アホ毛なんだぜ、それ。大した学力も無いくせに、ちょっと下に訳のわからない物体が付いてるだけで……動くんだぜ」

「てめぇここまでの僕と読者の時間を返しやがれ！！」

「何を怒ってるのか私にはさっぱりだわ。ただ私は阿良々木君を馬鹿にしただけなのに」

「それだよ！！それが大きな原因でハチャメチャになってんだよ！！もう収集つかねぇよ」

「そんなもの私がどうにかしてあげるわよ」

「やってみろよ」

「阿良々木君、カレーが出来たわよ。ご飯にしましょう」

「……あぁ、そうだな」

無理矢理話を落としやがった。

そんなこんなで僕達は夕飯食べながら、星が見えるまで待つのであった。

こよみデイリー　２２（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「なぁ、月火ちゃん。なんか話が進むペース遅くないか？」

月火「そうだねぇ。いつになったら１日が終わるんだよってなるよね？」

火憐「他のメンバーの登場時間が大幅に減っているから一回デモを行うといけないハメになるぜ」

月火「特に八九寺ちゃんは最近めっきり減ったもんね」

火憐「そろそろ八九寺Ｐの圧力がかかるな」

月火「そうだね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「夏の大三角形の反対は？」

月火「冬の大三角形！！」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー２３」

火憐「正解は形角三大の夏でした！！」

月火「インチキクイズだ！！」

こよみデイリー　２３（前書き）

勝手に改ページされたりして直そうと思いましたが何回やっても駄目だったので諦めました。

「あれがデネブ。アルタイル。ベガ。有名な、夏の大三角ね。……って以前も言ったから言わなくても良かったのよね」

「いや、それでも話してくれて良い」

「あぁ、鳥頭の阿良々木君だから忘れてしまったのね。可哀想に」

「雰囲気ぶち壊しだよ！！」

なんだよ、せっかくこの小説にしては珍しく良い感じの話の雰囲気になりかけたのに。

「冗談よ。それより小学生の時、流れ星が流れてる間に願い事を３回唱えると叶うって言われてたわよね」

「あぁ、そういやそんなこと言われてたな」

「流れ星って宇宙に漂ってる塵とかの宇宙ゴミなんでしょ」

「まぁ、宇宙ゴミって言われると小石とかもあるから少し違うかもしれないが、まぁ当てはまらなくもないかな」

「その光ってるゴミにお願いをしてたのよ。今思えば滑稽よね」

「いや、まぁ夢があって良いじゃないか」

「地上で言うと、全力で走ってる阿良々木君にお願いをしてる様な

ものよ」

「最終的にやっぱり矛先は僕に向くんだな」

てか、遠回しにゴミって言ってやがる。

「よくわかったわね。自分が言われてるなんて」

「名前を言われてるこの状況で自分が言われてないと思ってる奴は話を聞いていないやつだけだよ！！」

「阿良々木君の分際でよくそこまで頭が回ったわね。ロリコンさんね」

「ロリコンじゃねぇ！！」

「ごめんなさい。間違ったわ、お利口さんね」

「どっちにしろ僕のこと馬鹿にしすぎだろ」

「そうね。言って良いことと、そうでもないことがあるものね」

「言ってはいけないことはないのか！？」

「でもね、阿良々木君」

「あん？」

「私は阿良々木君とこの流れ星を、この空を見れたことを本当に良かったと思っているの」

「あぁ、僕もだよ」

「だから、この場所を選んでくれてありがとう」

「こちらこそありがとう」

「夏の大三角形を見たのなら冬の大三角形も見たいわね」

「また探しておくよ」

「ええ、お願いするわ」

それからしばらく星空を眺めた僕達は眠りについた。
旅行から帰って来た僕は翌日、羽川との勉強のため図書館へ向かっていた。

途中、ツインテールの小学生が目の前に現れた。
八九寺である。
なんだか久々だな。
仕方ない、忙しいけど僕は優しいお兄さんとして有名だからここはちょっと相手をしてやるか。

そう思ったと同時にボルトもビックリの速度で駆け出した。

「はーーーつぃーーーくーーーずぃーーー」

「ぎゃあああああ!!!」

「会いたかったぞ八九寺ー!!久々だな!!もっと触らせろ。もっ

と揉ませろ。」

「きゃー！！きゃー！！」

八九寺は叫んだ直後、

「ガリッ」

「痛えー！！何しやがるこいつは！！」

痛いのも何しやがるのも僕だった。

「落ち着け、落ち着くんだ八九寺」

「あぁこれはこれはタピオカさん」

「戻るの早！！てか、僕を熱帯地方のキャッサバの根茎から製造した澱粉みたいな名前で呼ぶな。もう一度言うが、僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない！？」

「去りました」

「出番が無かったからか!?戻ってこい!!」

久々に本家のネタを聞けて和んだ僕がいた。

「お久しぶりです。阿良々木さん」

「本当、久々だな」

「えぇ、最近は阿良々木さん×戦場ヶ原さんのコンビしか出ていませんでしたしね」

「戦場ヶ原が不安がってたぞ。八九寺Pの圧力で消されるって」

「戦場ヶ原さんを消す前にこの作者を表社会から葬ります」

「この小説がそこで最終回を迎えちゃうよ」

「私が後を継ぎますから大丈夫です」

「お前が書いたら絶対、違う話にするだろ」

「よく分かっているではありませんか、阿良々木さんの分際で」

「誰だって分かるよ!!」

「まぁ、まずこよみデイリーからまよいオンリーにしますね」

「一人称が女子小学生の話かよ。ただの作文みたいになるじゃねぇか」

「大丈夫です。私は阿良々木さんより語彙が多いので」

「小学生のお前に負けるはずないだろ」

「前にも言いましたが私は生きていれば阿良々木さんより年上なんですよ。ちなみに徳川家康は私のパシリです」

「分かりきった嘘をつくんじゃねぇ！！てかお前何歳なんだよ！！それなら完全に忍と同じ様な年じゃねぇか」

「嘘ではありません冗談です」

「冗談って言葉は便利だな」

「阿良々木さん並に便利です」

「どういうことだ？」

「頭が悪いなと言われたら頭悪いんじゃない阿良々木なんだと言えば良いからです」

「あ？……あぁ、なるほど、お前は僕を馬鹿にしてるんだな？」

「馬鹿になんかしていませんよ。馬鹿なんです」

「お前は戦場ヶ原か！！」

「阿良々木さんはＴｗｉｔｔｅｒやブログで見つかりそうですね」

「それも意味わかんねぇよ」

「Ｔｗｉｔｔｅｒやブログでは個人情報を漏らしたり、悪さをしたのを武勇伝みたいに書き込んだりしているの知っていますか？」

「あぁ、最近多いな」

「そのことからバカ発見器と言われてるんですよ。わかりましたか？」

「あぁ、分かったよ。お前が何を言いたいのか分かったよ。僕が馬鹿だと言いたいんだな」

「賢いですね」

「うるせぇ！！これは出るとこ出るしかいけねぇみたいだな！！」

「出るとこ出るですって！？いやらしいです！！」

「そういう意味じゃねぇ！！法廷だよ！！」

「良いですが、今まで阿良々木さんがしてきた悪事をこちらの弁護士が見逃すと思いですか？」

「八九寺、アイス買ってやろうか？」

「この人最低です！！アイス１つで自分の悪事を揉み消そうとしてます！！」

「ハーゲンダッツでもいいぞ。なんならハーゲンダッツのバリューパック買ってやろうか？」

「高級アイスを出しても悪事は消えませんよ」

「こうなったら泣き寝入りするしかないな」

「本来ならその言葉は私が言うはずの言葉です。戦場ヶ原さんに半殺しにされても仕方ありませんよ」

「大丈夫だ。僕はゴキブリ並の生命力があるからな」

「あぁ、新聞紙で叩かれると死ぬんですね」

まさかの一本取られた状態になってしまった。

「それより、今日も勉強ですか？」

「あぁ、昨日まで旅行だったし切り替えて勉強しないといけないからな」

「そういや、鹿児島へ行ってたんでしたね」

「あれ？お前には会えなかったから言って無かった気がしたけど」

「こよみデイリーを毎回読んでますから」

「偉いな」

「八九寺Pとしての仕事です。それよりどうでしたか？」

「あぁ、良かったぞ」

「そうですか。面白くないですね」

「いや、普通に旅行行っただけだから変な期待されても」

「流れ星が1つ2つ阿良々木さんに衝突してれば面白くなってたのに」

「事件だよ!!ニュースで放送されるわ」

「良いじゃないですか有名になって」

「有名になる前に大惨事になるよ!!」「私から話題を振っといてあれなんですが、長い間話していますが時間は大丈夫なんですか?」

「あぁ、…じゃあ、そろそろ行くわ」

「わかりました。それでは、また」

「あぁ、またな」

八九寺と別れた僕は図書館へ向かった。

こよみデイリー　２３（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「そろそろ夏も終わりだな」

月火「そうだねぇ。早かったよ」

火憐「皆は宿題終わったかな？」

月火「終わったかな？」

火憐「ちなみに私は終わったぜ」

月火「私も！！」

火憐「小学校の時の日記って大変だったよな？」

月火「そうだね。最後の日までやらずに置いてたら天気がわからず困ってしまうよね」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「私は今までの天気のデータを元にその日の天気がわかる！！」

月火「何その特技！？」

火憐&月火「次回、こよみデイリー２４」

火憐「いや、まぁ嘘だけど」

月火「だろうね」

こよみデイリー　２４（前書き）

間隔がどんどん空くようになってきましたな。

まぁ、ぼちぼちやります。

こよみデイリー　２４

「やっほー、阿良々木君」

「久しぶりだな」

「そうだね。ここのところ勉強も休みがちだったからね」

「今日からまたよろしくお願いします」

「うん。よろしくー」

しかし、これだけ勉強から離れてると本気で不安になってくるな。

「それより阿良々木君、宿題は終わった？」

「あー、少しだけなら」

「宿題は早く済ました方が後から楽だよ」

「それは分かってるんだけどさぁ、なんか宿題ってなると勉強をする気が減るんだよなぁ」

「まぁ、わからなくもないけどね」

「妹の方が先に終わっちゃったから、早くやれ早くやれってあいつらうるさくて」

「阿良々木君も大変だね」

少し雑談をした後、勉強をし始めた。
そして、気付くと数時間が経過していた。

「そうだ、阿良々木君。勉強するのも良いけど、自分の力を試すのに模擬試験を受けたらどう？」

「模擬試験なぁ。そうだな、受けてみようかな」

「うん。そうした方が良いよ」

「それより羽川、話は変わるけどお前はもちろん宿題終わってるよな？」

「うん。終業式から帰った後に終わらせたよ」

「え！？１日で！？」

「うん」

「お前な、先生の立場も考えてみろ。夏休みに遊んでばかりいると駄目だから宿題を出して勉強をさせるのを目的としているのに、それを夏休みどころか夏休みの前日に終わらせてしまうなんて先生は涙目だぞ」

「なんで宿題を終わらせた人間が宿題を終わらせてない人間に怒られるのよ」

「まぁ、何が言いたいかと言うと―宿題を見せてくれ」

「自分でやりなさい」

その後、羽川から説教をされた僕は家路についた。

あれだぞ？羽川に起こられたくて、あえて宿題を見せてくれと言ったわけではないからな。

そうだ。僕は出来ない子だから駄目発言をしたわけで―うん。羽川に叱られたくて言った。

「お前様よ」

「なんだよ忍。珍しく夕方になんか出て来やがって」

「今日は3時のおやつがまだなんじゃが」

「いつもないだろ。いつできたんだよ、その習慣は」

「今じゃ」

「勝手に作るんじゃねぇ」

「まぁまぁお前様よ。ここは一旦、話し合うためにもミスドへ行こうではないか」

「僕に何のメリットがあるんだよ！！」

食う気満々じゃねぇか。

なんだかんだ言っても忍に甘い僕はミスドへ向かった。

「お前様よ、そろそろこの店ごと買ってくれんかの？」

「いきなり何をほざきやがるこの吸血鬼は」

「ケチな主様じゃ。ミスドの1軒や2軒ぐらいいいではないか」

「ミスドはミスドでも単位が違うよ!!ミスドを軒で買うやつなんていねぇよ」

「うむぅ。そこまで言うなら仕方ない。ドーナツを20個で許してやろう」

「5個な」

「10個」

「え!?いらないの?」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。5個でもいいです。いや5個がいいです」

その後、ミスドを買って家に帰り、現在自分の部屋で宿題をしているところである。

「ほふぁへはふぁほ」

「ドーナツを食べてから話せ。何を言っているか全くわからない」

「お前様よ。ミスドを買ってくれたお礼に宿題を手伝ってやろうか?」

「え!?マジで!?てかお前出来るの?」

「歴史なら大丈夫じゃよ」

「そういや５００年も生きてるもんな」

「うむ。歴史だけで良ければ手伝ってやる」

「お願いします」

「ちなみに豊臣秀吉は儂のパシリじゃよ」

「分かりきった嘘をつくんじゃねぇ」

「しかも、あやつは大根を空中で切りたくて、自分の刀で斬れなかったから刀狩りを始めて全部試していたのじゃよ」

「兵農分離政策じゃなかったの!?なんて自分勝手な理由でアホみたいな理由なんだ!!」

「秀吉は厨二病じゃからな」

「いやだー、もう言うな。有名な戦国武将が厨二病だなんて聞きたくない」

「まぁ、全部嘘じゃがな」

「分かってたよ」

その後は、ちゃんと手伝ってくれた忍であった。
その後、忍と喋っている時であった。

「兄ちゃーん……」

でっかい方の妹が扉開けて入った瞬間、こちらを見てすぐに出た。

「ヤバい、早く中に入れ忍」

「もう遅いと思うがなぁ」

忍が影に入った直後、でっかい方の妹がまた入ってきた。

「兄ちゃん!!今、超絶美人の女の子が居なかったか!?」

「い、い、いるわけないだろ」

「私見たって」

「あー…あの、あれだ!!幽霊じゃねぇのか?」

これは分かりやすい嘘だったか。

さすがに気付くだろうなぁ。

「あー幽霊か!!なら私だけ見えても納得だな」

馬鹿な妹で良かった。

「兄ちゃんの部屋に幽霊が出るとはお祓いがいるんじゃねぇか?とりあえず、月火ちゃん呼んでくる」

「ちょ、ちょっと待て」

「なんだよ」

「大丈夫だ。被害は無いし見えていないから何の問題もない」

「じゃなくて、見えた時のその女の子に危険が及ぶじゃん」

「どういう意味だ！！」

「どういう意味って兄ちゃんがその女の子を襲うじゃん」

「襲わねぇよ！！」

「絶対嘘だ！！だって兄ちゃんロリコンだもん」

「ロリコンじゃねぇよ！！」

「じゃあ、今回は見逃してやるよ」

話のわかるやつだな。
ここまで素直だと逆に心配になってくるな。

「ところで何か用があったんじゃねぇのか？」

「あぁ、そのことだ。神原さんにいつ会わせてくれるんだ？」

……完全に忘れてた。

「え、あ、その」

「まさか忘れてたわけじゃないだろうな」

「そ、そんなわけないだろ」

「だよな！！これで忘れてたら明日の朝、起こすのにダンベル使ってやるとこだったよ」

「ハ、ハハハ」

あれ？何かわからないが体から変な汗が出てきたぞ。
あぁ、あれだ。
夏だから暑いから仕方ないな。
そうだな、僕が妹が怖くて冷や汗をかくはずがないじゃないか。

「で、いつなんだ？」

「え？」

「え？じゃない。連絡してるんだろ？」

「え？あ、あぁ、あぁ！！つ、次の日曜に会わせてやる！！」

「本当か！？」

「あぁ」

ヤバい。
神原に連絡もしていないのに勝手に決めてしまった。

「いやーやっぱ兄ちゃんは最高だな。愛してるぜ兄ちゃん！！なん

ならキスしてやろうか？」

「いらねぇよ！！とりあえず、さっさと出ていきやがれ」

妹が出て言った直後、僕は神原に電話をした。

「神原駿河、特技は掃除だ」

「嘘つけ！！どちらかと言ったら散らかすのが特技じゃねぇか！！」

「その声とツッコミはらぎ子ちゃんだな」

「そのあだ名は一生封印しといてくれ」

「どうしたんだ一体？」

「あぁ、今週の日曜って空いてるか？」

「空いてるも何も私は阿良々木先輩が呼ぶのであればいつでも時間を作ると言ってるではないか」

「あぁ、助かるよ。実は、妹達と会ってくれないか？」

「む？重婚は法律で認められていないぞ？ましてや妹さん達となんて」

「お前は僕の一体なんなんだよ！！」

戦場ヶ原みたいなことを言うな。

どんだけヴァルハラコンビはそっくりなんだよ。

「それよりいきなりどうしたんだ?妹さん達と会ってくれなんて」

「いや、妹達がお前に会いたがってうるさいから」

「まぁ、私は構わないが」

「そうか、助かるよ」

「で、どこまで良いんだ?」

「何が?」

「何がって、妹さん達に手を出して良いかどうか」

「良いわけねぇだろ!!」

「そんなぁ。私に拷問を受けろとでも言うのか」

「どんだけだよ」

「大丈夫だ。口説くぐらいだから」

「やっぱりお前に妹達を会わせるのは考え直す必要があるみたいだな」

「すまない!!私が悪かったから、許してくれ!!」

「じゃあ、手を出さないと約束するな?」

「あぁ、約束する!!手は出さずに口と足だけにするから」

「悪い、妹達には都合がつかなくなったと言っとくよ」

「わぁぁ、手も足も口も出さないからぁ」

「絶対だからな」

「はーい」

「なんだよその返事は。まぁいいや、そういうことだから頼むよ」

「うむ。了解した」

こうしてなんとか明日の朝の身の危険は回避できた。

日曜……不安しかねぇ。

こよみデイリー　２４（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「久々の出番だったぜ」

月火「私は出番なかったけどね」

火憐「まぁまぁ、次回は出ると思うし」

月火「そうだね。それになんと言ったって神原さんに会えるんだからね！！」

火憐「うんうん！！テンション上がってきたー！！」

月火「上がってきたー！！」

火憐「ようし！！予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「神原さんに会いたいかーっ！！」

月火「会いたーい！！」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー２５」

火憐「ニューヨークへ行きたいかーっ！！」

月火「なぜ、ウルトラクイズ！？」

こよみデイリー　２５（前書き）

ふとお気に入り件数を見ると４０件を越えていました。

この小説なんかをお気に入りに入れていただき、また読んでいただき本当にありがとうございますｍ（＿＿）ｍ

こよみデイリー　25

待ちに待ったの日曜日。
いや、待ちに待った気持ちは妹達であって、決して僕の気持ちではない。
どちらかと言うと、来ないで欲しかった日曜日である。

僕は、不安でいつもより早く目が覚めた。

それはそうだ。
僕の妹達の身がどうなるか心配になるのも無理はない。
なんて言ったって相手があの神原駿河である。

「何、シリアス展開に持っていってんだよ、兄ちゃん」

「おい、でっかいの。ノックもせず勝手に部屋に入ってきたうえに、僕の心の中を勝手に読むな！！」

しかもなんだ、その右手に持ってるパンパンに張った水風船は。

「ノックしたのに反応無かったから寝てると思って起こしに来てやったんだよ」

「起こしに来るのに何で水風船がいるんだよ！！」

「ちっちっち。兄ちゃんも甘いな。これはただの水風船じゃないぜ」

「じゃあ、なんだよ」

「中身は水ではなくセメダインだ!!これを鼻と口に落ちるようにしようとしてたのさ」

「僕を殺す気か!!寝てるやつにいきなりそんなことをしてみろ。頭が回らないから窒息死するぞ」

「いや、人間は頭回らないし、回るとしたらマジシャンぐらいだよ」

「あー、あぁ、僕の言い方が悪かった。思考回路の方だよ」

「そう言ってくれないとわかんないよ」

普通の人はわかるんだよ、これで。

「とりあえず、起きたんだからもういいだろ?出て行けよ」

「えー別にいいじゃん。もっと私に絡もうぜ」

「お前に絡んでる暇があれば僕は今から勉強する」

「いいじゃん、いいじゃん。せっかく可愛い妹が絡もうって言ってんだからよー。もっとイチャつこうぜ」

「僕は妹とイチャつくようなシスコンじゃない!!」

「私がブラコンなんだからいいんだよー」

そう言いながら後ろから絡んできた。

いや、この場合は絡み付いてきたの方が正しいかもしれない。

普通ならば、妹が後ろから兄に抱きついてるような微笑ましい見えるかもしれない。

しかし、体勢はチョークスリーパーみたいな感じである。

「どういう理屈だ!!とりあえず、離れろ!!」

「妹がこんなに抱きついてあげてんだからもっと喜べよー」

「だから僕にそんな趣味はない!!」

そして、身長も僕より大きいかつ力も上の妹の腕が僕の首を徐々に絞めていたのもまた事実である。

「おい、でっかいの離せ!!死ぬ!!死ぬ!!」

「嬉しすぎて悶え死ぬって!?そんなに誉めなくてもいいんだぜ」

「違う!!入ってるんだよ!!本気…で…ヤ…バ……イ」

あぁ、僕死ぬんだ。

妹がイチャついてきた時のチョークスリーパーで死ぬんだ。

主人公なのに酷い扱いだったなぁ。

情けなさすぎるよ。

その時、急に体が楽になった。

あぁ、死んだのか。

せめて死ぬまでに羽川の眼球を舐めたかったなぁ。

「……ちゃ…ん」

ん?なんだ?誰だよ。
せっかく思い出に浸ってたのに。

「兄…ちゃ…ん」

あ?段々はっきり聞こえるようになってきたぞ。

「兄ちゃん!!目を覚ませー!!」

その瞬間ほど、吸血鬼の後遺症があって良かったと思う時が無かった。
このおかげで避けることができたのだ。
何故かと言うと、目を開けた瞬間、ダンベルが上から落ちてきた。
いや、降り下ろされたの方が正しい。

「お前は僕を殺す気かぁ!!何てもん降り下ろしてんだ!!てか前にも同じこと言ったはずだぞ」

「兄ちゃんが急にぐったりして動かなくなったから衝撃を与えようかなと思って」

「衝撃がデカ過ぎるわ!!せっかく帰ってきたのにそのままあの世に送還されそうだったよ!!」

「てか兄ちゃん動かなくなったけど誰にやられたんだ!?」

「てめぇだよ、馬鹿妹!!」

「何で私なのさ?」

逆に、この部屋に僕とお前しかいない時点で他に誰がいるんだよ。

「自分のしたことを覚えてねぇのか！？」

「えーと、兄ちゃんに絡んでチョークスリーパーをかけた」

「わざとだったのか！？僕が何をしたって言うんだ」

「でも兄ちゃん嬉しそうだったじゃん」

「どこに死ぬって本気で言いながら喜ぶやつがいるんだよ！！」

「私なら兄ちゃんに同じことされたら嬉しいな」

「そこまでいくと変態と言うより、逆にカッコイイよ」

その後、火憐ちゃんと月火ちゃんを連れて神原の家に行ったのだがそれまでが苦痛であった。

そりゃそうだろ。

八九寺を見かけたにも関わらず戯れることが出来ないんだぞ。

これ以上の苦痛があってたまるものか。

しかも、八九寺のやつは僕に気づいて周りをチョロチョロしやがるんだよ。

ここで相手をすると妹達にセクハラ高校生が僕だとバレてしまうので必死に耐えたが。

いや、セクハラ高校生に関しては潔白だ。
あれは誰に何と言われようとスキンシップだ。

そして、そうこうしているうちに神原の家に着いたのだが、ここからが第2関門といったところである。

「やぁ、阿良々木先輩」

「おう」

「そちらが妹さん達か」

「あぁ。こっちのでっかいのが火憐で、ちっこいのが月火だ」

「阿良々木火憐です！！よろしくお願いします！！」

「阿良々木月火です。よろしくお願いします」

「神原駿河だ。呼び方は好きな様によんでくれ」

「駿河さんって呼んでもいいですか！？」

「あぁ、構わない」

「「やったー！！」」

「さて、立ち話もなんだから私の部屋に行って良いことをしようではなｒｙ」

僕は躊躇せず神原にラリアットを喰らわした。

「何をするんだ阿良々木先輩」

「何をするんだじゃねぇよ!!お前完全に妹ｒｙ」

その瞬間、僕より身長の高い女の子から跳び膝蹴りを喰らった。
犯人はでっかい方の妹である。

「駿河さんになんてことするんだ!!」

「そうだよ!!お兄ちゃんごときが何駿河さんにしてんのさ」

え!?何!?
僕何か悪いことしましたっけ?
むしろ妹達を守ろうしたんですけど。

「さ、駿河さん。こんな馬鹿兄ちゃんはほっといて遊ぼうよ」

「あぁそうだな。では阿良々木先輩、妹さん達は預かった」

そう言いながら、家の中へと消えて行った。
僕は仕方なしに来た道をトボトボと帰っていた。

「あ!暦お兄ちゃん」

「ん?おぉ、久しぶりだな千石」

「本当久しぶりだね」

「宿題は終わったか?」

「ううん、まだ。少しはやったんだけどね」

「そうか。あと少ししか夏休みはないけど頑張れよ」

「うん。そうだ、暦お兄ちゃんは何処か行ってたの？」

「あぁ、神原の家に妹達を連れて行ってた」

「ららちゃん達を？」

「そう。あいつら神原に会わせろってうるさくてさ」

「神原さん人気者だね」

「女子中学生の間ではかなり人気らしいな」

「それに比べて撫子なんて」

「おい、いきなりどうした千石！？」

「撫子なんて囮物語で本当のラスボスになってしまったから撫子を好きな人なんて絶対いないよ」

「それ以上話を進めるな！！大丈夫だ！！お前を好きなやつなんて山ほどいるから」

「もし囮物語がアニメ化とかしたらどうしよう。余計に評価下がって最低のパラメータが振り切れちゃうよ」

「それアニメ化してほしいように聞こえるぞ。心配するな、七夕の短冊に囮物語アニメ化禁止って書いておいたから」

「まぁ、撫子のことを暦お兄ちゃんが好きでいてくれたらそれでいいや」

「ん？何か言ったか？」

「ううん、何でもないよ」

「そうか。それじゃあ、宿題頑張れよ」

「うん」

千石と別れた後、本日2回目の八九寺を見ることになる。
てか、今日はやけに人に会うなぁ。

「はーちーくｒｙ」

「あーらーらーぎーすわーん」

「グハッ」

八九寺は僕を見るなり魚雷のごとくみぞおちをめがけて飛んできた。

「イッテー。人間魚雷みたい……というより完全に人間魚雷だよ！！」

「すいません。滑りました」

「違う。わざとだ」

「滑りまみた！！」

「わざとじゃない！？」

「スベりました。阿良々木さんが」

「僕がいつスベったんだよ！！」

「今日はいつもと違うパターンでやってみました」

「急に違うのきたからビックリしたよ」

「毎回同じような展開だと飽きられるので」

「考えてるんだな。さすが八九寺P」

「まぁ、結局のところ阿良々木さんのオチ次第なんですが」

「そんなこと言われると次からプレッシャーがかかるじゃないか」

「心配しなくても大丈夫です。阿良々木さんはいつも失敗してますから」

「辛口！！」

「それよりアバラ木さん」

「僕を骨の名前みたいな言い方をするな。僕の名前は阿良々木だ」

「妹さん達と何処へ行ってたんですか？」

「スルー！？」

「ほら、さっき言ったじゃないですか。いつもと違うパターンもいるって」

「だからってスルーはねぇだろ。泣くぞ？本気で泣くぞ？」

「やめてください。こちらが恥ずかしいです。というか引きます」

「ちなみに、八九寺や忍に冷たくあしらわれても嬉しく感じるだけだ」

「ロリカッコイイ！！」

「さっきの話だけど、妹達を神原の家に送っていたんだよ。あいつに会わせろってうるさいから」

「あの方に年頃の女の子を預けて大丈夫なんですか？」

「大丈夫なわけねぇだろ！！」

「今頃、妹さん達は神原さんの餌食ですね」

「帰って来て変態の世界に引き込まれてたら僕はあいつらの兄を辞める」

「いや、そこは受け入れてあげて下さいよ」

「やだよ！！あいつが言う二言目には「脱げばいいんだな」だぞ！？」

「あ…あぁ…御愁傷様です」

「見捨てるな！！」

「まぁ、大丈夫ですよ。なんだかんだ言ってあの方は」

「そうだと良いんだが」

「それより、阿良々木さん」

「私はハーゲンダッツが食べたくなりました」

「だからなんだよ」

「買って下さい！！」

「知るか！！」

「たまにはいいじゃないですか！！」

「何でお前に買わなきゃならねぇんだよ」

「忍さんにはミスドを買うのに私には無しですか」

「忍とお前は別だよ」

「こうなればロリカッコイイの称号は外してこれからはロリ気持ち悪いにしますから」

「ただの変態じゃねぇか！！」

「いや称号を変えなくても現在進行形で変態ですからね」

「僕がいつ変態みたいなことをしたって言うんだ！！」

「逆にいつしなかったんですか！！」

「だからあれはスキンシップだよ」

「あれがスキンシップと認められるなら世の中から痴漢という犯罪が無くなります」

「良かったじゃないか無くなって。痴漢はダメだからな」

「どの口が言うんですか！！だいたい無くなるの意味が違います」

「わかった、わかった。これからは僕は紳士になる」

「紳士と言うより瀕死になってほしいです」

結局、その後僕は八九寺にハーゲンダッツを買って家に帰った。

てか幽霊ってアイス食うのか？

こよみデイリー　２５（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「やっと神原さんに会えたな！！」

月火「うん！！本当楽しかったね」

火憐「そうだな！！あんなことやこんなことまで」

暦「お前達何をされたんだ！？」

火憐＆月火「（お）兄ちゃんは出てくるな！！」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「神原さんと私達は何をしたでしょうか？」

月火「何をしたんだろうねぇ」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー２６」

火憐「ナニをしたんだろうな」

月火「その言い方はアウト！！」

こよみデイリー　２６（前書き）

ガハラさんをいつ、どうやってデレさせるかを一番悩んでいます。

こよみデイリー　26

家に帰って勉強でもしようかとした時、忍が飛び出してきた。

「ついにじゃ」

「何がだよ」

「ついに儂が話す姿を世の中の忍野忍ファンにお届けすることができるのぉ！！」

「何の話だよ」

「何って偽物語アニメ化の件じゃが」

「あぁ、偽物語アニメ化の件な……えーーー！？冗談だよな？な？エイプリルフールまでにはまだ半年以上あるぞ」

「何を言っておる。事実に決まってるではないか」

「ちょ…え…あれを映像化する気なのか」

「うむ。儂の可愛い姿を視聴者にお届けじゃ。サービスショットのお風呂の場面もあるしな」

「アウトだ！！アウト！！」

「お前様よ。儂のがアウトならばお前様と妹御との歯ブラシプレイなんぞもっとアウトじゃぞ」

「何!?あれがアウトだと!?あれは国技だろ!?」

「そんなわけあるか!!」

「嘘だ!!だって僕はオリンピックの種目で見たぞ」

「古代オリンピックですらそんな競技はないわい!!」

「嘘だ!!何かの間違いだ!!」

「まぁ、何はともあれ儂もようやく話せるようになるんじゃな。ミスドも食べ放題じゃし」

「なんで食べ放題になるんだよ」

「え!?だって原作でお前様がミスド食べ放題って」

「言ってねぇよ!!」

「なら書き換えて再出版じゃ」

「無茶を言うな!!」

「２０１２年のヒロインじゃって言うのに扱いが酷くないかの?」

「お前はどこまで大物なんだよ」

いや、まぁ怪異の中では大物だけどさ。

「当たり前じゃろ。偽物語でテレビにも出るし傷物語で映画にも出

るし、今年ブレークした武井咲ちゃんをも超える勢いの女優なんじゃぞ」

「その前にお前は女優じゃない。それにそれなら主人公の僕の方が出る場面多いじゃないか」

「お前様の中の神谷浩史さんは需要はあるが、お前様自身には全く需要がないわい。物語シリーズがお前様で成り立ってると思っておるのか！？」

「残念過ぎる主人公だな！！いや、まぁ僕で成り立ってるとは思ったことないけど」

「同じ男でもあの小僧は需要はありそうじゃがな」

「あぁ、忍野か。そういやこの話で忍野って出てきてないよな？」

「うむ。実は筆者が出すタイミングを逃して出せずに結局夏休みもあと少しで終わろうとしてるんじゃよ」

「原作ならその時期ぐらいに偽物語に入るからこの街から出て行ってるからもう出るタイミングないじゃないか」

「そうなんじゃよ。まぁ、筆者は無理矢理出すと思うがな」

「てか、フラグを立てるな」

「まぁ、儂はどっちでも良いわい。とりあえず、儂は今からモンハンをするから邪魔をするではないぞ」

「しねぇよ。てかモンハンって…完全に現代っ子じゃねぇか」

忍が影に戻り、一人になった僕は勉強をするため机に向かった。
勉強を始めて数時間後、妹達が帰ってきた。
階段を走って上がって来る音を聞いてすぐに僕の部屋の扉が勢いよく開かれた。

「ただいまんぼるー!!」

「テンション高っ!!」

「そりゃそうだろ兄ちゃん!!神原さんと夢のような時間を過ごせたんだから」

「そうだよお兄ちゃん!!まぁ、友達のいないお兄ちゃんにはわからないだろうけど」

「その神原は誰に紹介されたと思ってやがる」

「えーと羽川さん?」

「違う」

「撫子ちゃん?」

「違う」

「戦場ヶ原さん?」

「違う!!だいたいお前達にはまだ紹介していない」

「じゃあ、八九寺ちゃん？」

「それもお前達はまだ知らないはずだ！！」

「じゃあ、忍野さんだ！！」

「それこそ一番違うよ！！原作でもお前達は見たことないからな。なんで知ってるんだよ」

「あれ？何でだろ？てか、知ってる中で神原さんと関係がある人はもういないぜ？」

「僕だよ！！」

「またまた冗談を。それが本当だったら口でスパゲッティを食ってやるよ」

「ただの食事だよ！！」

「冗談だよ。兄ちゃんには感謝してるぜ。なぁ、月火ちゃん」

「うん！！生まれて初めて私達の役に立ったよ！！」

「笑顔で酷いことを言わないでくれ」

「それより本当楽しかったなぁ。あんなことやこんなことして」

「あんなことやこんなことって何だ！？まさか神原のやつお前達に手を出したのか！？」

「そんなわけないじゃん。兄ちゃんじゃあるまいし」

「そうだよ。手を出すのはお兄ちゃんぐらいだよ」

僕は兄としての立場がなんでこんなにもないんだ。

僕ほど好青年はいないぞ。

「そうだ。これからは私達を敬った方がいいぜ、兄ちゃん」

「何が嬉しくてお前達を敬わなければならないんだよ」

「ふっふっふ。聞いて驚くな兄ちゃん!!なんと私達姉妹の話である偽物語がアニメ化が決定したのだ!!」

「あ…あぁ」

「反応薄!!もっと驚きとかツッコミとかしろよ!!」

「仕方がないよ火憐ちゃん。お兄ちゃんの頭じゃ思考回路が追いつかないんだよ」

「あぁ、なるほどな。悪かったよ兄ちゃん」

「おい、お前ら。どれだけ実の兄を馬鹿にするんだ」

てか、忍に1回聞かされてるから驚けねぇんだよ。

「馬鹿なのは事実じゃん」

「馬鹿じゃねぇよ!!少なくともお前よりかはマシだよ、この鳥頭」

「そんなこと言ってもいいのかな?偽物語の主人公は私達なんだし、兄ちゃんが出なくても問題はないんだぜ?」

「いや、主人公は僕だから」

「そんなわけないじゃん!!そりゃ化物語は兄ちゃんが主人公だったけどさぁ、偽物語は、サブタイトルがかれんビーとつきひフェニックスだぜ?完全に私達じゃん」

「じゃあ化物語の各話のサブタイトルを言ってみろ」

「えーと…ひたぎクラブ、まよいマイマイ、するがモンキー、なでこスネイク、つばさキャットじゃん」

「お前達と一緒で全員名前が入ってるだろ」

「なんと!!」

「じゃあ、結局はまたお兄ちゃんが主人公ってことなの?」

「あぁ、そうだ」

「いや、兄ちゃんが居なくても話が進むはずだ!!」

「進まねぇよ!!」

誰が怪異を対処するんだよ。

「ちぇっ。なんだよ兄ちゃんばっかり」

「いや、そんなこと言われても」

閑話休題

「それより神原の家で何してたんだよ?神原の家ってゲームとかも無いし」

「ひーみーつ。あれだよ、女同士の秘密ってやつだ」

「まぁ、神原に何もされてないんなら別に良いけど」

「しかも、また遊ぶ約束をしちゃったんだよ」

「でもさぁ、その時に何故か駿河さんに次に会う時にはスクール水着を持って来てほしいって言われたんだけど何でだろうな」

「うーん。あれじゃない?駿河さんの中学とは違うかったから気になって見たいんじゃない?」

「あーなるほどな。さすが月火ちゃん」

「おい、我が妹達よ」

「何だよその喋り方は」

「今言ってたことは本当なのか?」

「うん。帰り際に言われたけど」

「よく教えてくれた。僕は今から用事があるから部屋から出て行ってくれるか？」
「何だよ急に。せっかく話をしてやってたのにさ」
「話ならまた後で聞くからとりあえず、今は撤退してくれ」
「仕方ないなぁ。行こう月火ちゃん」
「そうだね」
そう言って妹達が部屋から出て行ったのを確認してから僕は携帯を手にし、アドレス帳から神原の電話番号を押し電話をかけた。
「神原駿河、阿良々木先輩のエロ奴隷だ」
「誤解されるから頼むからやめてくれ」
「その声と性癖は阿良々木先輩だな」
「お前は声で性癖がわかるのか！？」
「エロの貴公子をなめてもらっては困るぞ」
「お前は女だから貴公子って時点で間違ってるよ」
「うむぅ。ならエロの貴公子は阿良々木先輩に譲ろう」
「いらねぇよ！！」
「遠慮はいらないぞ。私は阿良々木先輩なら喜んで譲ろう」

「だからいらねぇよ！！」

「なら私が女である以上エロの貴公子の称号はつけられないのだからどうしたらいいのだ！？」

「知るか！！」

「じゃあ、永久欠番ならぬ永久欠名だな」

「もう勝手にしてくれ」

「それより話があるのではなかったのか？」

「あぁ、思わず切りそうになったよ。お前、妹達の帰り際に言ったことわかるな？」

「あぁ。次に会う時にスクール水着を持って来てほしいと頼んだ！！」

「包み隠さずストレートに言うとこがカッコイイ！！」

「楽しみにしてるぞ」

「おぉ。楽しみにしておいてくれ……じゃねぇよ！！お前はなんで妹達にそんなこと言ってんだよ！！」

「なんでって下心丸出しだからに決まってるではないか。ダメなのか？」

「ダメに決まっているだろうが！！」

「しかし、阿良々木先輩は妹達に手を出すなとは言ったが衣類を借りるなとは言ってなかったではないか」

「普通に考えればわかるから言わなかったんだよ」

「でも、手を出してはいけないし衣類も借りてはいけないし酷だぞ」

「当たり前のことだ！！」

「とりあえず、次回は持って来てもらうってことで良いんだな」

「会いたくないんだな？」「すまない、私が悪かった。お詫びとして裸で体に阿良々木先輩と書いて街中を走ろう」

「僕の評価が瞬殺だよ！！なんでそんなことをするんだよ」

「私がしたいからだ」

「お前の私欲のために阿良々木家はこの街から出て行かなきゃならねぇよ！！」

「それは困るな。阿良々木先輩が居なくなられては私が困る」

「神原…」

「私の部屋は誰が片付けるんだ」

「お前がやれよ」

「それより話を戻そうではないか。何の話をしてたのだったっけ…
…あぁ、そうだ私が今裸かどうかの話だったな」

「違うよ!!お前が妹達に言った内容についてだよ!!」

「残念ながら私は服を着ている」

「何が残念だよ!!別に残念だとは思ってないよ」

「そうか、なら私は脱げば良いんだな?」

「頼むから投げたボールを投げ返してくれ。まぁ、いいよ。それよ
り次会うときはスクール水着は禁止だわかったな?」

「なら聞くが阿良々木先輩は火憐ちゃんや月火ちゃんの水着を見て
何も思わないのか!?」

「思うわけねぇだろ!!どんなシスコン野郎だよ!!」

「何!?阿良々木先輩ともあろう人が妹の水着を見ても何も思わな
いだと!?私なんか今この話をしているだけで興奮してきたぞ。と
りあえず、服を脱がs」

「とりあえず、わかったな!?持って行かさねぇからな」

そう僕は言い放つと電話を強制的に切った。
これ以上話していると僕まで変態と思われてしまうからな。

こうして不安な日曜を終え、その後は平穏な日々を過ごし、夏休み
最後の日を迎えるのであった。

宿題を残して。

こよみデイリー　２６（後書き）

暦「暦です」

忍野メメ「メメでーす」

暦「なんでお前がここにいるんだよ！！」

メメ「そんな必死になってどうしたんだい。何か良いことでもあったのかい？」

暦「だから何でお前がここにいるんだよ」

メメ「いやー僕が一番ビックリしてるよ。なんて言ったって本編未登場なのに初登場が後書きなんだからねぇ」

暦「断れよ！！」

メメ「ここで断ったら次がいつになるかわからないだろ？」

暦「まぁそうだけどさ」

メメ「僕だってそりゃ少しは出たいものさ」

暦「忍野からその言葉を聞きたくなかったよ」

メメ「そうかい？」

暦「そうだ。予告編クイズは無しで良いよな？」

メメ「あぁ、僕はそんなキャラじゃないからねぇ」

暦「えーじゃあ、次回、こよみデイリー２７」

メメ「次回は忍ちゃんが活躍かい？」

こよみデイリー　27（前書き）

鬼物語、読破しました。
ネタバレになるのであんまり言わないですが感動しました。

鬼物語のやりとりもネタバレにならない程度に若干使わせていただきました。

こよみデイリー　27

夏休み最後の日、僕は絶望を感じていた。
前話を読んでもらえてたら予想はつくとは思うが僕が何故絶望を感じているのかを一応言っておこう。

「宿題が終わってねぇー！！」

「いきなり大声を出すでない。せっかくクレヨンしんちゃんを見ておるのに」

忍は今、僕の携帯でテレビを見ている状態であった。

「僕が絶望を味わっている時にお前は夏休み恒例のアニメ大会見やがって」

「お前様が悪いんじゃろ。儂には関係ない」

「助けてよーのぶえもん」

「ドラえもんみたいな言い方をするでない！！」

「別にいいだろ。そろそろ傾物語の時期だし」

「そんなメタな理由で呼ばれるとは思わなかったわい」

「それより何か道具を出してよー」

「そんなものあるか！！ドラえもんは未来から来たロボットじゃが

儂は過去からいる怪異じゃぞ」

「僕の忍が怪異なわけがない！！」

「某アニメの名前みたいに言うでない」

「過去に戻れたりとか出来ないのか？」

「できるぞ」

「だよなぁ。さすがに過去に戻れたりできるよなぁ……え！？今なんて！？」

「だからできるぞ」

「マジで！？」

「うむ。ただし、それは原作の傾物語で書いておるからやらないほうが良いな」

「確かにそれもそうだな。じゃあ、どうすんだよー」

「儂に馬鹿な相談する暇があれば宿題をすればよいじゃろうが」

「お前はミスドの恩を仇で返すのか！？」

「それとこれとは別じゃ」

「しかし、これは本当にピンチだな」

「そんなに残っておるのか？」

「3分の1ぐらい」

「なら本気を出せば終わる範囲じゃろ」

「僕の辞書に本気という文字はない！！」

「ものすごいカッコ悪！！ナポレオンの価値が下がるわい」

「僕の辞書に不可能はある！！」

「一般人じゃな。そんなアホなこと言ってる暇があればさっさと宿題をせんか」

「やれやれと言われたらやりたく無くなるんだよ」

「お前様は子供か！！」

「少年の心を忘れていないのさ」

「救いようのない男じゃな」

「なぁ、忍ー手伝ってくれよ」

「知らん。儂には関係のないことじゃ」

「手伝ってくれたらキスしたり全身揉んでやるから」

「お前様しか得していないじゃろ、それ」

「何故バレた!?」

「じゃあ、もし僕の宿題が終わったら忍、八九寺、余接ちゃんを一つの部屋に集めたボーナスステージを用意してくれ!!」

「ネタバレとは最低じゃの」

「大丈夫だ。それほど本題には影響はないから」

「まぁ、これから読む人の影響に出ないんじゃったら構わんが」

「ただ、僕が興奮していただけだ」

「気持ち悪!!」

「金髪幼女に気持ち悪いと言われた!?」

しかし…なんだろう。
このゾクゾクする気持ちは。
忍に冷たい目で見られるとなんだか興奮する。

「だんだんと猿の娘みたいになってきておるぞ」

「僕は神原みたいに変態ではない!!」

「十分変態ではないか。それが変態でないならこの世に変態は存在せんわ」

「僕のどこが変態なんだ。僕は金髪幼女に冷たい目で見下されたり、

裸足キックを喰うのが好きなだけだ」

「儂が間違っておった。お前様は変態ではない」

「わかったなら良いけど」

「変態ロリコン野郎じゃ」

「何か増えた！！」

「人間に対して儂は別に思うことはないんじゃが、最近は何故か委員長の娘や蟹の娘のことが可哀想になってきたわい……はぁ」

「ため息をつくな。ため息をつくと幸せが逃げていくらしいぜ」

「まぁ、お前様の場合幸せより周りから人が逃げて行くと思うがな」

「うるせぇ！！」

「お前様の相手をしてたら腹が減ったわい。ミスドに行くぞ」

「ちょっと待て」

「何じゃ？早く行かんと閉まってしまうぞ？」

「閉まらねぇよ！！今何時だと思ってるんだよ！！まだ朝の１０時だぞ。それより今まで黙ってたんだが……なんでお前は吸血鬼なのに朝起きてんだよ！！」

「何を言っておる。早寝早起きをしなければ体調を崩すぞ」

「吸血鬼の口から一番その言葉を聞きたくなかったよ！！」

「生活リズムも崩れてしまうしな」

「吸血鬼は夜起きて朝寝るのが基本だから、逆にお前のはリズム狂ってるんだよ」

「仕方ないじゃろ。早く起きんかったらしんちゃんもプリキュアも見れんからな」

「別に見なくて良いだろ」

「儂の楽しみなのじゃ」

「じゃあ、夏休みが終わったらどうすんだよ？それも8月いっぱいかやっても9月の最初の方までだぞ」

「じゃったら、スッキリ！！を見てから少し休憩してからひるおび！を見る」

「主婦か！！」

「主婦って、別にお前様と結婚なんてしておらんぞ。いや…その…なに…お前様がしてくれと言うんじゃったら…してやらんでもないが」

「言うかぁ！！」

なに、頬を赤くしてモジモジしてるんだよ。
可愛い過ぎるじゃねぇか。

「さて、それじゃあ落ち着いたところでミスドでも行くかの」

「行かねぇよ！！」

「ミスドを買ってもらうお礼に宿題を手伝ってやろうかと思ったのじゃが」

「忍、何してるんだ？早くミスド行くぞ」

「単純な奴じゃな」

そうして僕はミスドへ行き帰って来た頃には平日ならひるおびが始まろうとする時間になっていた。

「さて、忍。宿題するぞ。歴史は前に忍が教えてくれて終わってるから、後は国語と英語だ」

「言っておくが儂は歴史以外わからんぞ」

「は？」

「当たり前じゃろ。儂は人間ではない。怪異じゃぞ？しかも儂は日本語を主として生きておらんかったし。ちゅーかほとんど使っておらんかったし」

「じゃあ、英語なら」

「英語もようわからん」

「お前、さては確信犯だな！！」

「なんのことじゃ？」

「出来ないのわかってて僕にミスドを買わしたろ？」

「ミスド？何のことじゃ？」

「その目の前にあるミスドのこと……って無い！？いつ食ったんだよ！！」

「儂には何のことかさっぱりじゃ」

「こいつ…」

「さぁ、儂には難しい過ぎて手伝えんからお前様ががんばってくれ」

「わかったよ。わからないものを手伝えって言っても無理だしな。ミスドのお礼はキスで許してやる」

「結局そこかい！！」

「ほら早く僕の口にｓ」

「吸血鬼ぱんち」

金髪幼女のアッパーを喰らった僕は意識を失いベッドの上に倒れこんだ。

そして、目を覚ました僕は外を見た。

「あー気を失ってたのか。まだ明るいってことはそんなに時間は立ってないのか。さて、諦めて宿題をするか」

と、時計に目をやる。
７時１０分。
あれ？時計壊れてるのか？
それとも、空がぶっ壊れてるのか？

「兄ちゃん起きろー」

「お兄ちゃん起きなよー」

「え？」

そう。
壊れていたのは、時計でもなく空でもなく僕の頭であった。

「なぁ、今日って何日だ？」

「８月２９日だけど」

「始業式の日がある？」

「うん。まだ、寝ぼけてるのかよ」

僕が意識を無くしてた時間は数時間ではなく、丸一日であった。
そして、
宿題終わってねぇーーー！！

「あー体がダルいなぁ。風邪かなぁ。今日は学校休まなくっちゃ」

「何言ってんだよ兄ちゃん。馬鹿が風邪ひくはずないだろ」

「それは間違ってるよ火憐ちゃん」

おっ、まさかの月火がフォローしてくれるとは。

「馬鹿だから体調管理が出来なくて風邪をひくんだよ」

するわけねぇよな。

うん。わかってたよ。

わかってたけどもしかしたらって希望を持っていたのに。

「あぁ、なるほど!!さすが月火ちゃん!!」

「あぁ、なるほどじゃねぇよ!!」

「元気じゃねぇか兄ちゃん」

しまった。ついツッコミを入れてしまった。

「今治ったんだよ」

「そっか。ならよかった」

こいつらにはもう少し人を疑うことを教えた方がいいのか？

結局、学校を休めなかった僕は宿題を終わらせていないまま登校することになった。

学校に登校したら羽川と戦場ヶ原に2回ずつ殺されることになるんだろうなぁ。
登校して羽川と戦場ヶ原に投降か。
と馬鹿なことを考えていると目の前に久々に姿を見る女子小学生がいた。

まぁ、八九寺だけど。
悪いが八九寺、僕は宿題が終わってないせいで憂鬱なんだ。
構ってる暇なんて無いんだよ。

そう思いながら走り出した。
いつも通り八九寺に向かって。

「はーーつぅいーーくぅーーずぃーー」

「ぎゃあああ!!」

「もっと触らせろ!もっと揉ませろ!もっと舐めさせろ!!」

「きゃー!!きゃー!!」
「コラ、暴れるな。キスが出来ねぇだろ」

「ガブッ!!」

「痛えー!!何すんだこいつは!!」

やっぱり、痛いのも何すんだこいつも僕であった。

「あぁ、阿良ロリさんでしたか」

「僕をロリコンみたいに言うな。僕の名前は阿良々木だ」

「違います！！阿良ロリです！！」

「本人が言っているのに否定された！！」

「阿良々木さんはもう阿良ロリとして市役所に名前を変更してもらいましたから」

「他人が言って変更出来るの！？しかもやむを得ない理由もないのに！？」

「阿良々木さんが小学生以下の女の子にセクハラばっかりしていますと言ったらなんか受理されました」

「市役所の人達仕事をしろ！！つか、逆にそれだけでよく済んだな。警察とか動きそうな理由じゃねぇか」

「そこは私の権力です」

「八九寺Ｐの力は市役所までも動かせるのか！？」

「当たり前です。それより遅れましたが阿良々木さんお久しぶりです」

「あぁ、久しぶりだな。もう会えないかと思ったぜ」

「心配しなくてもこの話では私はずっといますから。この話にルールはありませんから」

「ん？何を言ってるかよくわからないんだけど」

「わからなかったわからない方がいいんです。現実世界の方では感動の話になりましたからね」

「まぁ、良いけど。それよりずっといるのは当たり前だろ。お前がいなくなったら誰が僕の嫁になるんだよ」

「なんで勝手に私と結婚することになってるんですか！！」

「約束したろう。昔、八九寺が大きくなったら暦お兄ちゃんと結婚するって言ってたじゃないか」

「言ってもないし、私と阿良々木さんが出会ったのは３ヶ月前です！！」

「じゃあ、前世で約束したんだな」

「前世がミジンコの阿良々木さんになんで私が結婚の約束をするんですか。だいたい私は暦お兄ちゃんだなんて死んでも呼びません。まぁ、もう死んでいますが」

「そんな自虐ネタいらねぇよ。…てか僕の前世ミジンコ！？」

「知らなかったんですか？ちなみにミジンコの前は単１電池ですよ」

「日常生活で必要性があまりない！！」

「今の阿良々木さんにピッタリです」

「僕はこの話には必要性がある！！」

「それより、阿良々木さん」

「あん？」

「学校に行かなくていいんですか？」

時計を見ると８時１０分わ回っていた。

「やっべー。もうこんな時間かよ」

「まぁ、宿題が終わっていない阿良々木さんが行っても意味ないでしょうけど」

「なんで終わってないことをお前が知っているんだよ」

「そんなこと１００人中１０１人が夏休みが始まる前からわかっていたことです」

「超えた１人はどっから湧いて出てきた……てか、どんだけ僕はダメな奴だと思われてるんだよ」

「実際その思ってた通りになりましたけどね」

「だからこれ以上反論が出来ない」

「それではこれ以上話していると阿良々木さんが遅刻してしまいますので私はこれで失礼しますね」

「あぁ、じゃあまたな」

「またお会いしましょう」

そう言って別れた後、僕は学校に向けて再出発した。

こよみデイリー　27（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「ついに偽物語アニメ化決定！！イェーイ！！」

月火「イェーイ！！」

火憐「ついに私達が主役の話だな！！」

月火「そうだね。今まではお兄ちゃんを起こすところしか場面がなかったからね」

火憐「暴れまくっやるぜ！！」

月火「やるぜ！！」

火憐「それでは、予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「最近たまに兄ちゃんに後書きを乗っ取られてねぇ？」

月火「確かにそれはそうだ！！」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー２８」

火憐「逆に本編を私達が乗っ取ってやろうか？」

月火「賛成ー！！」

こよみデイリー　２８（前書き）

今回は若干長めです。

長めと言ってもグダグダですが。

こよみデイリー　28

学校へ着いた僕は自分の教室へと向かった。
教室に入ると羽川と目があった。

「おはよう阿良々木君」

「おはよう」

「どうしたの？元気が無いみたいだけど」

うっ…いきなり気付いたか。

「い、いや…別に何もないよ」

「もしかして宿題やってないとか？」

「え？」

「冗談だよ、冗談。いくら阿良々木君でもさすがにちゃんとしてきてるよね」

「あ…あの…」

「もしかしてやってきてないの？」

「すいませんでした！！」

その瞬間、直江津高校のとある教室には直江津史上一番綺麗であろ

う土下座姿の僕がいた。

「いや、私に謝られても」

「羽川にあれだけ早くやれと言われてたのにやらなかったんだから羽川にも謝るのが筋だ。怒られる覚悟はできている。むしろ怒ってくれ、説教をしてくれ、罵ってくれ！！」

「ごめん。阿良々木君のキャラが改めて掴めない。いや、だいたいはわかってるんだけれど」

その後すぐに、羽川は始業式の後に配る資料を取りに職員室へ向かって行った。

「あー早く今日が過ぎてくれねぇかなぁ」

そう机の上で項垂れていると

「あらあら、大きいゴキブリの死骸かと思ったら阿良々木君じゃない」

「新学期早々ゴキブリの死骸発言かよ！！相変わらずの毒舌だな」

「この話ではそう簡単にはデレないわよ」

「何の話だ？」

「偽物語では夏休みにデレたけれど、あれは若気の至りよ」

「いや、偽物語でもこの物語でも年齢は一緒だから」

「阿良々木君のくせに反論をする気？」

「事実を言っただけだろ」

「それより阿良々木君。項垂れていたけれどどうしたの？」

「え？あ…いや…なんでもない」

「なによ、すっきりしない言い方ね。はっきり言いなさいよ、はっきり。あ、でも存在がはっきりしてないから無理なのよね。ごめんなさい」

「謝るな！！それにはっきりしてるよ！！確実にここに生きてる証を示してるよ！！」

「生きてる証？まずは――その幻想をぶち壊す」

「お前はどこぞの幻想殺しだよ！！だいたい幻想じゃねぇよ！！現実だよ！！」

「え？阿良々木君って現実に生きてるの？」

「当たり前だ！！なんなら戸籍謄本持って来てやろうか！？」

「そんな必死にならなくても」

「お前が疑うだからだろうが！！何呆れた顔してるんだよ！！」

「本気で疑う気あるわけないじゃない。嫌がらせで言っていたのよ」

「それを最近ではいじめと言うのですよ戦場ヶ原さん」

「いじめじゃないわ。いじりよ」

「こんな嫌がらせのいじりがあってたまるか！！」

「で、本当の理由はなんなの？項垂れてた理由は」

「申し訳ございませんが宿題が終わっていません」

「今日、学校が終わったら私の家に集合」

「はい」

こうして僕は戦場ヶ原から召集命令が下された。

宿題を忘れたといっても僕の評価は無いに等しいと言ってもいいぐらいだったため、先生からはあまり言われることは無かった。
どちらかというと見放されてるというか、これ以上言うと情けなくなるので辞めておこう。

学校が終わった後、僕は戦場ヶ原の家へ向かった。

「あら、思ったより早かったわね」

「駄目だったか？」

「阿良々木君のことだから先生に怒られ……あぁ、見放されているから怒られないんだったのよね」

事実のため言い返す言葉が見つからない。

「それより早く入って頂戴。阿良々木君なんかを家に入れているのを周りに見られたら恥ずかしいじゃない」

「どういう意味だ！！」

「そういう意味よ」

「さて、優しいひたぎ様が今から阿良々木君の宿題を手伝ってあげます」

「マジで！？ありがとうございます！！そして、すいませんでした」

「生きてて？」

「そっちに対して謝ってないよ！！」

「そうよね。阿良々木君は存在がはっきりしていないのだったわね」

「その設定まだ生きてたの！？」

「えぇ。阿良々木君は生きてないけど設定は生きているわよ……なんちゃって」

「僕は確実に生きてるよ！！」

だいたい最後のなんちゃってって何だよ。

無表情で言う言葉じゃねぇだろ。

「で、何が終わっていないのかしら？」

「国語と英語です」

「まぁ、終わらなかったのは学校のせいでもあるわね」

「何でだよ」

「考えたらわかることじゃない。偏差値０の子に勉強しろって言う方が間違っているのよ」

「だから１０の位を四捨五入するんじゃねぇよ！！だいたい今は５０以上あるよ」

「何ですって！？阿良々木君の偏差値が５０を超えたの！？」

「素でビックリするなや！！てか、お前や羽川に勉強を教えてもらってるんだからそりゃ上がるだろ」

「私は最初から上がるなんて思っていなかったわよ。阿良々木君だし」

「酷い現実だ！！」

「酷いのは頭の方でしょ？」

「お前の性格よりかはマシだよ」

「あらあらそんなこと言っちゃって良いのかしら？阿・良・々・木・

君。そうね、ちょっとした実験をしましょ？」

「実験？」

「えぇ。このシャープペンシルを阿良々木君の目の3センチ前から芯を出して言って何回目で阿良々木君の眼球に届いて刺さるかの実験よ」

「失明するわ！！」

「失言するからよ」

「お前から先に言ってきたんだろうが」

「カチ…カチ…カチカチカチカチカチカチ」

「ぎゃー！！ごめん！！ごめん！！ごめん！！僕が悪かった！！」

「最初からそう素直に謝ればよかったのよ」

その後、戦場ヶ原に手伝ってもらいながら何とか宿題を終わらせることができた。

「阿良々木君、ご飯食べていく？」

「良いのか？」

「えぇ。もちろん」

「じゃあ、いただくよ」

「キャットフードとドッグフードとどっちが良いかしら？」「ペット扱いかよ！！」

「冗談よ」

その後はもちろんちゃんとしたご飯を食べることができた。

「ねぇ、ゴミ…ゴミ良木君」

「訂正できてないぞ」

「あらあら、私としたことがＮＧを出してしまったわ。仕方がないからがんばった大賞にでも回して頂戴」

「僕達はテレビドラマを撮ってるんじゃねぇよ」

「何よ。自分は来年は映画にも出て1月から連続アニメにも出るからって天狗になってるわけ？」

「意味がわかんねぇよ！！てか、連続アニメを連続ドラマみたいな言い方をするな」

「天狗みたいに鼻を伸ばしているといつか折るわよ。首を」

「怖いわ！！鼻は！？鼻じゃねぇの！？」

「鼻鼻うるさいわね。そんなに折ってほしいなら折ってあげるわよ。今すぐに」

「単なる傷害事件だよ」

「生涯事件？それは大袈裟よ、阿良々木君」

「あぁ、お前と会ったことでこれからの生涯は事件ばっかり起こりそうだよ」

「あらあら、厄介事に首を突っ込んでるのは阿良々木君でしょ？蟹、蝸牛、猿、蛇、猫、不死鳥、蜂一体何体の怪異と遭遇してきたのよ。逆に関心するわ」

「一つ言っておくがこの話では不死鳥と蜂はお前は知らない設定だ」

「私を誰だと思っているの？」

「まさかお前までＰが付くのか！？戦場ヶ原Ｐ」

「いいえ。戦場ヶ原ＡＤよ」

「まさかのアシスタントディレクター！？」

「違うわよ。Ａ（阿良々木）Ｄ（ディレクター）よ」

「確かに僕を指導してるけど」

「ちなみに羽川さんは羽川Ｐよ」

「Ｐは八九寺じゃないの？」

「八九寺ちゃんはＰ（プロデューサー）だけれども、羽川さんはＰ（パーフェクト）の方だから」

「羽川にはぴったりだな」

「アフターストーリーでつばさパーフェクトが発表されてもおかしくないわね」

「凄い作品になりそうだな」

「ちなみに私はひたぎピークよ」

「何だよそれ」

「文字通り私の出番が今までで一番ピークになる作品よ。簡単に言うなら語り部も私で阿良々木君なんて脇役よ」

「酷い作品になりそうだな。特に僕に対して」

「ちなみに阿良々木君はこよみデッドよ」

「主人公なのに僕死ぬの!?」

「あぁ、安心して。命を落とす方の死ぬじゃなくて社会的に死ぬ方だから」

「僕は何の犯罪を起こした!?」

「小学生にセクハラをして」

「リアルだー!!」

「リアル？貴方まさか本当にしてるんじゃないでしょうね？」

「や、やだなぁ。するわけないだろ」

「そうよね。まぁ、そんなにロリが良いなら私が小さくなってあげるわよ」

「できるわけねぇだろ」

「できるわよ。チュウさんに薬を貰えば」

「ここでＳＫＥＴ　ＤＡＮＣＥネタを挟んでくるなよ。だいたい僕達の世界にその薬なんかねぇよ」

「ボッスンやヒメコちゃんは小さくなったのにセコいじゃない」

「まぁ、世界が違うからな。てか、なんで僕がロリコンっていう設定で話が進んでるんだよ」

「え？自分で言ってなかった？」

「言ってねぇよ！！」

「「僕は阿良々木暦。好きなタイプは小学生です」って言ってたじゃない」

「頼むから。頼むからそれ以上暴走しないでくれ。この作品が消されてしまう」

「そうなればひたぎピークが連載開始よ」

「これはお前が仕組んだ罠だったのか！？」

言っておくが僕は決してロリコンではない。
八九寺の件があるからそりゃ誤解はされても文句は言えないが、あれはれっきとしたスキンシップだ。
ほら、ライオンだってじゃれる時は噛みついたりするだろ？
あれと一緒なんだよ。
まぁ、いつも噛まれているのは僕なんだけど。
最近の世の中は嫌になったもんだよ。
小学生と話していたらロリコン呼ばわりだもんな。

「そう言えば阿良々木君って怪異に取り憑かれてるんじゃない？」

「いや、まぁ吸血鬼はお前も知ってるだろ？どうしたんだよ急に」

「いえ、吸血鬼の方じゃなくて」

「それ以外は僕は無いぞ」

「おかしいわね。馬と鹿に憑かれてると思ったのだけれど」

「馬と鹿なんて見に覚えが……ってお前さては馬鹿って言いたいんだな！？」

「もしかて生まれ持った馬鹿なの！？」

「まぁ馬鹿と天才は紙一重って言うから僕も天才になるかもよ」

「っていうことは自分が馬鹿って認めていることになるのよ」

自分でフォローをしようとしたが失敗してしまった。

「話は変わるのだけれどジャコビニ流星群って知ってる？」

「あぁ、それは旧名で今はりゅう座流星群って言うんだったっけ？」

「あら、知っていたの？」

「まぁ一応」

「何故か分からないけど腹が立ったから殴って良いかしら？」

「良くないよ！！めちゃくちゃだ！！僕の人権はどこに行った！？」

「はぁ？知ってる？阿良々木君。人権と言うのは社会的に人間と認められる存在が生まれながら持っていると主張される社会的権利のことよ」

「僕は人間と認められていないのか！？」

「認められているとでも思ってたわけ？」

「当たり前だ！！」

「でも心配しないで良いわよ。阿良々木君が例え野良犬だろうと野良猫だろうと私は愛し続けるから。だから安心して保健所に行くわよ」

「処分する気満々じゃねぇか！！」

「実際に直接処分するのは私じゃなくて保健所の人よ」

「そんな屁理屈はいらない！！」

閑話休題――

「で、ジャコビニ流星群がどうしたんだよ」

「あぁ、なんだったかしら。ただ、今何故か気持ちがスッキリしたから別にいいわ。忘れて頂戴」

あぁ、どっちにしろ悪口に繋がってたのか。

聞かなきゃ良かった。

「お前が何を言おうとしてたかだいたい予想がつくよ」

「阿良々木君ごときに読まれるなんて私も落ちたものね。もう殺すしかないわね」

「物騒なことを言うな！！てかなんで僕が殺されなきゃならないんだよ！！」

「だって私が死ぬのは嫌だもの」

「ストレートでわかりやすい答えをありがとう」

「ところで阿良々木君はなんで私にタメ口なのかしら？」

「は？いきなりなんだよ」

「ここでひたぎちゃんの質問タイム。私18歳、あなたは？」

「……17歳です」

「そうよね？歳下の人が歳上の人に敬語を使うのが普通なのだけれど」

「学年は一緒だろうが！！」

「学年以外はどうなのかしら？歳、身長、成績、持ってる文房具の量」

「最後のは完全にお前有利じゃないか」

「お前？歳上の人をお前呼ばわりとはいただけないわね」

「貴方が有利じゃないですか！！」

「確かに文房具店を作るだけの量は持ってるわね」

「この狭い部屋のどこに隠し持ってるんだ！？」

「収納上手なのよ」

「いや、収納上手ってレベルじゃないと思うけど」

「さて、阿良々木君をイジメるのはここまでとして、私は今からお風呂に入るけれど阿良々木君も入って行く？」

「一緒に！？」

「一緒に入りたいの？」

「あ…いや…その…えっと……」

「冗談よ。入るなら先に入って来ていいわよ」

「いや、今日は帰ることにするよ。時間も時間だし」

「あら、そう。それじゃあ、気を付けて帰って頂戴」

「あぁ」

アパートの下まで見送りに来た戦場ヶ原と別れ、帰宅した。

こよみデイリー　２８（後書き）

火憐「火憐だぜ」

月火「月火だよ」

火憐「今年も残すとこあと２ヶ月半！！」

月火「１年って早いよね」

火憐「今年やり残したことは今のうちにやっておこう！！」

月火「まだ間に合うもんね」

火憐「ここで予告編クイズ！！」

月火「クイズ！！」

火憐「私が今年やり残したことはなんでしょうか」

月火「なんだろ？」

火憐＆月火「次回、こよみデイリー２９」

火憐「正解は今のところ無いでした」

月火「クイズとして不安定だよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1128u/

日常物語

2011年10月11日09時56分発行